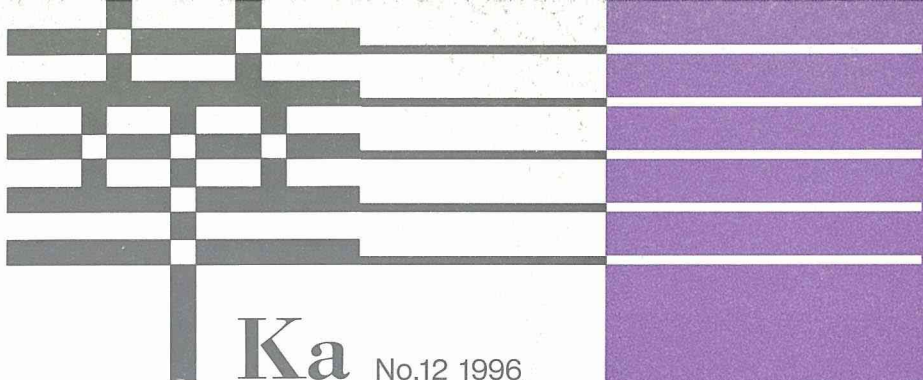


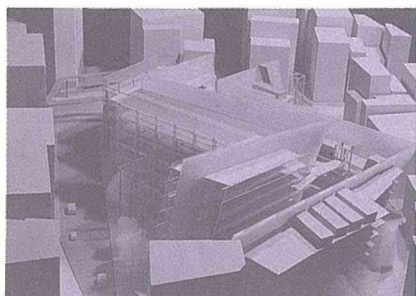
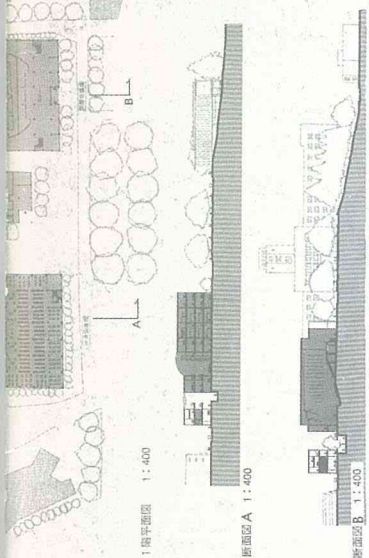
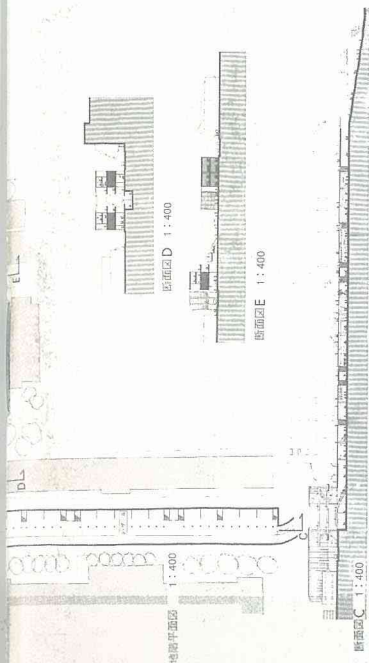
論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 12
発行日 / Pub. date	1996,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



# Ka

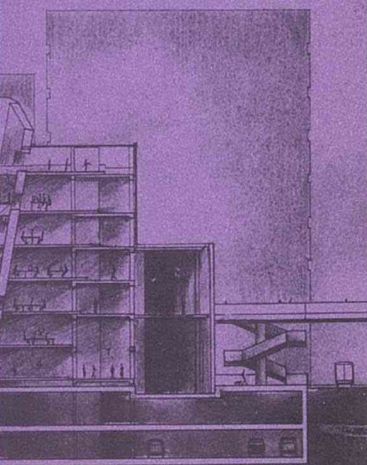
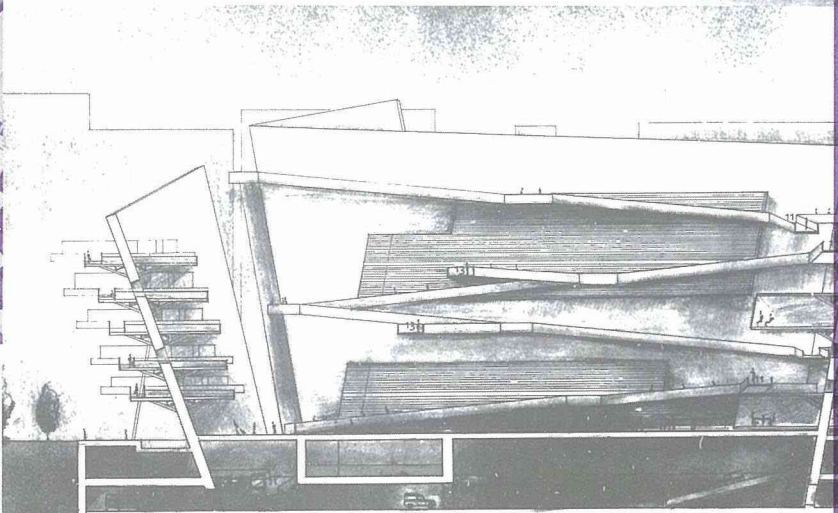
No.12 1996



1995年度設計製図第二(2年生)優秀作品より	2
1995年度設計製図第四(3年生)優秀作品より	10
1995年度卒業設計製図優秀作品・大岡山建築賞	30
エリック・パリー氏大学院特別授業	35
Visitor's View: 柳澤孝彦	40
OB作品紹介: 金箱温春	42



大岡山建築賞金賞：増山絵理奈



# 1995年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 低層集合住宅

Low-Rise Housing Development

### 講評

教授 八木幸二

この敷地に建っている同潤会アパートは、いよいよ再開発が始まり、いずれ高層棟や商業施設に生まれ変わるはずである。この春退官された志水先生がだされたこの課題では、高層化、商業化をあまり行わないで、従来より質の高い集合住宅を設計するというものであった。

2年生の前期で戸建て住宅をとりあげているので、この課題では、複数の家族に限られた外部空間を享受しながら、お互いの関係、周辺住区との関係をどのように位置づけるかが問われている。

嶋田麻君の「LABYRINTHE」は数年前の案に似ているが、豊富な平面バリエーションを組み合わせ、住棟配置も変化に富み、現実的な案である。例として示したAとBの住戸以外にも、配置図を見ると各住戸の平面をよく考えている。意図的に各戸の領域と公共空間の境を曖昧にし、通路と階段を必要以上に多くしているのも理解できるが、タイトルの末尾にEがついているのだけは迷宮入り。

池埜純一郎君の「混迷と明晰の同衾」は、まさにタイトル通り。配置図は一見明晰、平面図は異なった階を重ねて混迷、その同衾した立面図は理解しがたい。しかし、よく見聞きすると、いくつかの住棟や異なったレベルにタコ足配置した部屋の集合体として各住戸を考え、自分の家の窓から自分の家が見えるという、家族が距離を保ちながら視覚的なつながりを保つという考え方は評価できる。パズルや積木のように単位となる空間を操作して立体的迷路を作り、将来的にはその組み合わせを変えることによって増減も可能であろう。模型によるスタディーをよくやっていたのに表現の拙さが残念。

橋内英俊君の「Low-Rise Housing」は池埜君の考え方に似て、住戸をバラバラの部屋の集合としているが、その間の移動空間を重視している。「積木くずし」的な家族にならな



代官山同潤会アパート建設当時の配置図

- 担当：志水英樹教授、八木幸二教授
- 期間：10/5~11/16
- 課題主旨：関東大震災の復興事業として建てられた同潤会アパートは、日本の集合住宅の先駆的な存在である。現在さまざまな障害はあるにせよ、住みこなされたその表情は豊かであり、また集合住宅の将来を考えるうえで生きた教材でもある。課題は、この敷地に現代の集合住宅を提案するものである。
- 想定敷地：東京都渋谷区代官山町同潤会集合住宅地、南斜面の街路で囲まれた一部とする。現在12棟の連立住宅(48世帯)が建ち並び、各戸は8/3、8/

- 4.5/3、4/4.5帖の2間~3間で非常に小さいが、敷地にはさまざまな樹木が生い茂り、区の保存樹木に指定されているものも多い。面積は3385.75㎡
- 計設条件：計画戸数15戸以上、1戸の延床面積は120㎡以内、階数は2~3階で地階は認めない。居住者は、4人家族を基準として考える。駐車場を各戸に1台分確保、その他共同施設等は各自提案。
- 法規制：第二種住宅専用地域(60/300)準防火地域/第三種高度地域
- 授業内容：現地見学/敷地模型各自製作/ボリュームスタディー/エスキスチェック/講評会

いようにというつもりかもしれないが、各自が部屋に閉じこもってしまう恐れが強い。災害時の仮設住宅の集合形態としてなら良いかもしれない。

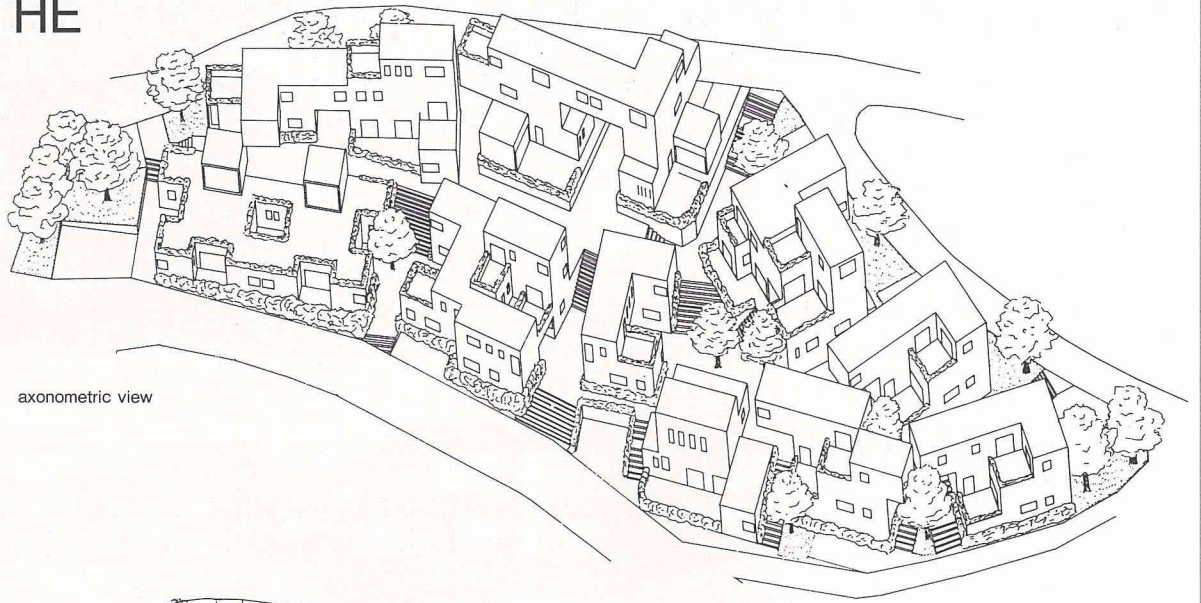
香川貴範君の「Neo-Urban Wall」は、敷地全体を丘のような公園とし、周囲には広告やアートが壁としてめぐるといふもので、住居は地下の中庭を取り囲むように配されている。現実性に欠ける点は「学生らしい」と許

されるとしても、こんなに地下深く劇場や駐車場をとると、計画上さまざまな困難が生じますよ。地上を緑にして、建物を地下にという考え方はありえますが、この場所であることと、課題が住居であることを考えると、無理があります。

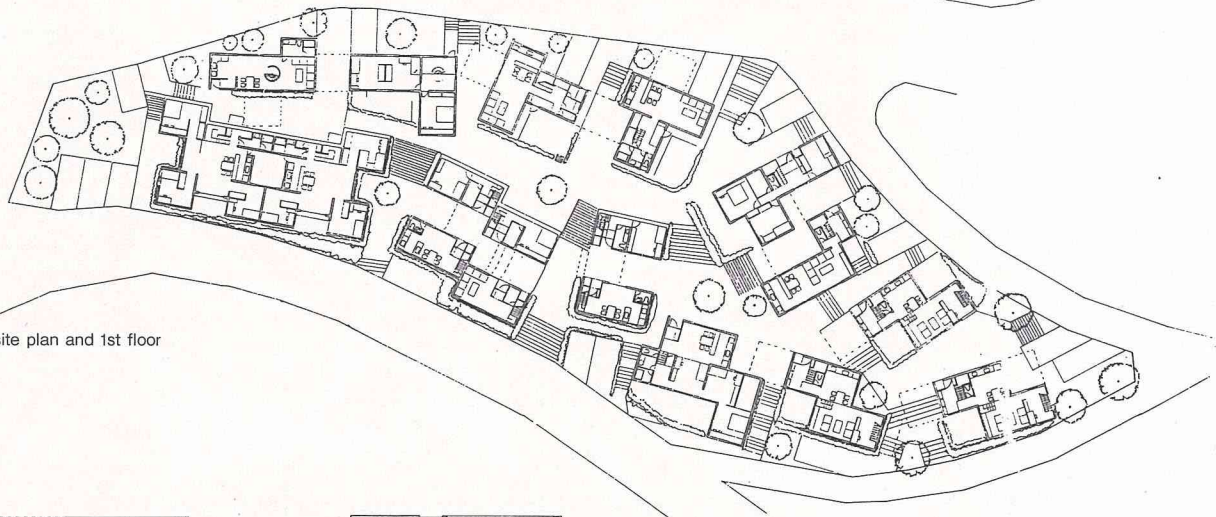
他にも良い作品がありましたので、これからの課題と、卒業設計における成果を楽しみにしています。

# LABYRINTHE

嶋田 麻  
Asa Shimada

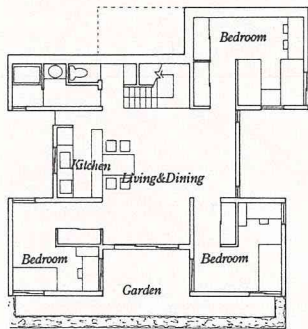


axonometric view

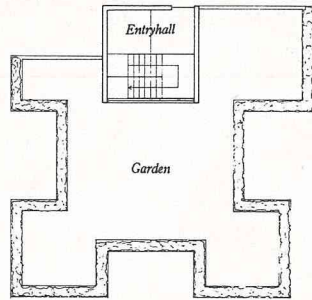


site plan and 1st floor

plan A

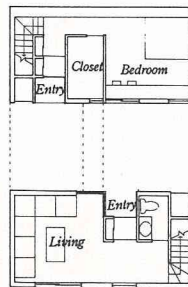


1st floor

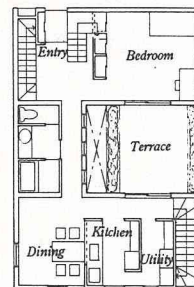


2nd floor

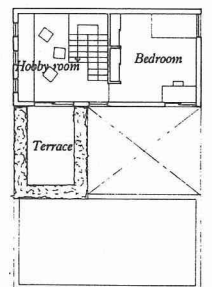
plan B



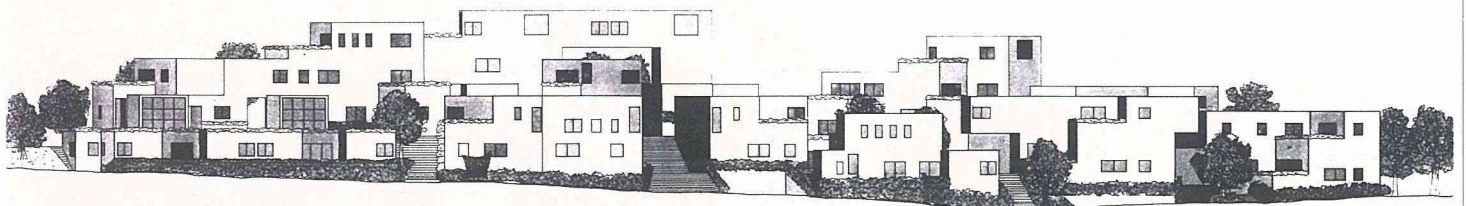
1st floor



2nd floor



3rd floor

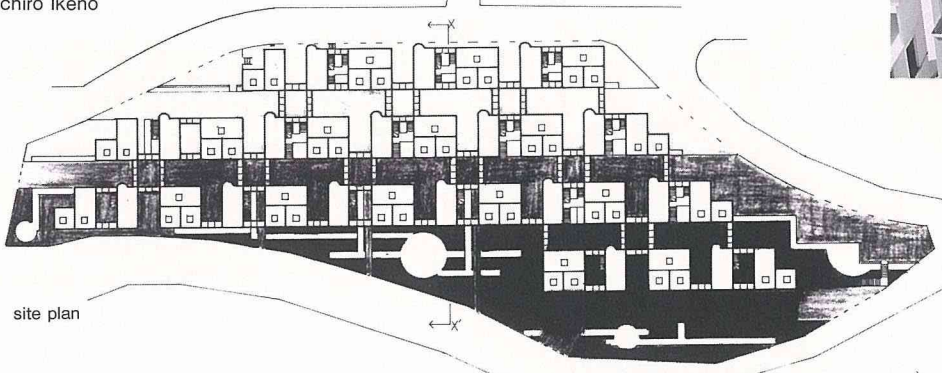
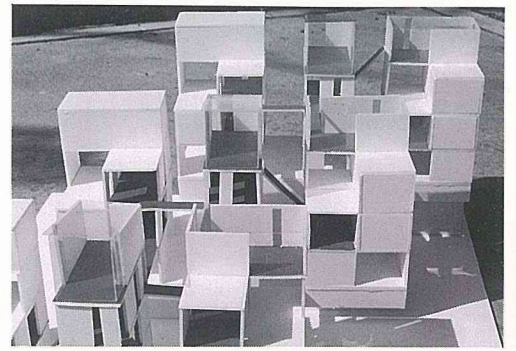


south elevation

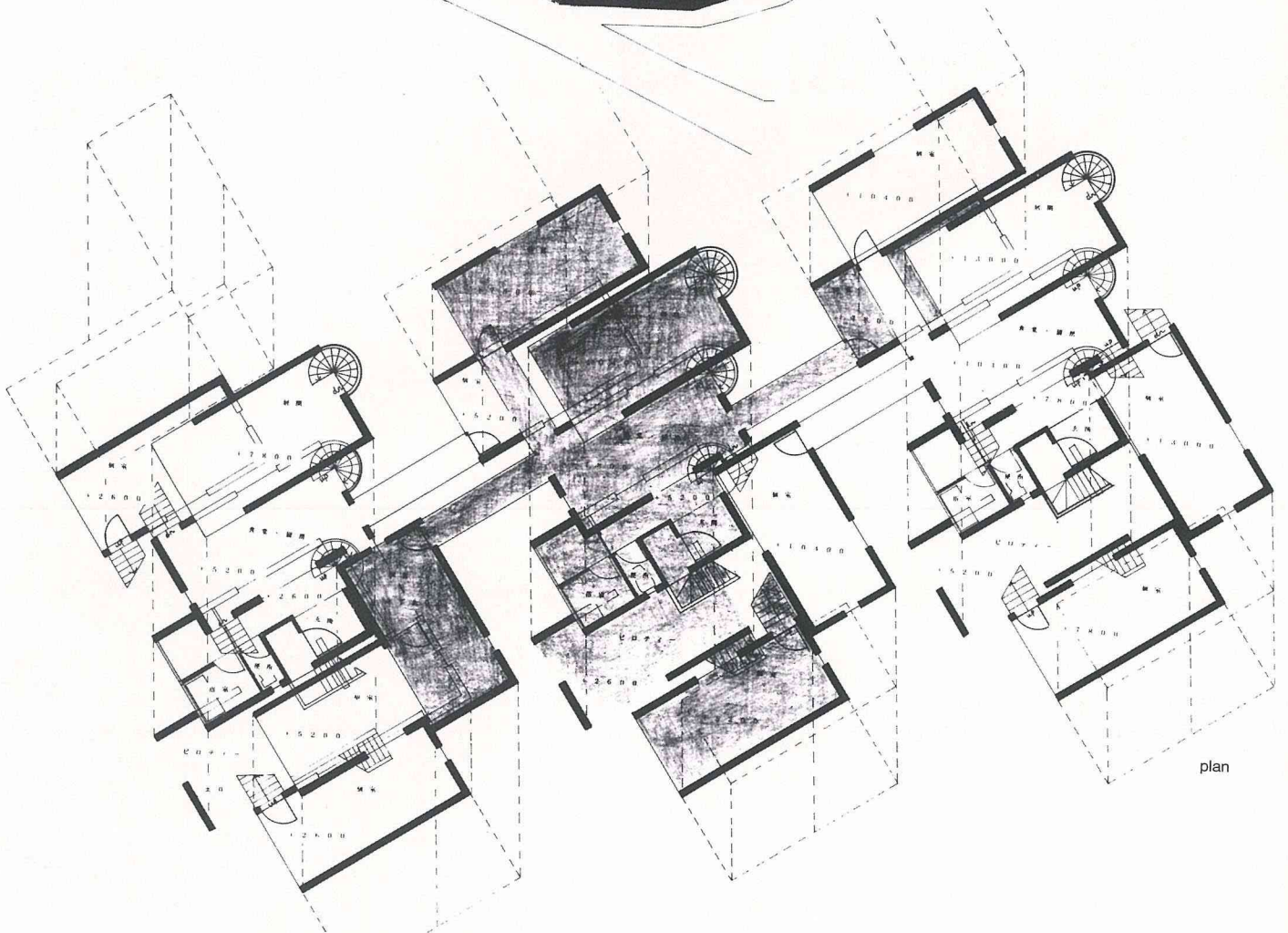
# 混迷と明晰の同衾 細分化からの再生のための病棟化

Blending Confusion and Clarity in Cellular Rehabilitation Housing

池埜純一郎  
Junichiro Ikeno

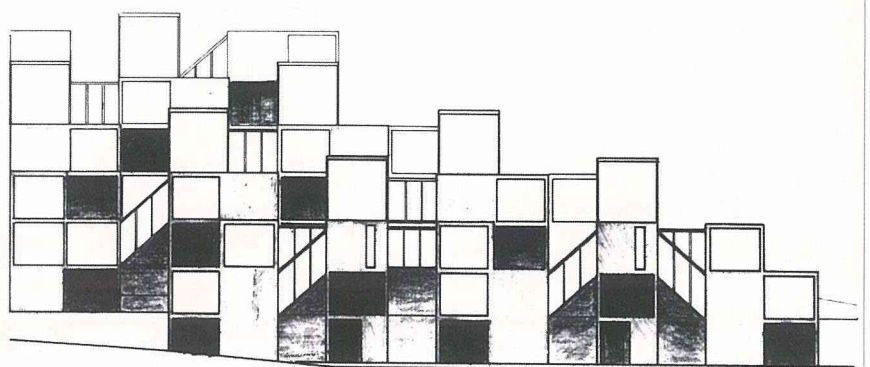
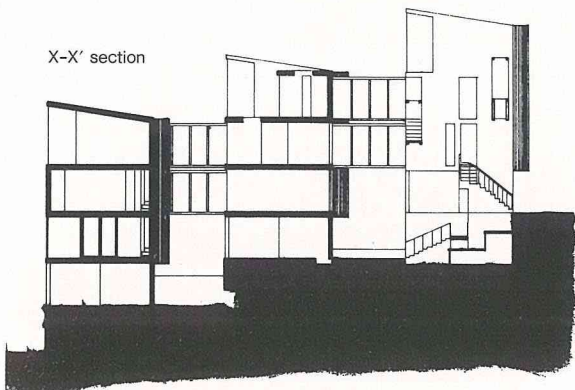


site plan



plan

X-X' section

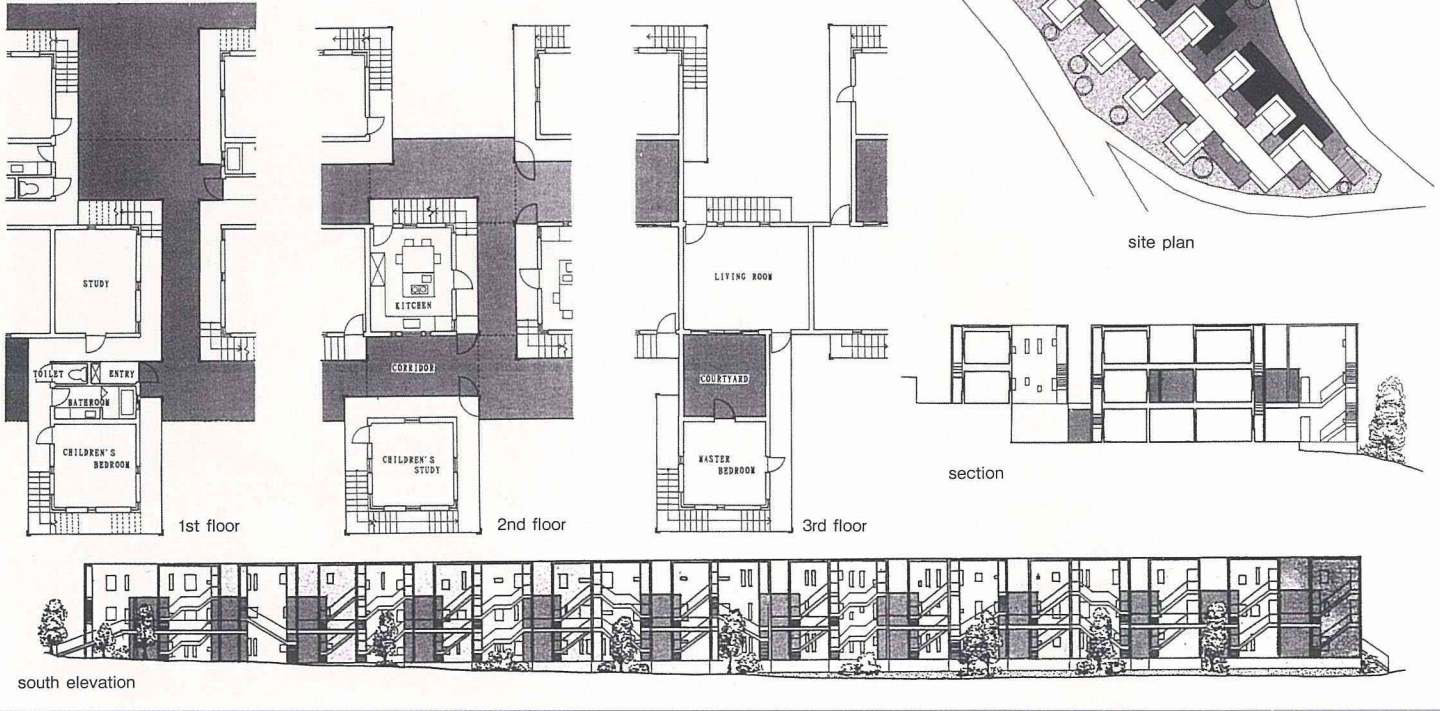


south elevation

# Low-Rise Housing

橘内英俊

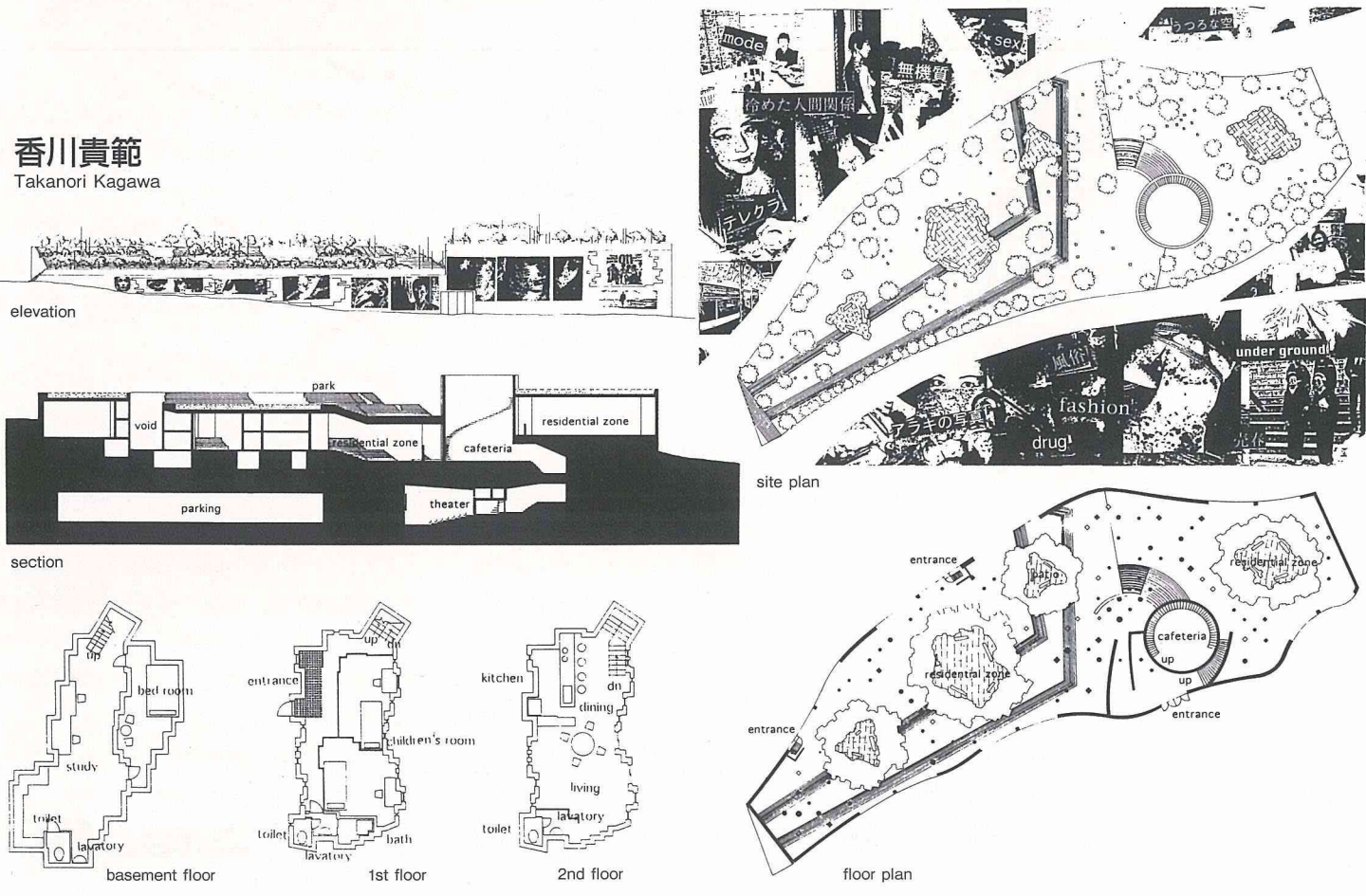
Hidetoshi Kitsunai



# Neo-Urban Wall for escaping from collaged personality

香川貴範

Takanori Kagawa



# 1995年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 大学会館 Student Center

### 講評

教授 藍澤 宏

「大学会館」は2年生の住宅以外で初めて取り組まれる最後の課題である。身体的なスケールでの把握がしやすく、日常的な問題意識をもちやすいテーマであると考えている。その課題も4年目を迎え、学生自体が先輩たちの作品を見ることができると、課題の制約から自由に構想するケースが目立ついっぽう、基本的な建築物の空間表現としての図面の記述が年々貧弱になっている状況がみられる。学生にとって製図による空間よりも、写真やグラフィックが現実を表現するのにふさわしく思えるのであろうが、建築という媒体を用いた自己表現であるならば、他者の転写や引用による論理構築がいかにか脆く、自己の喪失にしかならないことに早く気づいてほしいものである。

全体的には、エスキスを進めるプロセスで、現在の学生生活の過不足を補うという改良・改善的な思考を避け、大学の中で起こりうる多様で微細な局面を丁寧に抽出し、組み立て直すこと、またいっぽうで学生各自が大学そのものの理想像を構築するという2つの同時平行的作業をするように指導したつもりである。結果として、大半の冗長な提案の中で、浮び上がってきたのは、食堂という大きな空間をどのように扱うのか、またその食事スペースがいかにか楽しいかという点で、なんらかの提案がみえてきた作品がここに掲載されている。

池埜純一郎君の作品は、機能的な中心となる食堂がひとつのボリュームでまとめられるというより、大きな場として切り取られる。その上部には林立する柱によって持ち上げられた単純なユニットが、複雑なボイドとさまざまな屈曲した光の筋を作りだし、幻想的なホールを演出している。アプローチからシークエンス上に広がるさまざまなユニットは特に室名が与えられておらず、部屋であり集會室でもあるらしい。学生たちの建物内の散策



の中から自然に集まったり、何か事を起こそうと集まったりする現象を建築がサポートするというのが提案である。しかしながらタイトルの「新混沌と明晰の同食」は結局、現代社会を表現しただけの提案であり、見るものを煙に巻いて逃避している気がしなくもない。よりテーマを建築にダイレクトに結び付け取り組んで欲しい。

磯矢宗治君の作品は、内部空間と外部空間の図と地の反転を意識し、知覚上の魅力を意識したものである。学生が望んでいる会館とは食堂でもなく部屋でもなく、このような中性的な場が24時間開放されることだという提案であろう。空間構成をみると、通り抜けや滞留といった日常生活の中で内外の空間の連続や淀みがかさまに想定できて楽しげである。しかし、このような形態が機能的にすべてを分断し破綻している点が多くみられる。

横山天心君の作品は、書棚のごとく積み上げられた6層の部屋が巨大なBOXに挿入されており、食堂の中から課外活動の様子が掲示

板のように展開するというものである。大学会館は都市における駅前のようなものであるという位置づけは、発想のスタートとしては悪くはないが、「情報の混乱から新しい行動力を呼び覚ます」というキーワードとこの形態は、どこでどのように結び付くのか理解できない。

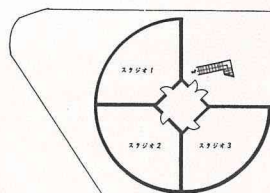
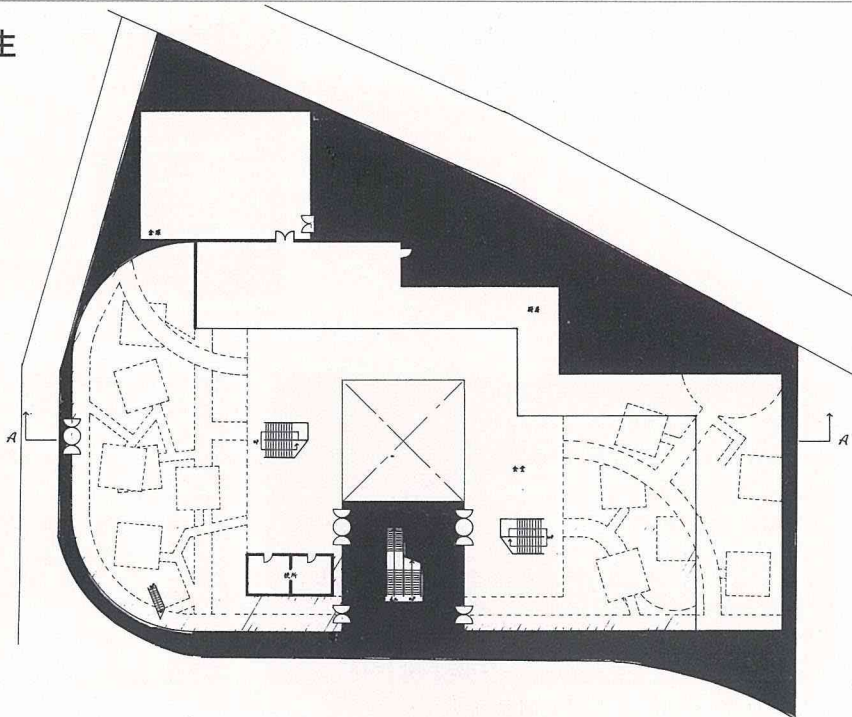
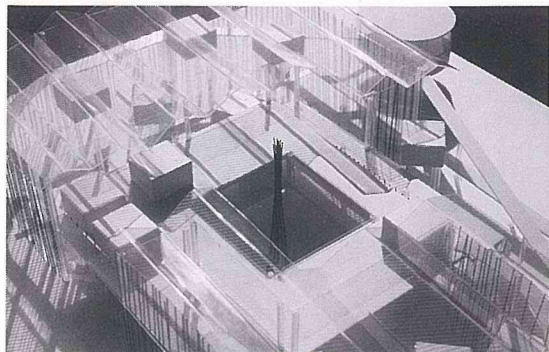
庭野淳子君の作品は、多くの先輩たちが失敗に終わっている六角形プランを比較的うまくまとめているという点で評価された。すべての部屋は六角形を崩すことなく構成されており、テーブルや椅子までも統一している。しかし、レベル差の微妙な変化とそれともなう空間変化は、図面にはほとんど表現できておらず、またこの形態がもつ自由度や可能性を追及するまでにはいたっていない点が惜しまれる。

他にも、優れた提案は多く見られたものの、図面の過不足、表現の問題により後出に誤った影響を与えるとの判断からここには掲載しなかった。

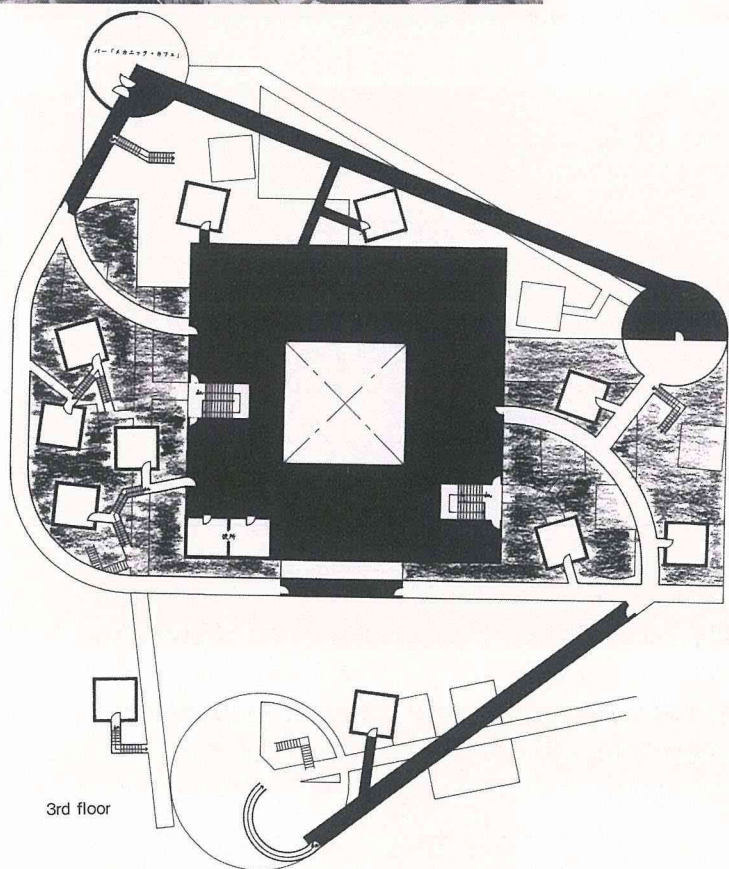
# 新混迷と明晰の同衾TITに見る再生

Neo-Blending of Confusion and Clarity at TIT

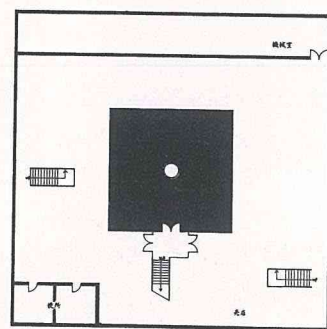
池埜純一郎  
Junichiro Ikeno



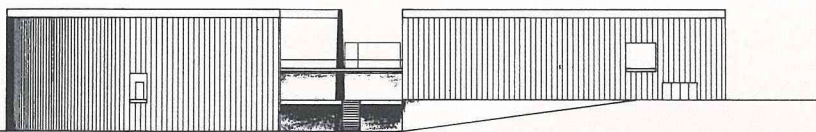
site plan and 1st floor



3rd floor



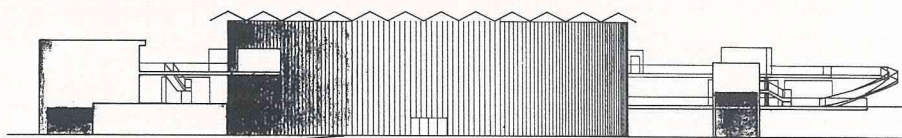
basement floor



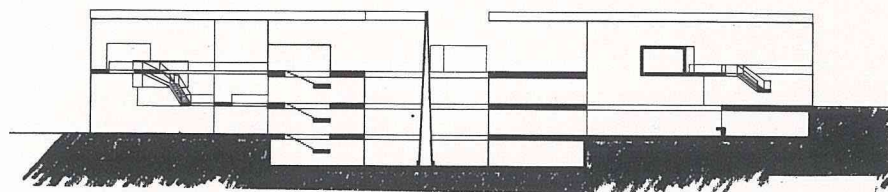
south elevation

対話

section



west elevation



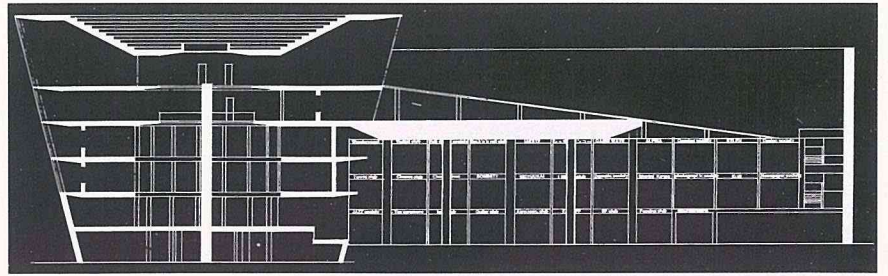
散策

共時性

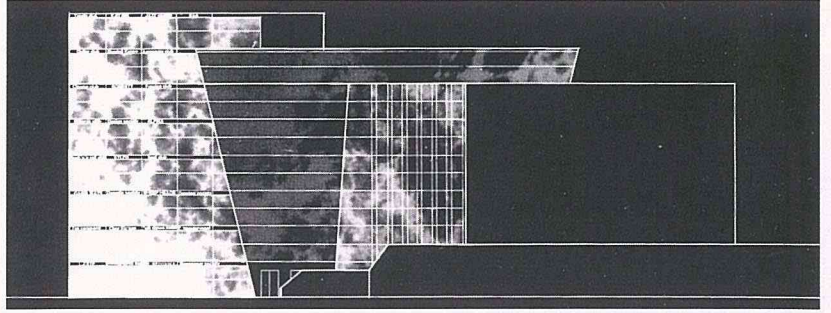
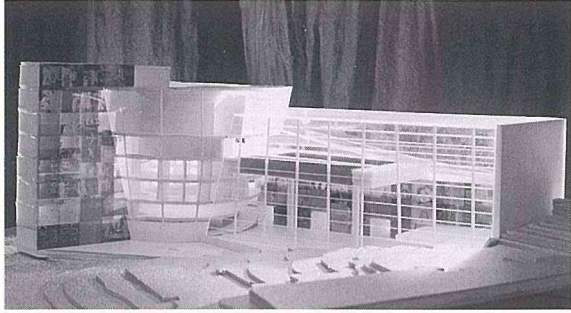
# Information Jungle

横山天心

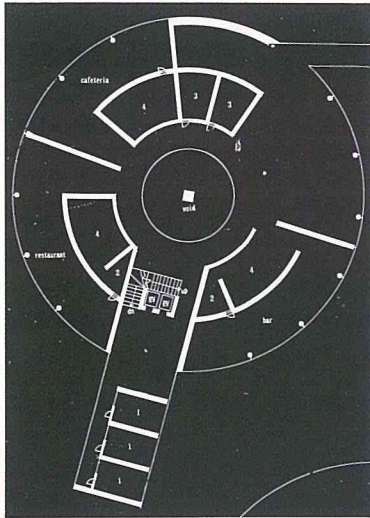
Tenshin Yokoyama



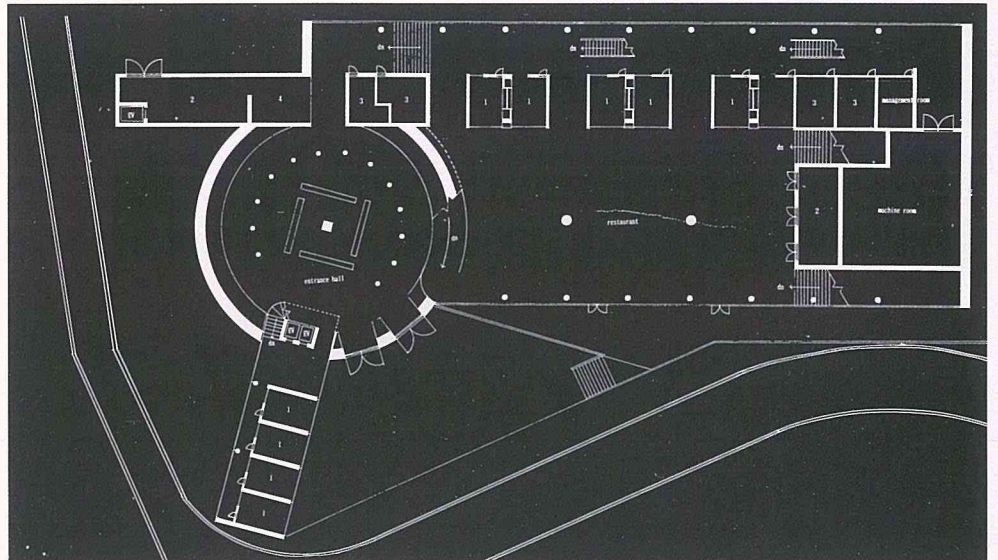
section



elevation

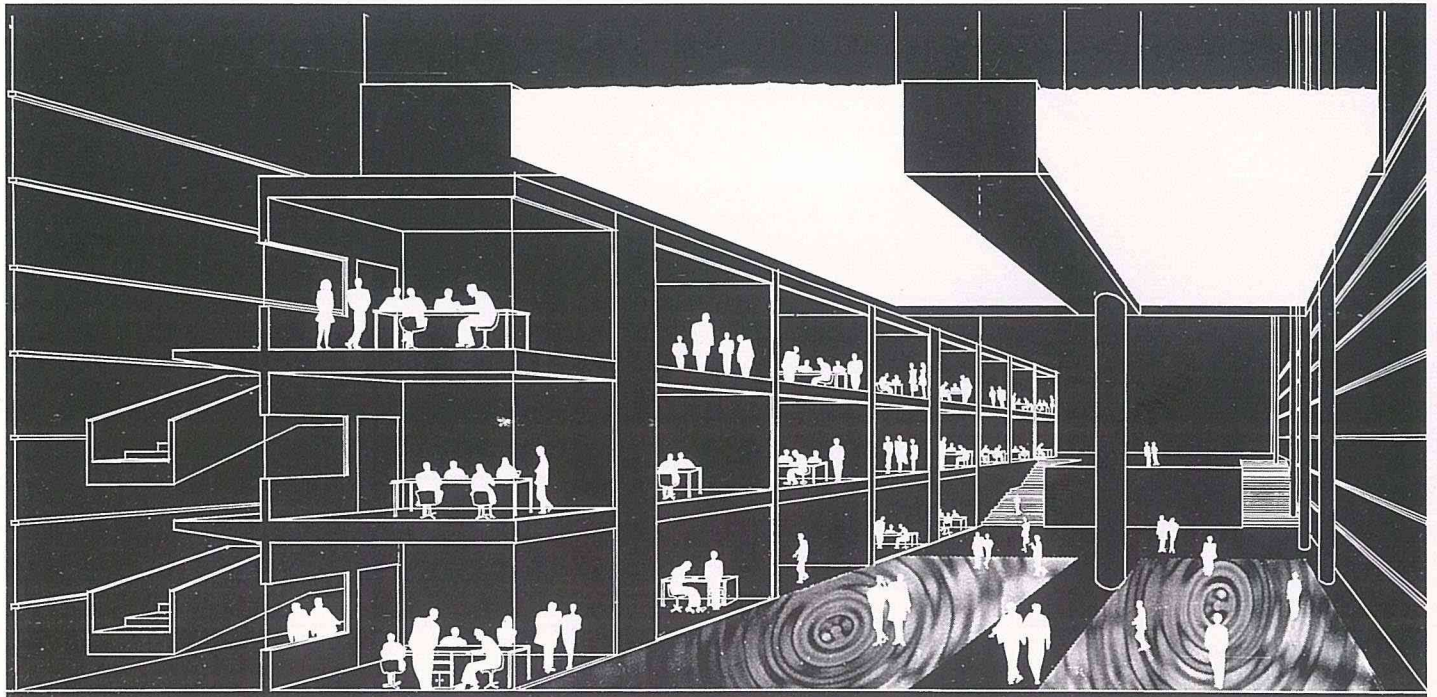


6th floor



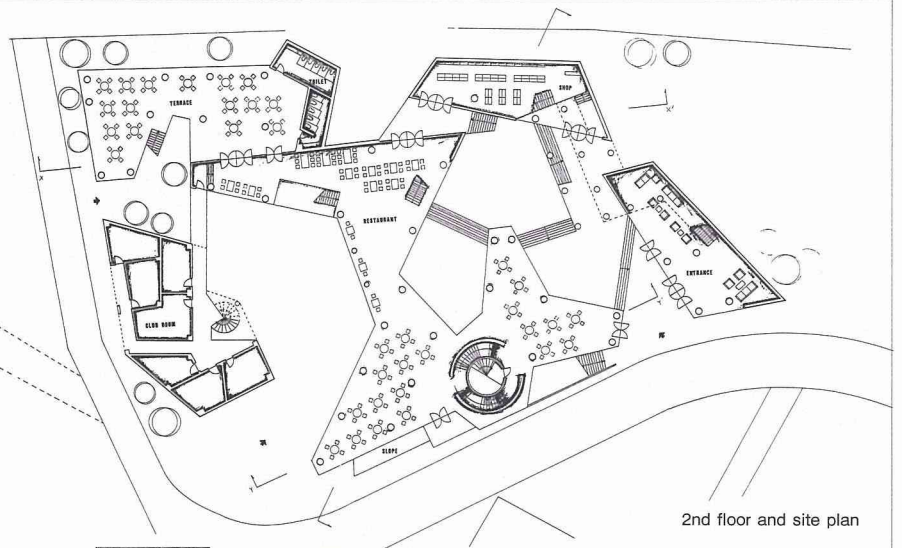
1st floor

perspective

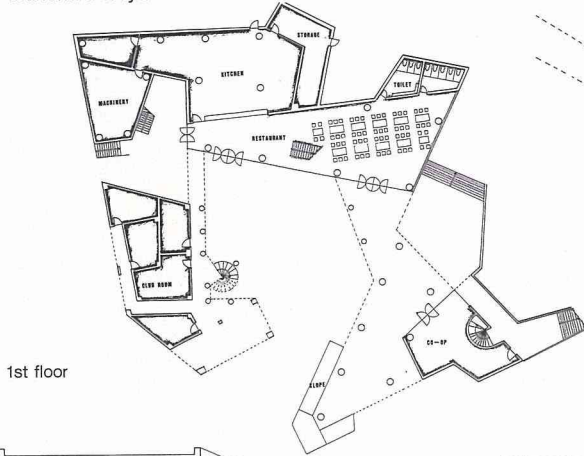


# Students' Square

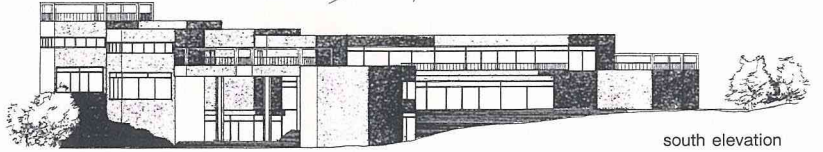
磯矢宗治  
Muneharu Isoya



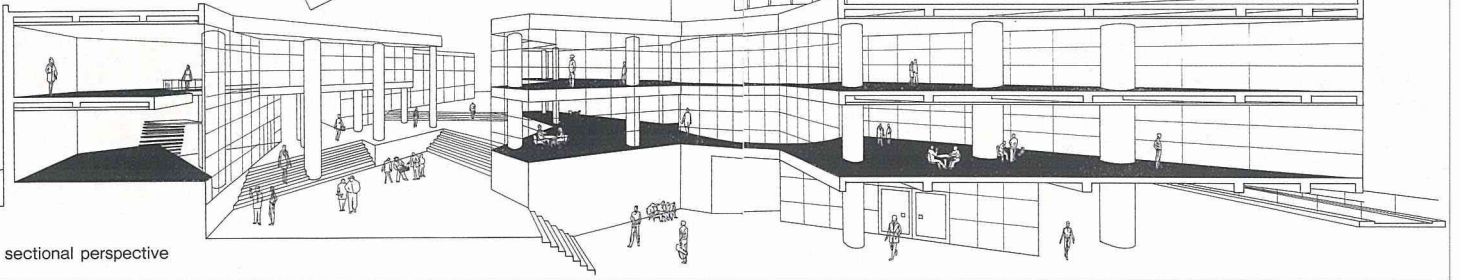
2nd floor and site plan



1st floor



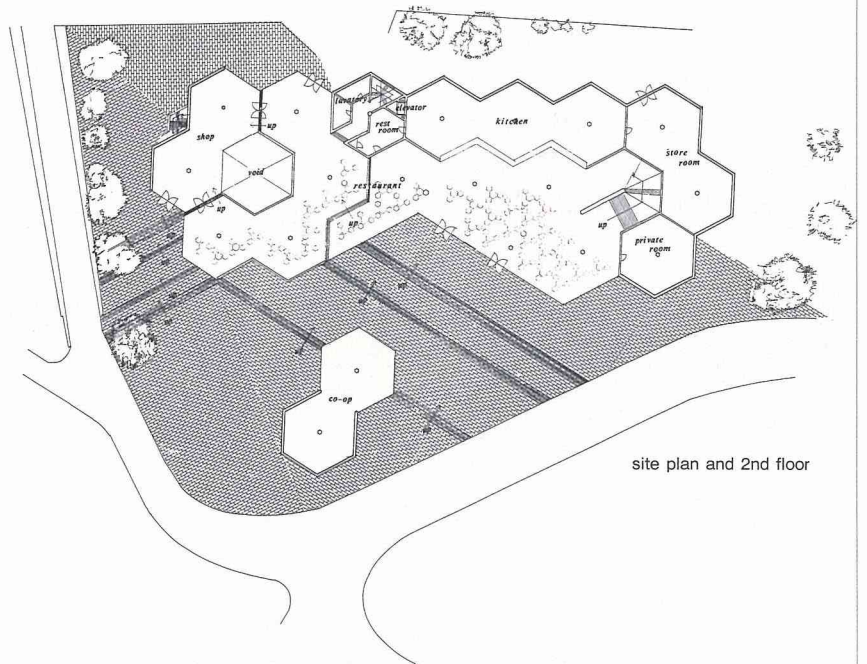
south elevation



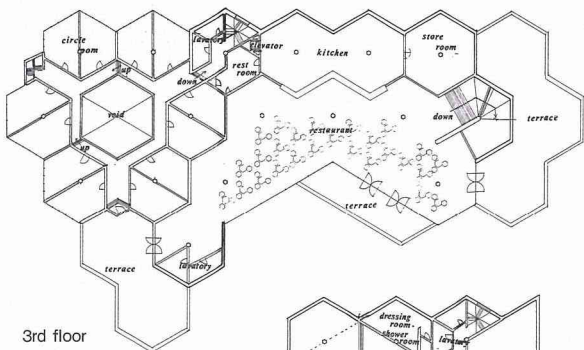
sectional perspective

# 大学会館 Student Center

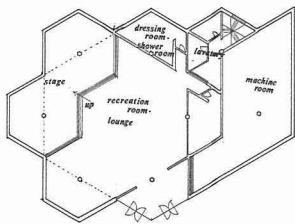
庭野淳子  
Junko Niwano



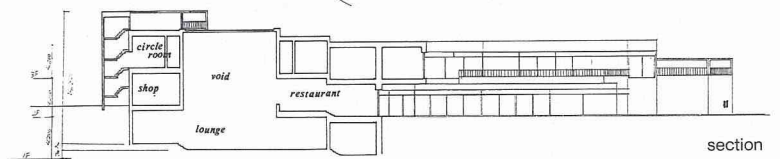
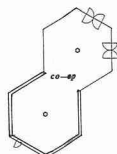
site plan and 2nd floor



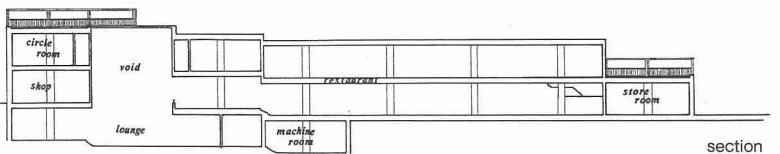
3rd floor



1st floor



section



section

# 1995年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 20世紀博物館

Museum of the Twentieth Century

### 講評

非常勤講師 戸尾任宏

この課題では、学生にあらためて20世紀という時代について考えてもらい、20世紀にかかわる関心のあるテーマを選び、そのテーマにそった博物館を考えること、広大な砧公園の一角を博物館にふさわしい敷地として切り取るという2つの選択をした上で、新しい博物館の提案を求めたものである。

学生は何度か砧公園を訪れ、その地勢、景観や来園者の利用状況を観察し、テーマを選ぶことと、そのテーマの博物館にふさわしい敷地を決定することを平行して考えねばならなかった。すでに定められた敷地ではなく、自分の設計する建築のもつ特性にふさわしい環境、地形を選ぶという新しい経験であったと思われる。学生の選んだテーマはやはり、戦争と平和、拘束と自由、自然と環境破壊といった人類が20世紀の終わりに重く受け止めなければならないものや、映像、コンピューターなど新しいメディアに関するものが多く認められた。このようなテーマの博物館の建

戸尾任宏  
Tadahiro Toh



1930年 兵庫県生まれ  
1954年 東京工業大学建築学科卒業  
1954年～69年 坂倉準三建築研究所  
1960年～63年 エコール・デ・ポザールに留学  
1974年 建築研究所アーキヴィジョン設立  
東京工業大学、工学院大学、東京理科大学非常勤講師  
1971年 奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館で「BCS賞」、常滑市民俗資料館で「中部建築賞」  
84年 佐野市郷土博物館で「日本建築学会賞」  
88年 都立埋蔵文化財調査センターで「公共建築賞優秀賞」  
91年 奈良県新公会堂で「賞金賞」、「公共建築賞優秀賞」  
93年 川越市立博物館で「さいたま景観賞」、「公共建築賞優秀賞」  
95年 奈良県立橿原考古学研究所で「公共建築賞優秀賞」

●課題：20世紀博物館

●主旨

われわれはあと数年で21世紀を迎えようとしている。いま20世紀を振り返り、この世紀がどのような世紀であったか、どのような意味をもっていたかを総括し、次世代に伝えるとともに、21世紀への展望を感じ取れる博物館を計画し、それにふさわしい建築空間を創造する。20世紀全般をテーマとしても、ある分野を限ってテーマとしても良い。テーマにそった展示内容を設定すること。ただし美術館は除外する。

●計画敷地：砧公園内に自由に敷地を選定する

●施設規模：延床面積4,000㎡程度

●所要室

所要室は参考として例をあげるが、これにこだわらず、各自必要と考えるものを自由に提案してよい。

①導入部門：風除室・エントランスホール・ロビー・ミュージアムショップ・レストラン

②展示部門：展示室・企画展示室・情報コーナー・展示倉庫

③教育普及部門：レクチャールーム・資料閲覧室

④収蔵部門：収蔵庫・荷解室・補修工作室

⑤調査研究部門：学芸員室・資料室・写場・暗室

⑥管理部門：受付・事務室・館長応接室・会議室・便所・休憩更衣室・湯沸室・空調機械室・電気室・その他

⑦その他：パーキング・サービスヤード

●提出物

①配置図：1/1500 屋外計画・植栽計画を含む

②各階平面図：1/200

③立面図：1/200 2面以上

④断面図：1/200 1面(展示室を含む長手方向)

以上

⑤アクソノメトリックパース：主要空間の構成を表現するもの。他に特に表したいところがあれば適宜スケッチを加えてよい

⑥全体模型：1/200

●説明文

博物館のテーマと設計主旨を簡潔にまとめ、図面に記入する。また、敷地面積・建築面積・延床面積等も記入する。

●図面表現について

①図面はA1版2枚以内にまとめる。ケント紙(白)使用、インキングまたは鉛筆仕上げとする。CADによる図面は認めない。

②寸法はすべてメートル法により、各図面に主要な寸法を記入する(縮尺のみの表示は不可)。各室の名称などは直接その位置に記入する。

③配置図、平面図には必ず方位を記入する。

④各図面ごとに最低限表現されていなければならない事項は次のとおりである。

配置図：建物は屋根伏として表現する。周辺環境、道路(周辺および敷地内)、植栽、芝生、水、パーキング等を表現する。

平面図：1階は周辺外部空間との関係も表現する。

階段の矢印は上り方向に記入する。

立面図：開口部を明確に表現する。屋根、壁面の材質感の違いを表現する。

断面図：柱、梁、壁、スラブ等を明確に表現し、天井と区別する。室内は展開図として表現し、主な室名を記入する。

全体模型：建物とその配置だけでなく、土地の高低、植栽、水など敷地の周辺を含めた環境を表現する。

築を砧公園の美しい景観と休日家族づれで賑わう雰囲気の中でどのように整合させるか、公園のどの地域に建築を位置づけるのがふさわしいかを悩んだものと思う。新しく建設される施設が本当にその場に必要なものなのか、必要だとすればどのようなあり方が周辺の環境と適合するかを真剣に考えるべきことを認識するひとつの訓練になったと思う。

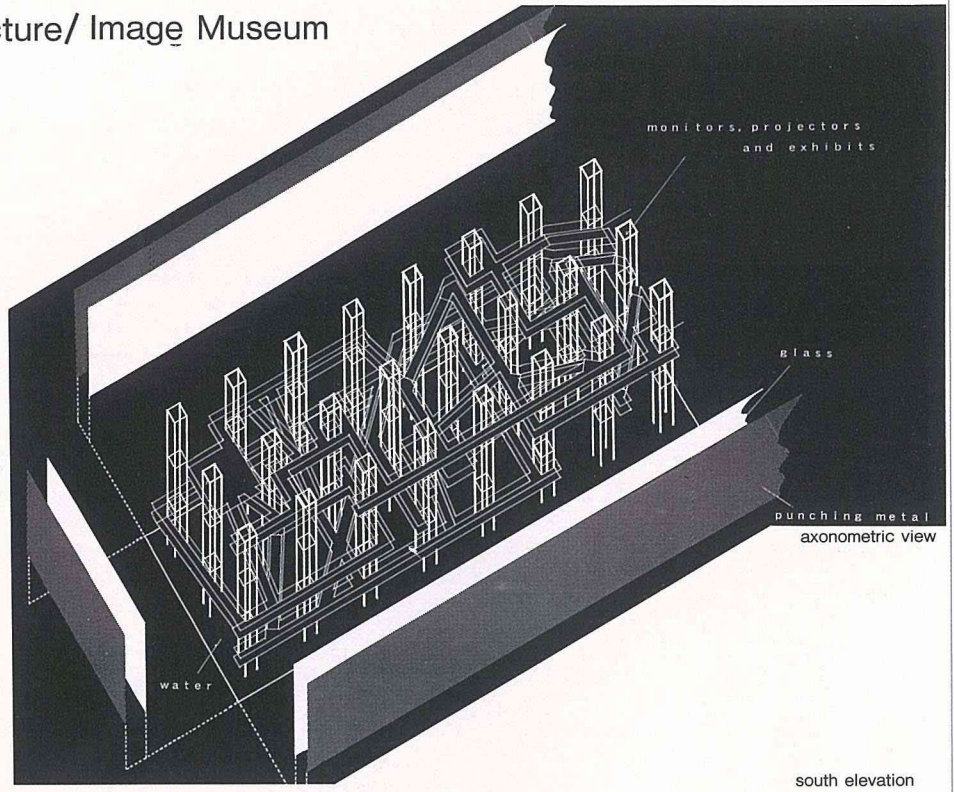
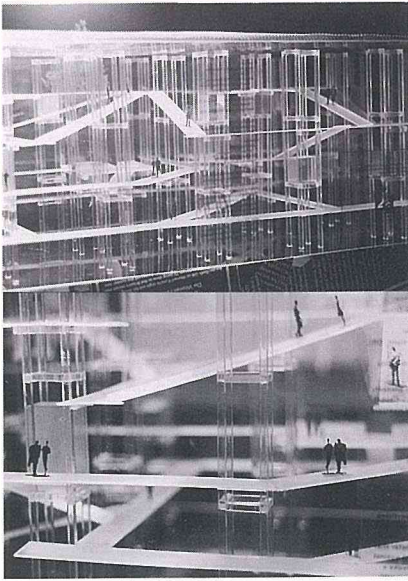
ここに選ばれた作品はそれぞれ、その内容・機能・形態・敷地の設定において十分な配慮がなされ、優れた建築表現として結実したものである。

田口陽子君の作品は柱の林立するガラス箱の中の空間をめぐるうちに、そこに仕込まれた装置と映像により20世紀を体験するというユニークな案である。緑の中で透明感と光の織りなす幻想的な美しさを期待できる空間である。川上正倫君の「20th Century

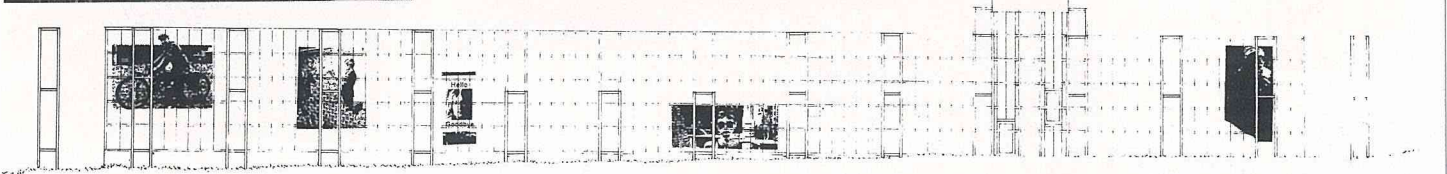
Museum」は敷地を環8沿いに設定し、傾斜したガラスの箱の中に浮遊する球や直方体のそれぞれに20世紀の思想・政治・事件・発見・問題などのテーマを内蔵させ、それをたどるというダイナミックな建築表現が、その内容と適合して成功している。小川一人君の案も20世紀の政治思想の葛藤と推移を建築の内部空間で表現し、未来への希望を自然の展望として構成した平面計画は巧みである。立面はもうひとつ工夫が欲しかった。丸山省吾君の「Black Box」はコンピューターのもつ特性を建築のプランに表現し、のびのびと展開した配置も興味深い。立面の検討が不足である。小野田環君と鈴木律君の作品はいずれも公園の水辺に建物を配し、緑と水の景観を強く意識しながら新しい空間体験を与えることに配慮したもので、誠実な取り組みに好感もてた。

# MOP 20th Museum of Picture/ Image Museum

田口陽子  
Yoko Taguchi

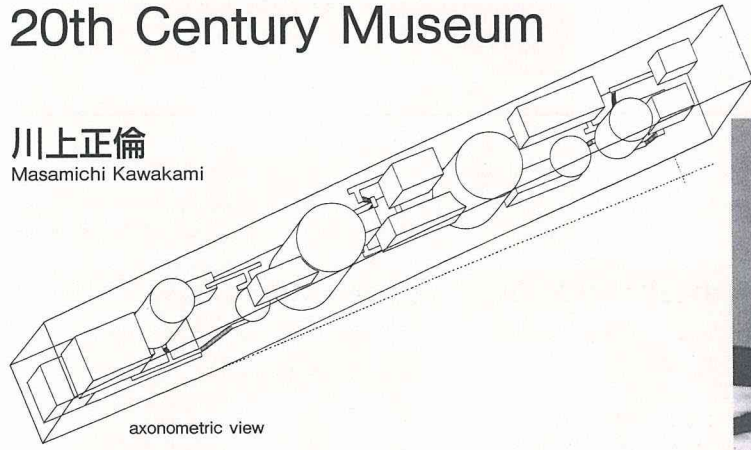


south elevation

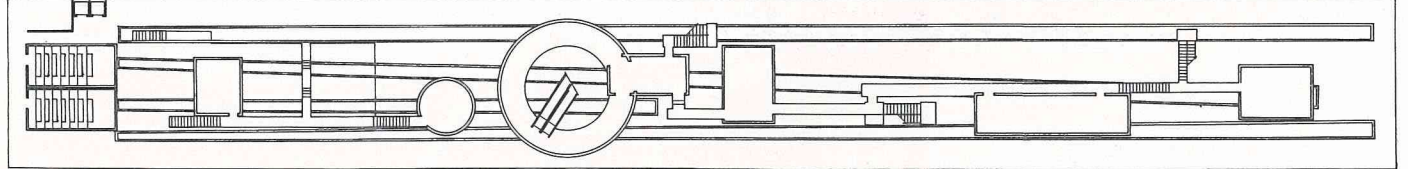
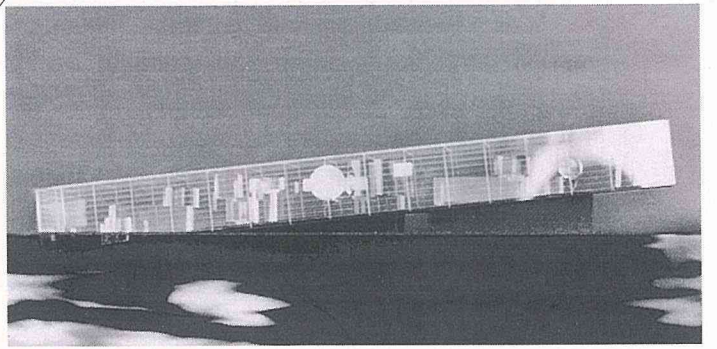


# 20th Century Museum

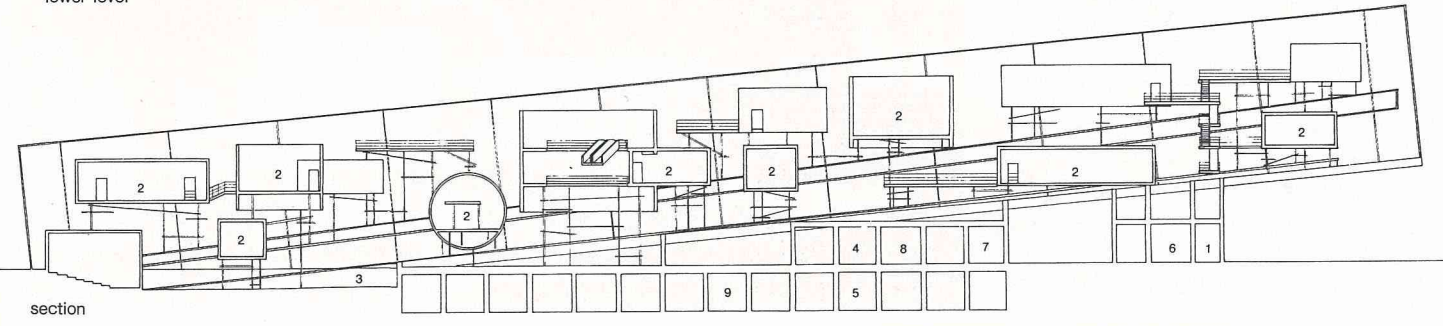
川上正倫  
Masamichi Kawakami



axonometric view



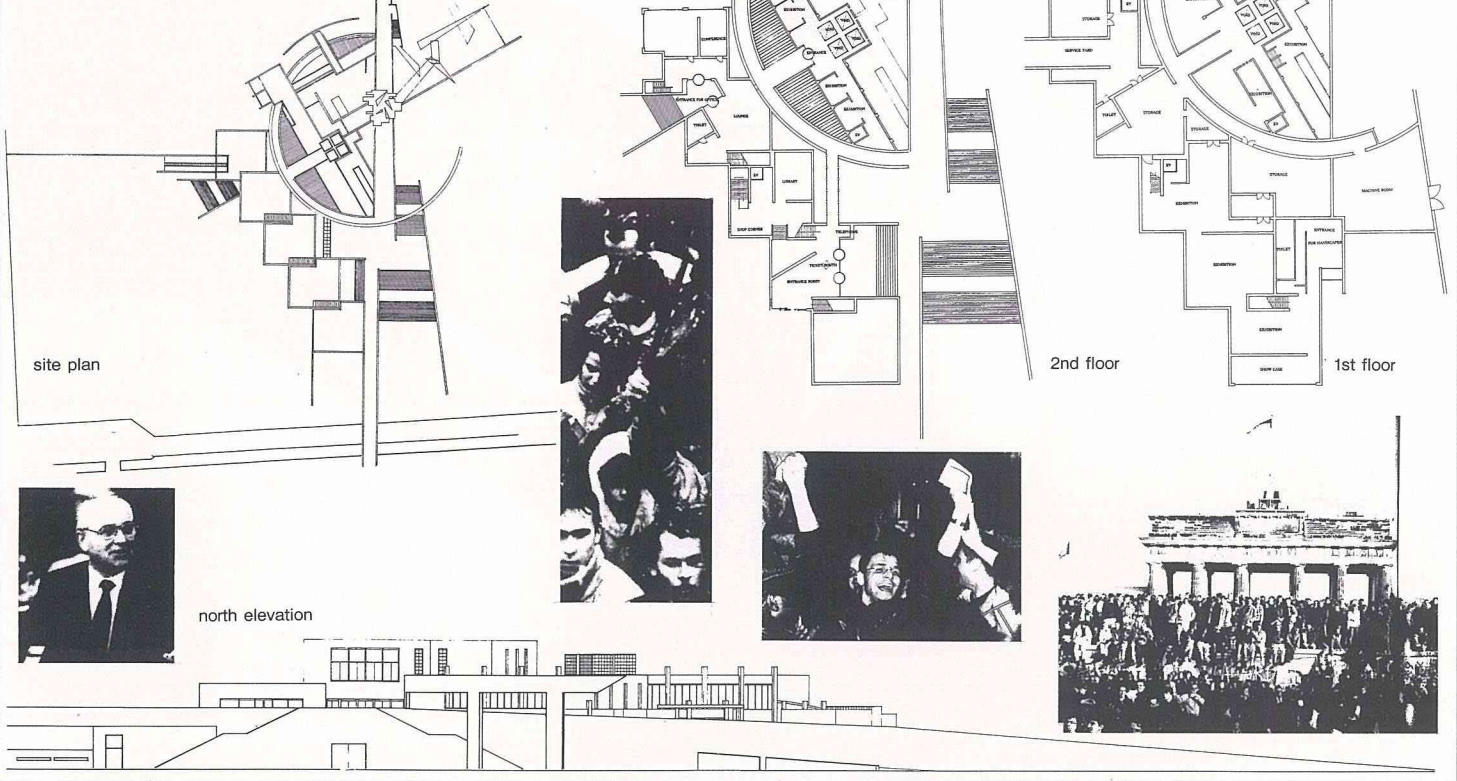
lower level



section

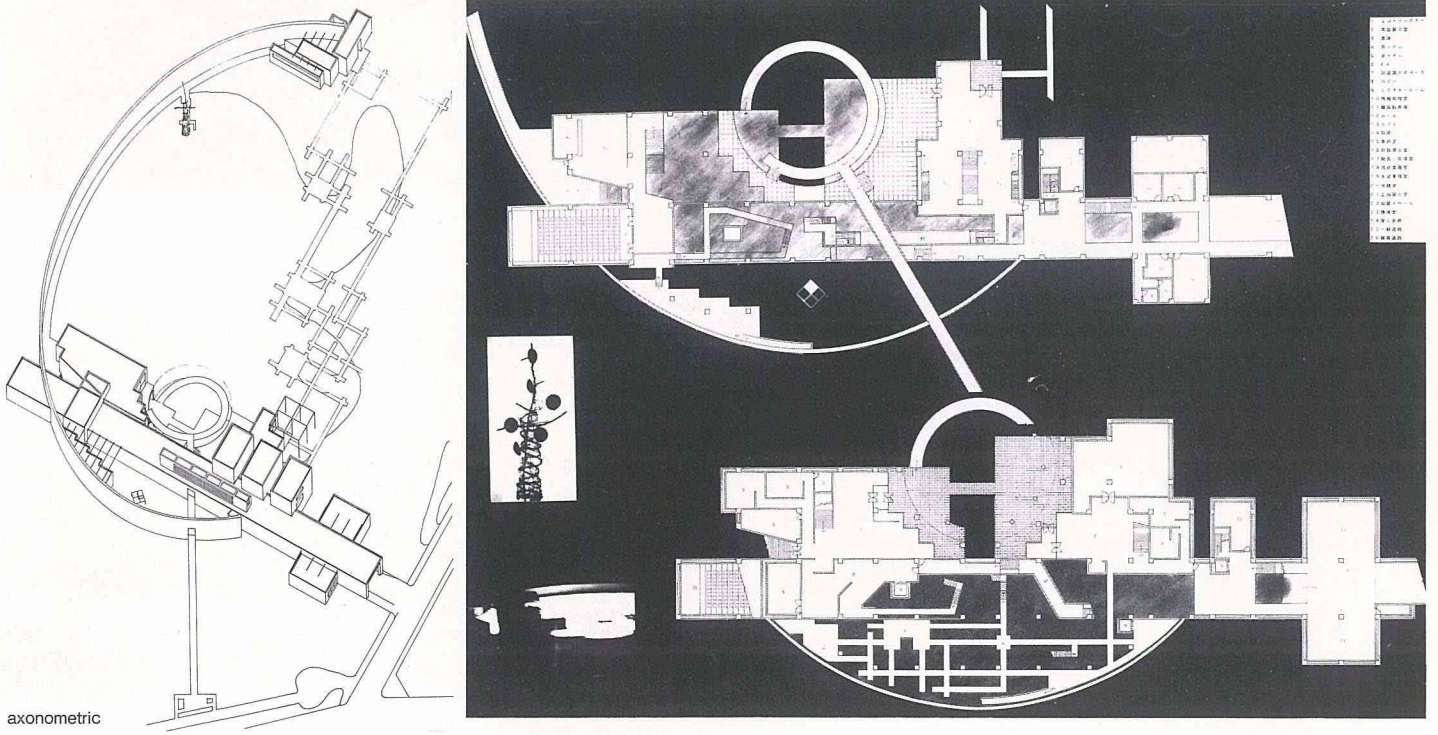
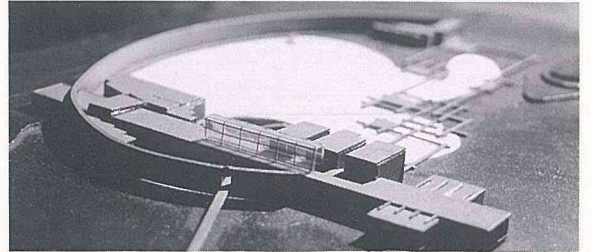
# The Wall Comes Down

小川一人  
Kazuto Ogawa



# Black Box Museum of the Computer

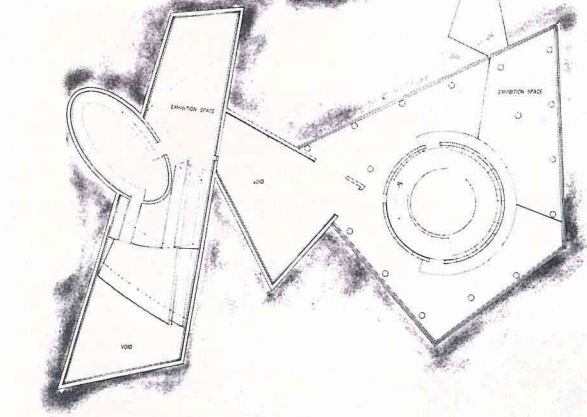
丸山省吾  
Shogo Maruyama



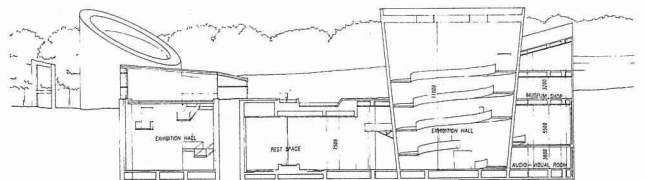
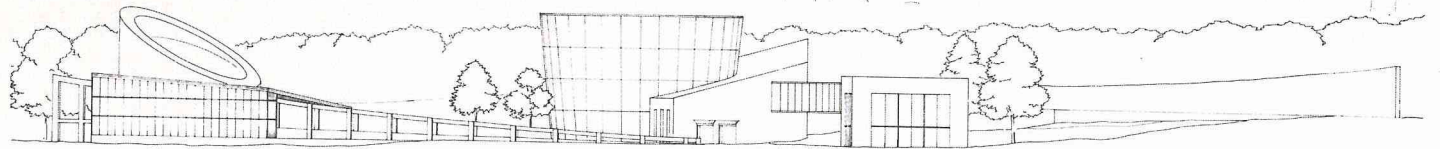
# Space-Time Continuum

小野田 環  
Tamaki Onoda

1st basement floor

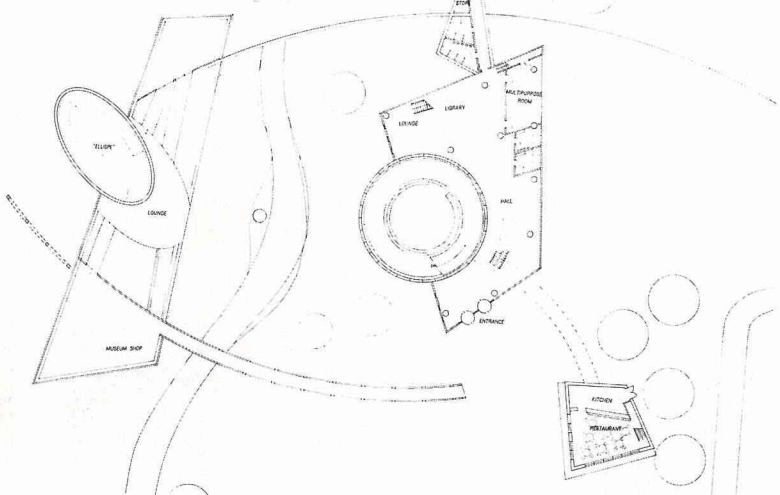


south elevation



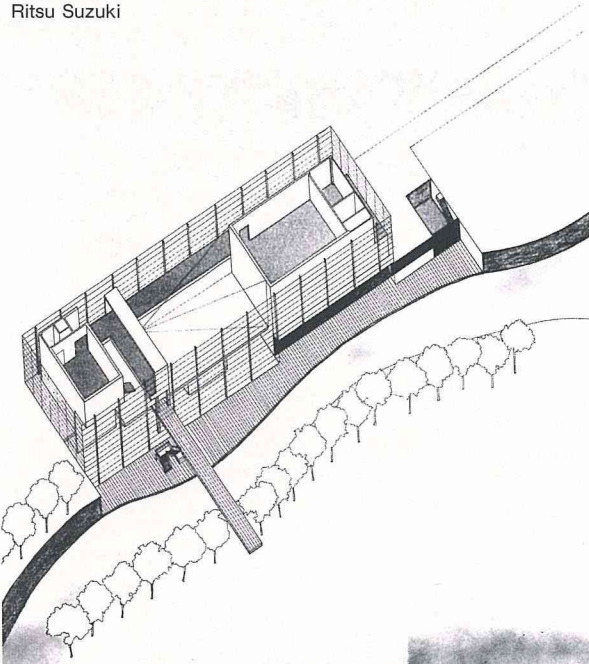
section

1st floor

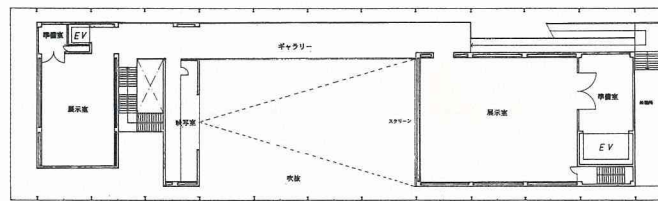


# Cinema Museum

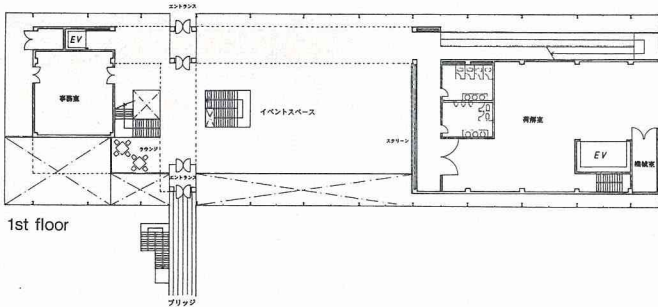
鈴木 律  
Ritsu Suzuki



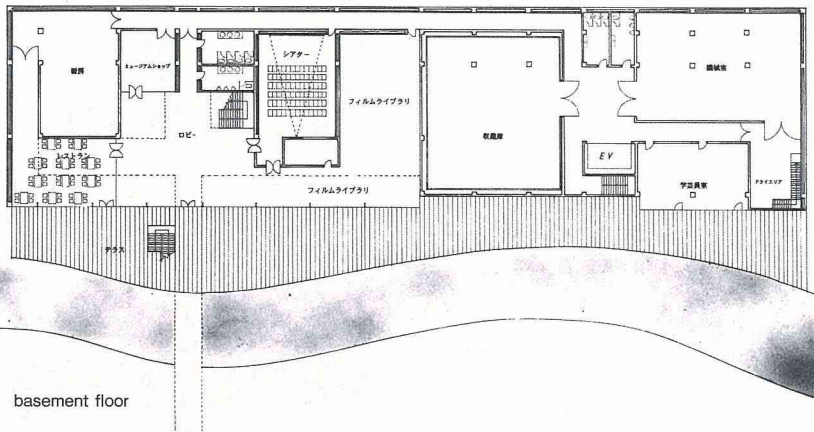
axonometric view



2nd floor



1st floor



basement floor

# 1995年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Sophomore-Studio Work: Autumn Semester

## 求められる住宅

Houses for the Next Two Decades

### 講評

非常勤講師 葛西 潔

この課題は与えられた問題を解決するのではない。自分で問題を提起し、その解決の方法を提案し、最後に形にするものであった。問題提起・提案・構成という一連の流れを理解するとともに、この流れを貫く説得力ある明快な論理展開の必要性を感じることがねらいであった。「住宅」は学生にとっても身近な建築であるから問題提起がしやすいと考えた。20年後を想定したのも問題点を捉えやすくするためであった。

しかし最初の問題提起の段階から悩んだ人が多かった。住宅をとりまく問題点を議論したが、なかなか自分の考えを言葉で表現できない。慣れていない思考とはいえ、日々の生活意識が低いようにも思われた。

次に、案の提示の段階でもエスキスのチェックではなく、考え方と論理展開の確認作業になってしまった。しかし興味深い提案もいくつか生れた。この段階までに手間取った人が大部分であったが、形をつくる前の段階の思考の重要性を感じてくれたと思う。

提案を形にする段階では、興味深い構想や提案を基礎力不足から発展できない学生がおり残念であった。設計製図には、計画だけでなく構造や設備などの基礎知識の必要性を感

- 課題：求められる住宅
- 課題主旨：住宅をとりまく状況は数々の問題を抱えている。将来において解決される問題もあれば、またさらに表面化する問題もあると予想される。現在と違った状況において、どのような住宅が成り立つであろうか。住むことの原点に立ち戻って、自由に発想してほしい。
- 作業内容：
  - ①20年後の住宅を取り巻く状況を予測する。その状況を視覚的に表現する。
  - ②その状況において存在理由の明確な住宅を創造す

- る。
- ③その住宅を具体的に設計する。
- 設計条件：諸条件は自由に設定してよい。
- 所要図面：
  - ①予測される状況とそれに関連する住宅の考え方を表現する。
  - ②平面図（家具配置を示す）
  - ③立面図（2面以上）
  - ④断面矩計図（直角方向2面）
  - ⑤模型
  - ⑥その他住宅の説明に必要な表現

じたであろう。

進行状況から最後の提出に不安を感じたが、全員が仕上げたことには感心した。それぞれの段階で全員がまじめに取り組んだ。ただ単に新規性を求める案や奇想天外な案が皆無であったことには好感をもったが、反面少し残念でもあった。

米津案は、既成分譲地の建て替え計画である。分譲地の景観を形づくる塀の存在や住宅の窓のあり方についての素朴な疑問から問題提起をした。新たな「KAKINE」と「住宅ユニット」をもとに、住宅地の景観をある程度統一し、開放感がある住宅を提案している。単体の住宅だけでなく住宅地の計画をも含んだ提案に、視野の広さを感じる。また身近な問題に対して素直に取り組む姿勢と、形態にこだわらない点にも好感をもつ。しかし「KAKINE」によって生まれる路地が人びとの交流の場となるにはもっと工夫が必要であろう。模型を含めて表現方法も良く、提出物だけで提案の内容が理解できる唯一の案であった。

小川案は、住宅内で「足りない」という曖昧な問題を表現しようとした。まずその感性に新鮮さを感じた。父親の単身赴任という社会問題を切り口とし、日常生活においても父の不在を意識させるという提案である。このようなテーマにありがちな抽象的な表現に終わらずに、構法まで計画した図面表現は説得力をもつ。

笠井案は、これからますます多くなるであろう夜の行動に着目した。夜型人間のための

住宅の必要性や、それにより発生する住宅地の問題の指摘はうなずける。構想には興味をもつが、案としての発展がなかった。しかし少ない時間でまとめた構成力と表現力を評価する。

中谷案も、構成力で器用に全体をきれいにまとめている。しかし自然を感じながら生活するというテーマの設定に対する提案が、住宅の一部分の「空と穴」では説得力に欠ける。

中山案は社会と家族と個人との関係にこだわり、3者の距離のとり方を建築化するのに苦労した。螺旋状の迷路のような動線を思いつくことによって案をうまくまとめた。しかし興味をひかれる迷路のような空間がどのようなものかは表現不足のため読み取れない。内観パースなどがあれば良かった。

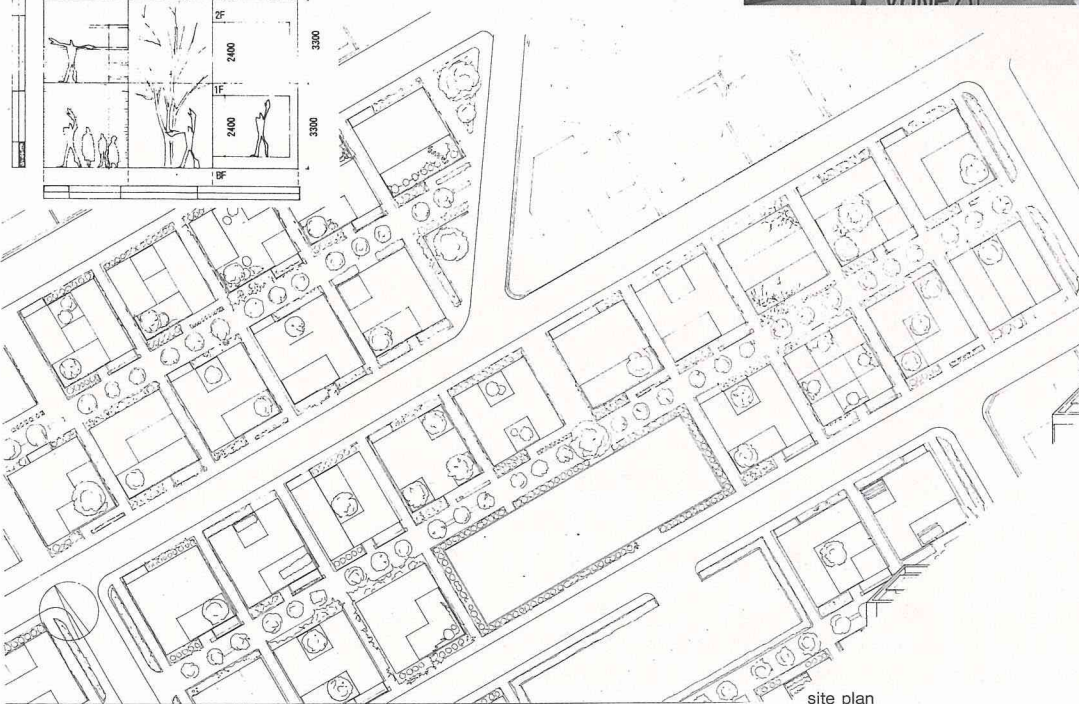
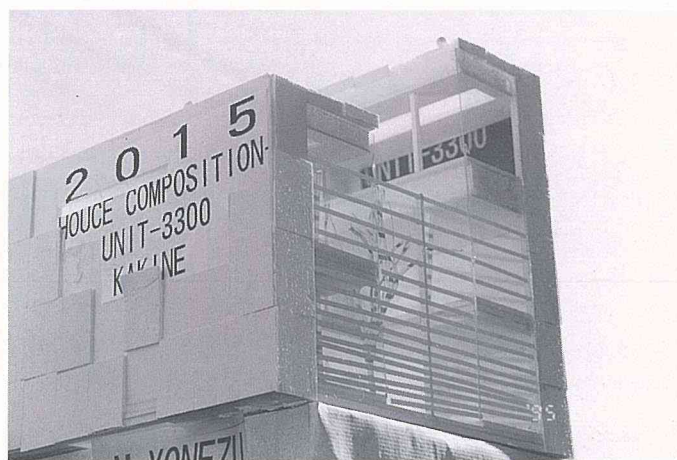
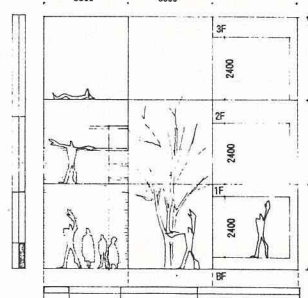
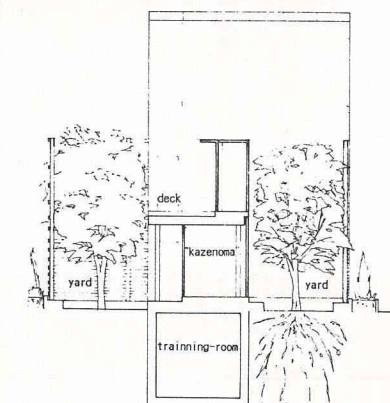
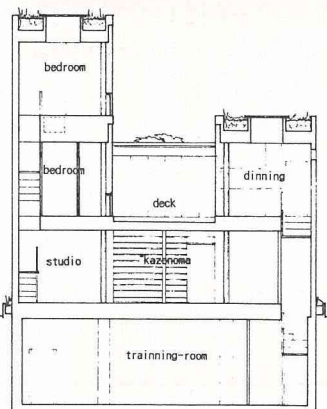
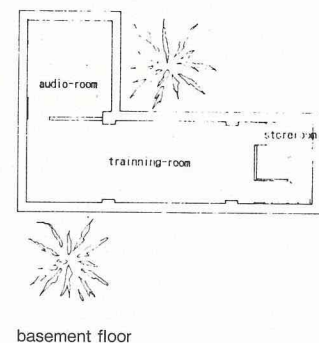
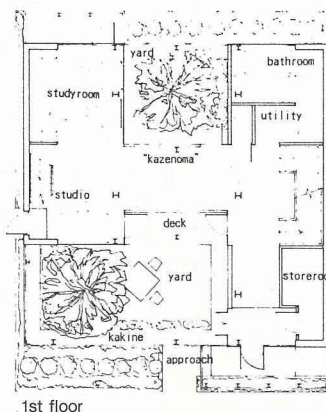
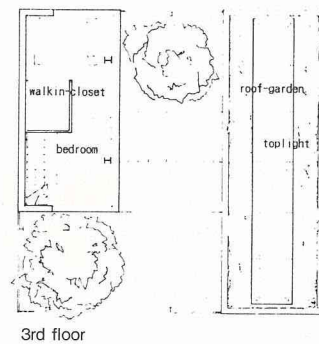
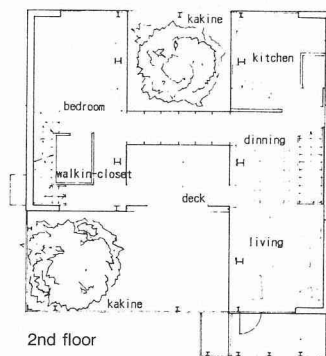
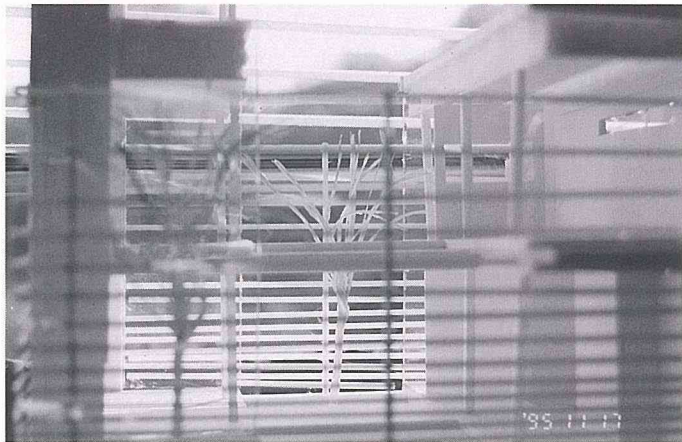
葛西 潔  
Kiyoshi Kasai



1954年 東京都生まれ  
1978年 東京工業大学建築学科卒業  
1980年 東京工業大学大学院修了、山下和正建築研究所入社  
1982年 葛西潔建築設計事務所設立  
1993年 平成4年度東京建築士会「住宅建築賞」受賞  
1994年 平成5年度東京建築士会「住宅建築賞」受賞  
主な作品：角地の木箱、小さい木箱、木箱3、大きい木箱、傾斜地の木箱、段地の木箱

# 2015 House Composition Unit-3300 Kakine

米津正臣  
Masaomi Yonezu



■20年後、一時に集中的に建てられた分譲住宅は、あるまじきことについていって老朽化、建て替えが必要となってくる。この機を利用して、現在分譲住宅地が抱えるさまざまな問題を解決し、新たに集合住宅地として再編成する。

### -UNIT3300-

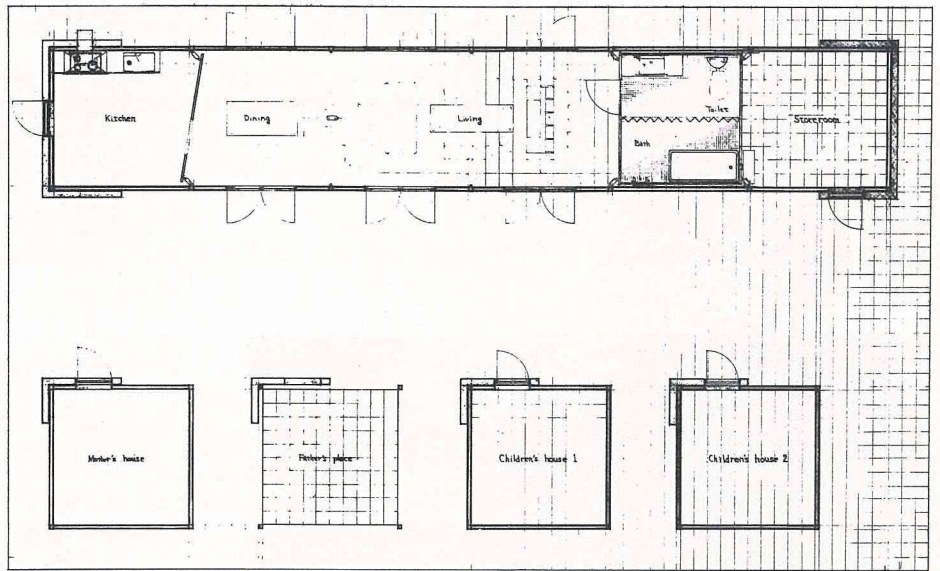
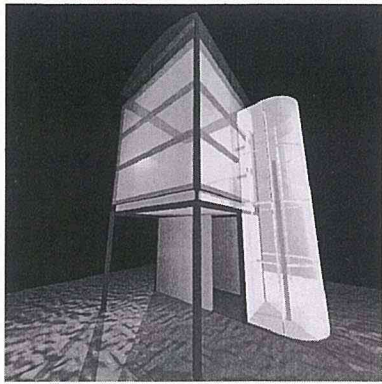
■この住宅は、狭くて不整形な分譲地に対応できるように、1辺3.3mの小さな立方体を1 UNITとして、それを自由に組み合わせることにより構成される。

### -KAKINE-

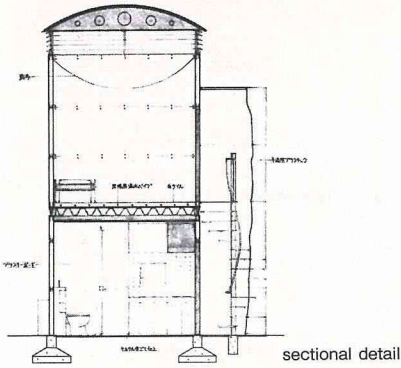
■縄張を主張する以外に何の機能も果たさなくなった敷地境界障害物を取り除き、代わりに「第2のカキネ」なるものを立面に取り込む形で提案する。このカキネにより住戸の間には路地が生まれ、植物が植えられ公共空間となる。またそれに覆われた内部も外部と柔らかく分断され、庭も、中庭でも外庭でもない緑と風と光に満ちた吹き抜けとなって各部屋に接する。

# House without F.

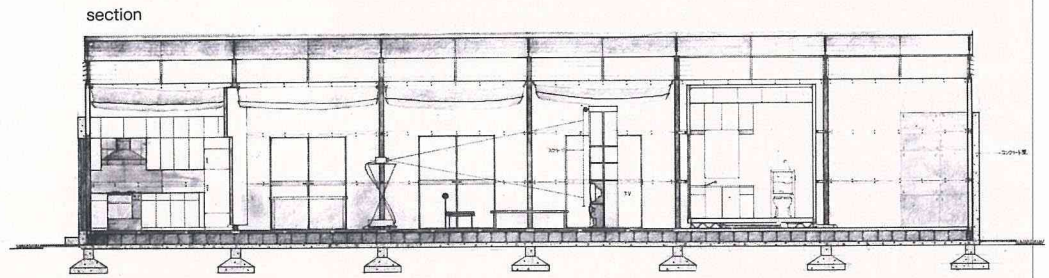
小川貴司  
Takashi Ogawa



plan



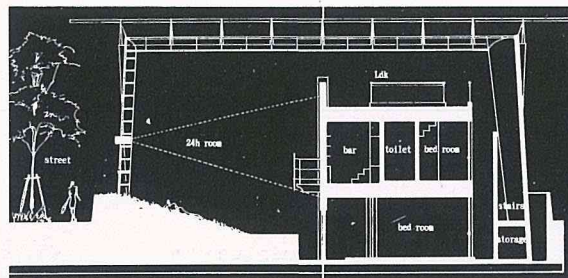
sectional detail



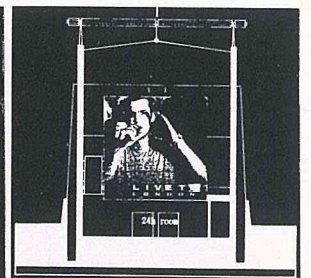
section

# 24-hr. Neighborhood

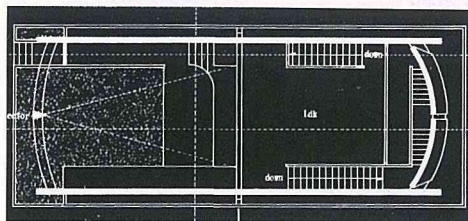
笠井誉仁  
Takanori Kasai



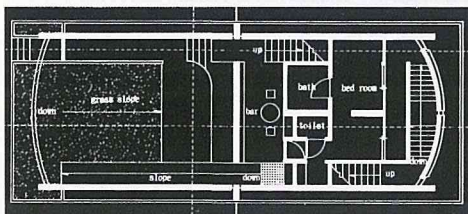
section



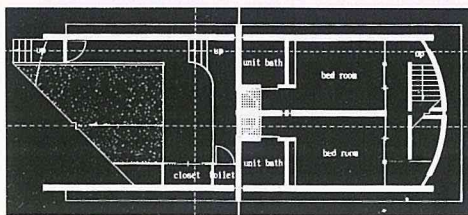
section



3rd floor

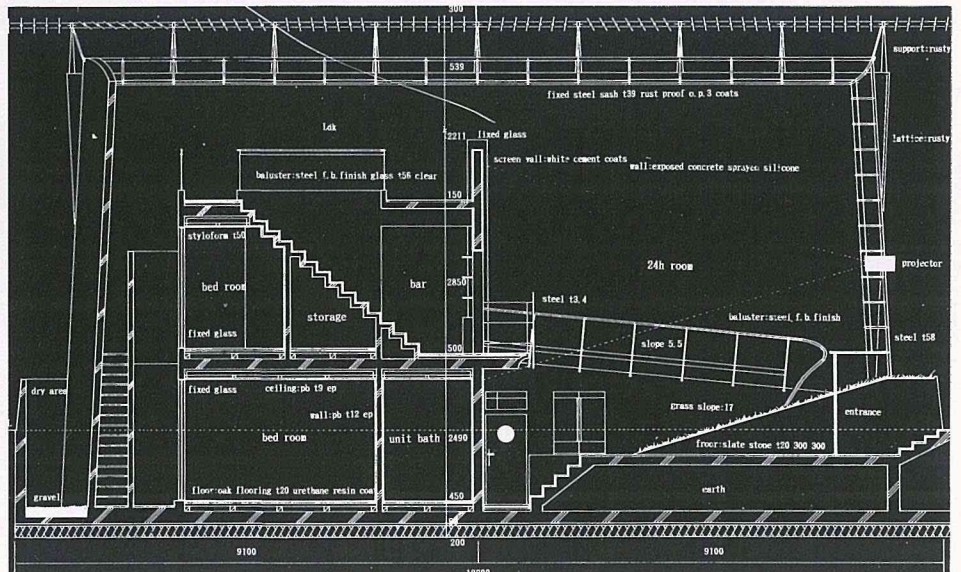


2nd floor



1st floor

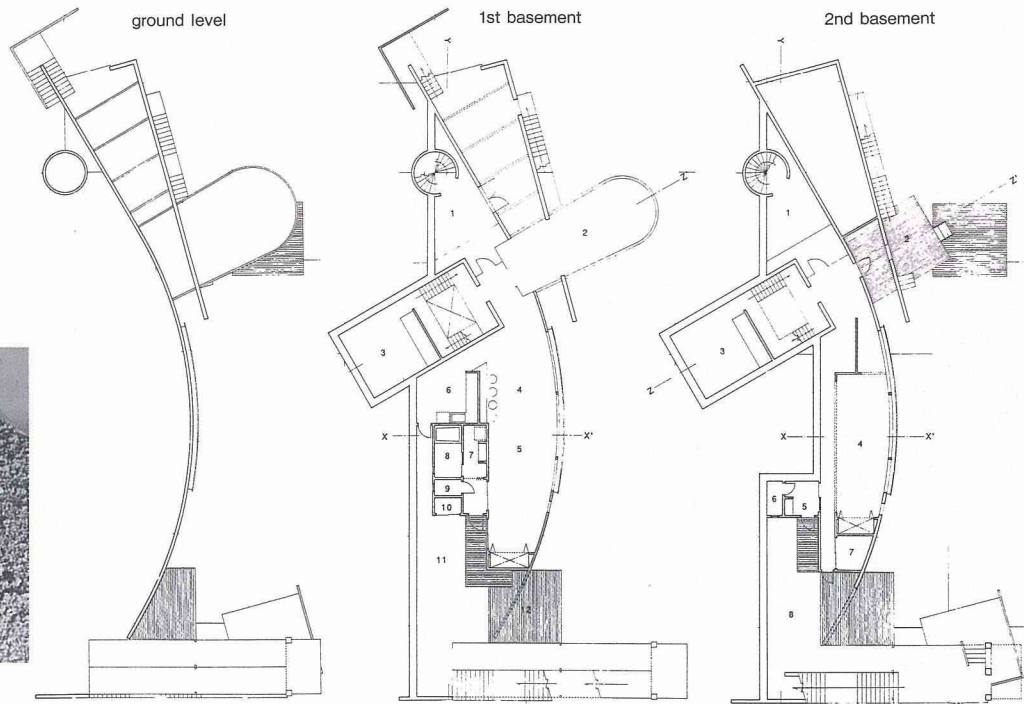
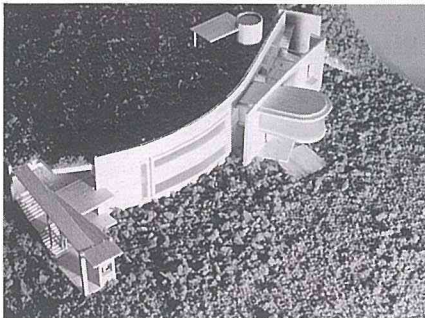
sectional detail



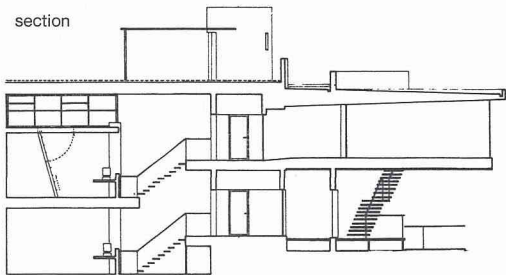
# 空と穴

Sky and Hole

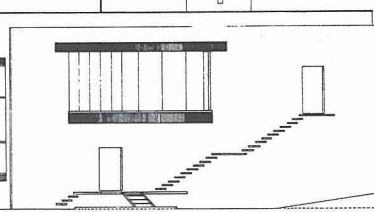
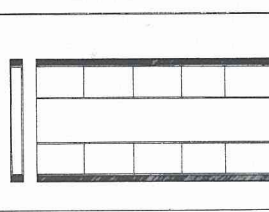
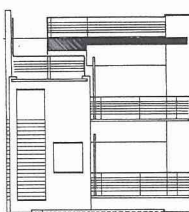
中谷 豪  
Go Nakatani



section

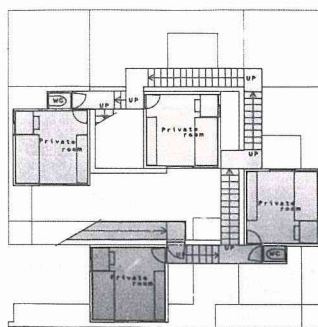
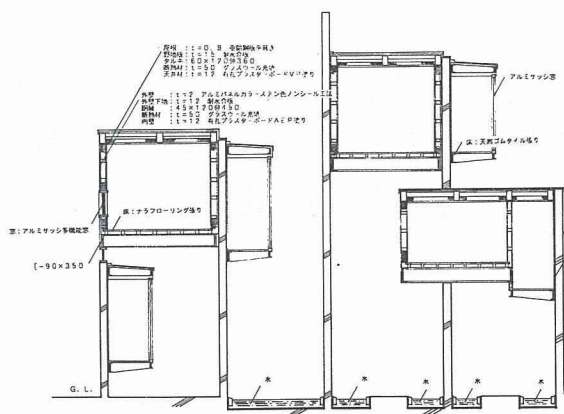


south elevation

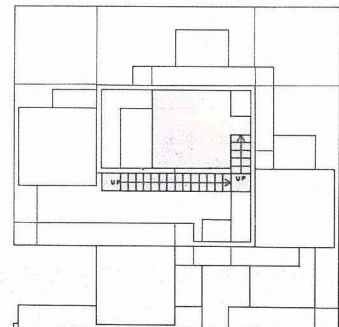


# Spiral House

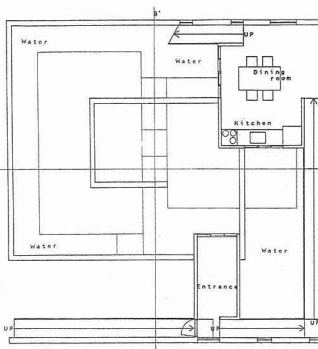
中山 伸  
Shin Nakayama



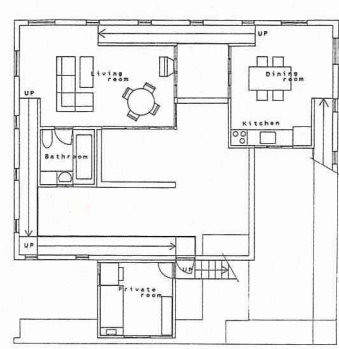
level +6500



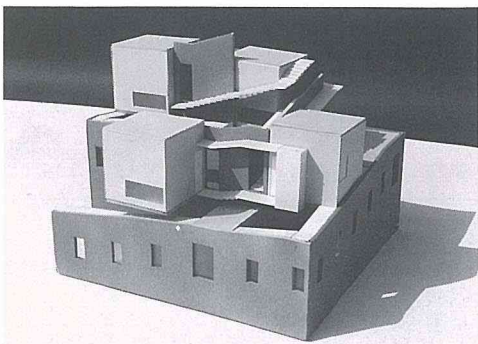
level +10500



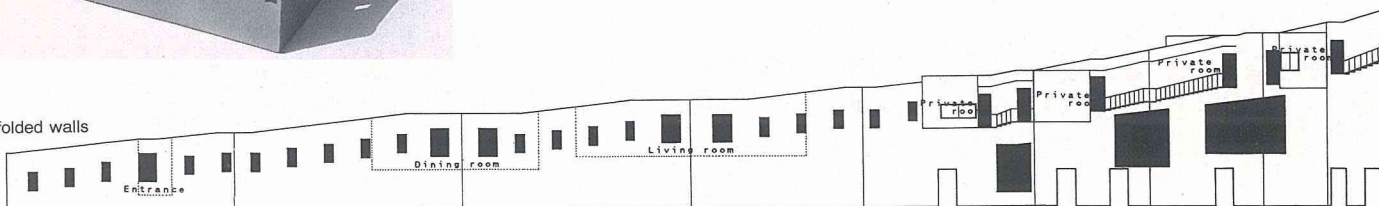
level +2500



level +4500



unfolded walls



# 1995年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 「気持ちの良い空間を創る」 Making a Space with a Fine Feeling

### 講評

非常勤講師 宮脇 檀

「気持ちの良い空間」というテーマを選んだのには理由がある。私のような芸大卒の人間にとって、東工大卒の建築家というのは清家清、林昌二のようなごく具体的な生活空間を語る人と、篠原一男、坂本一成のようなコンセプト的な人とがどうして共存したのか判らない。どちらかという、理屈で建築を創るという昨今の風潮が今は強いと読んだ。また、今回の課題が私以外は竹山聖と團紀彦という当世きっての論客であることもあった。とすれば、そうではない設計の部分があるということを見せるのもひとつの仕事だと思った。

「気持ちが良い」などという、通常は感性の部分としてしか受け取られない言葉の裏に、ゲニウス・ロキのような要素から始まって、人間の本能や行動、空間づくりの始源的な意味が含まれていることを吉村順三から習った私としては、建築の基本にあるこの考え方を、東工大の学生にも知ってもらいたかった。

課題として特定の場所を選ばせたのは土地を読みとるというゲニウス・ロキの部分、宿泊施設の実測をさせたのは泊まるという行為を支えるモノの、プチホテルを対象としたのはその両者をまとめるのに簡単だからという読みがあった。

宮脇 檀  
Mayumi Miyawaki



1936年 名古屋市生まれ  
1959年 東京芸術大学建築学科卒業  
1961年 東京大学大学院修士課程修了  
1964年 宮脇檀建築研究室開設

1991年 日本大学生産工学部建築工学科教授  
主な作品：松川ボックス(’80年建築学会賞)、秋田相互銀行角館支店、出石町役場・同伊藤美術館、安来和鋼博物館、豊田市体育館、シーサイドもちもち・グリーンテラス城山・コモシティ星田などの住宅地計画、新本牧地区都市景観計画などの環境計画他

「何という好気持ちだろう。何という幸福な気持ちだろう」1863年2月8日——トルストイの日記から

気持ちの良いとはどういう状態を言うのか。  
土地の秩序、生えた建築、形の姿勢、構成の調和、流れる視線、和らぐ身体  
見ること見られること、包み込む空間、自然な寸法、対応するモノ、部分の充実  
余暇を過ごすという状況のコンセプト  
それを充足するための徹底した部分と全体の具体的・精緻な追求  
視覚、触覚、肌合い、風、気配、暗さ、匂い、音、人

- 課題：日本の中部高原に建つプチ・ペンションを設計する。美しい自然の中に余暇の身を置いて、気持ちよさを充実させる空間とはいかにあるかを求める。
- 敷地：日本の中部(長野、山梨、群馬等)地方の高原をリアルに設定する(地形、勾配、アクセス、降雪・降雨量、気温、風向、視野、植生、地質その他も)。
- 内容：客室10室+共有空間(ダイニング、ラウンジ等自由)+管理部門(厨房、従業員・経営者宿泊室その他)程度の宿泊施設。  
客はリピーターを想定、年間稼働、冷房不要(風通し)、  
構造、規模は自由設定、現行宿泊施設規定は不問。

### ●日程

日時	作業	学生がこの間にすること
11月20日	課題説明、スライドレクチャー	宮脇の本を読む* 具体的な敷地を決め、土地のデータを決定し具体的に示し配置計画を練る
12月1日	第1エスキス 全体配置・平面図 1:100 概念模型 土地のコンテキストを読む	ひたすら土地になじませること
12月15日	第2エスキス 修正全体平面図 1:100 パブリックスペース平面、断面図 1:50 余暇のコンセプトを探る。外部と内部	旅をして宿泊体験をレポート(A4×4枚) 配布の実測平面図の分析レポート(A4×4枚)
1月19日	第3エスキス レポート提出 全体模型 1:100 宿泊個室平面図、展開図 1:20	
1月22日	提出 配置図1:100、全体平面図兼用、部分断面図(共用部を含む) 1:50 客室平面図、展開図 1:20、透視図(内部)着色 A1 1枚に明瞭なプレゼンテーションを行う	
1月26日	講評 他の先生方と同時 模型	

\*宮脇著作『人間のための住宅のデテール』丸善 『宮脇檀の住宅設計テキスト』丸善 『それでも建てたい家』新潮文庫

結果として、大部分の学生にはそれがなかなか理解できなかったらしい。気持ちの良いはもちろん、地形を読むということも、宿泊するという個人的な実感の確認もないままに、エスキスだけが動き始めてしまった感がある。設計を始める前、エスキスの批評でない形でこの部分を徹底的に彼らと話し合うべきだっ

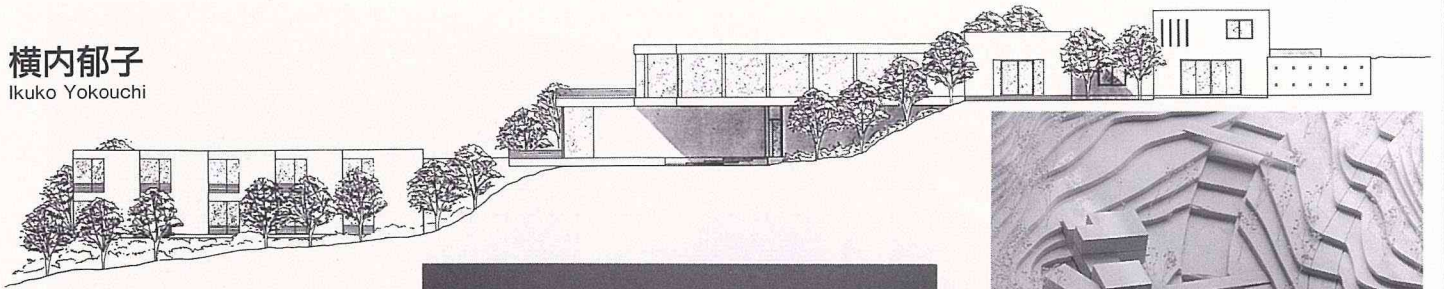
たという反省がある。

横内郁子さんの案だけが、信州にある階段式流路という存在に対して、人がどう反応してゆくであろうかという分析の上に空間を構築して見せてくれた以外、期待に応えてくれる案はなかった。教師の失敗であると思っ

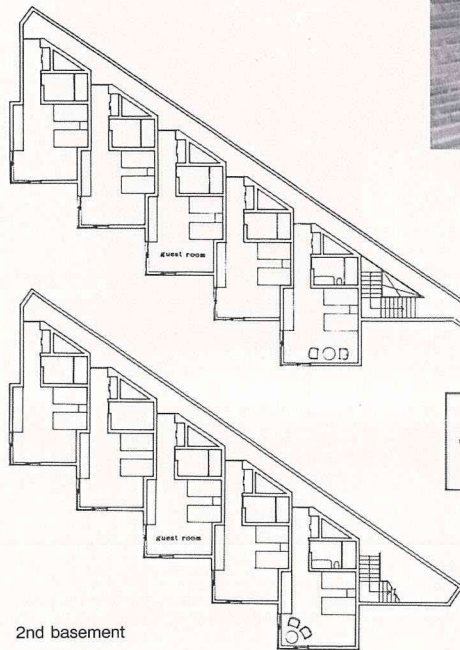
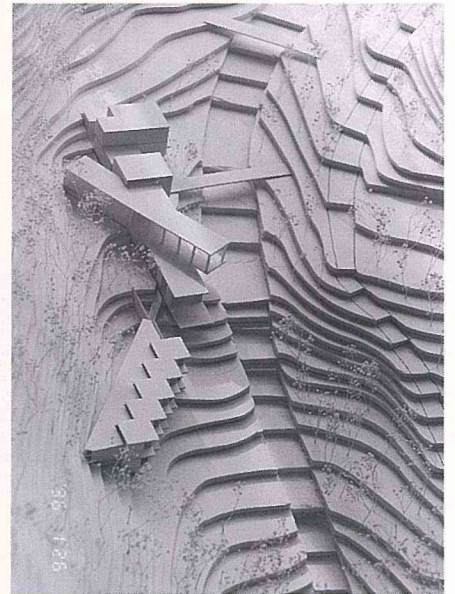
# 信州のペンション

Pension in Nagano

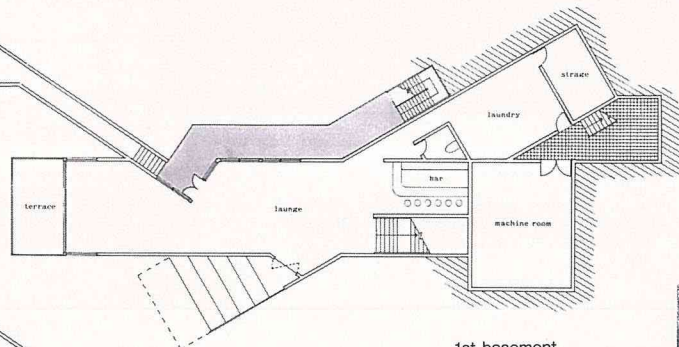
横内郁子  
Ikuko Yokouchi



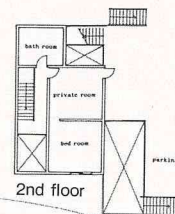
south elevation



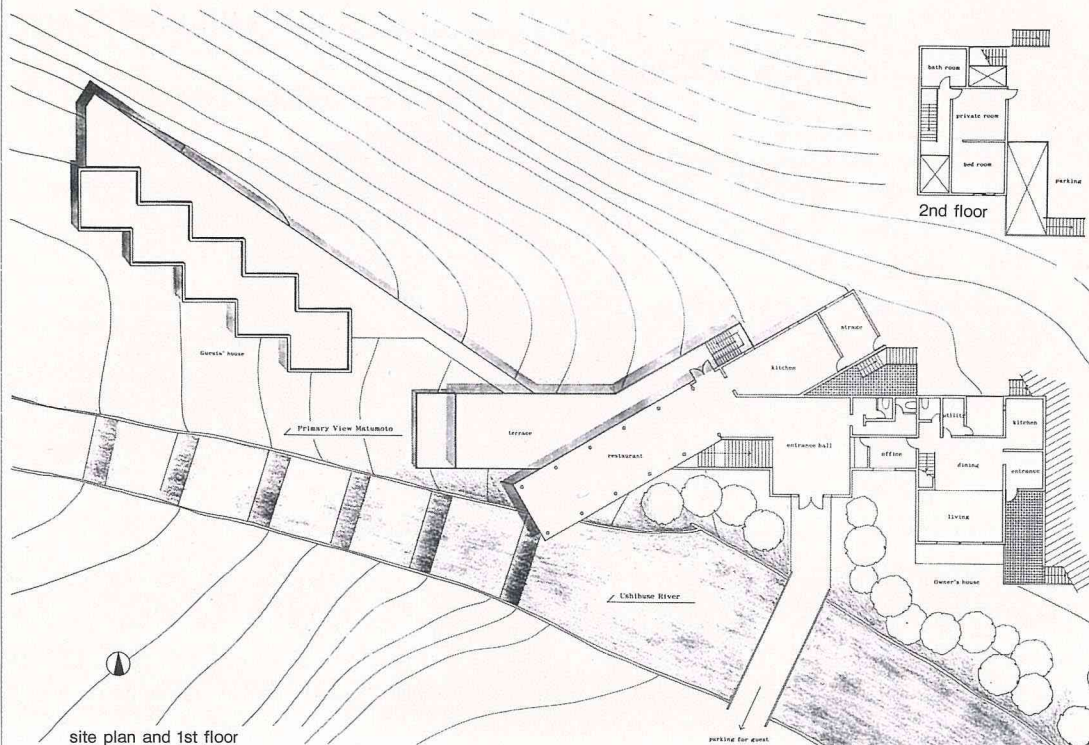
2nd basement



1st basement



2nd floor



site plan and 1st floor

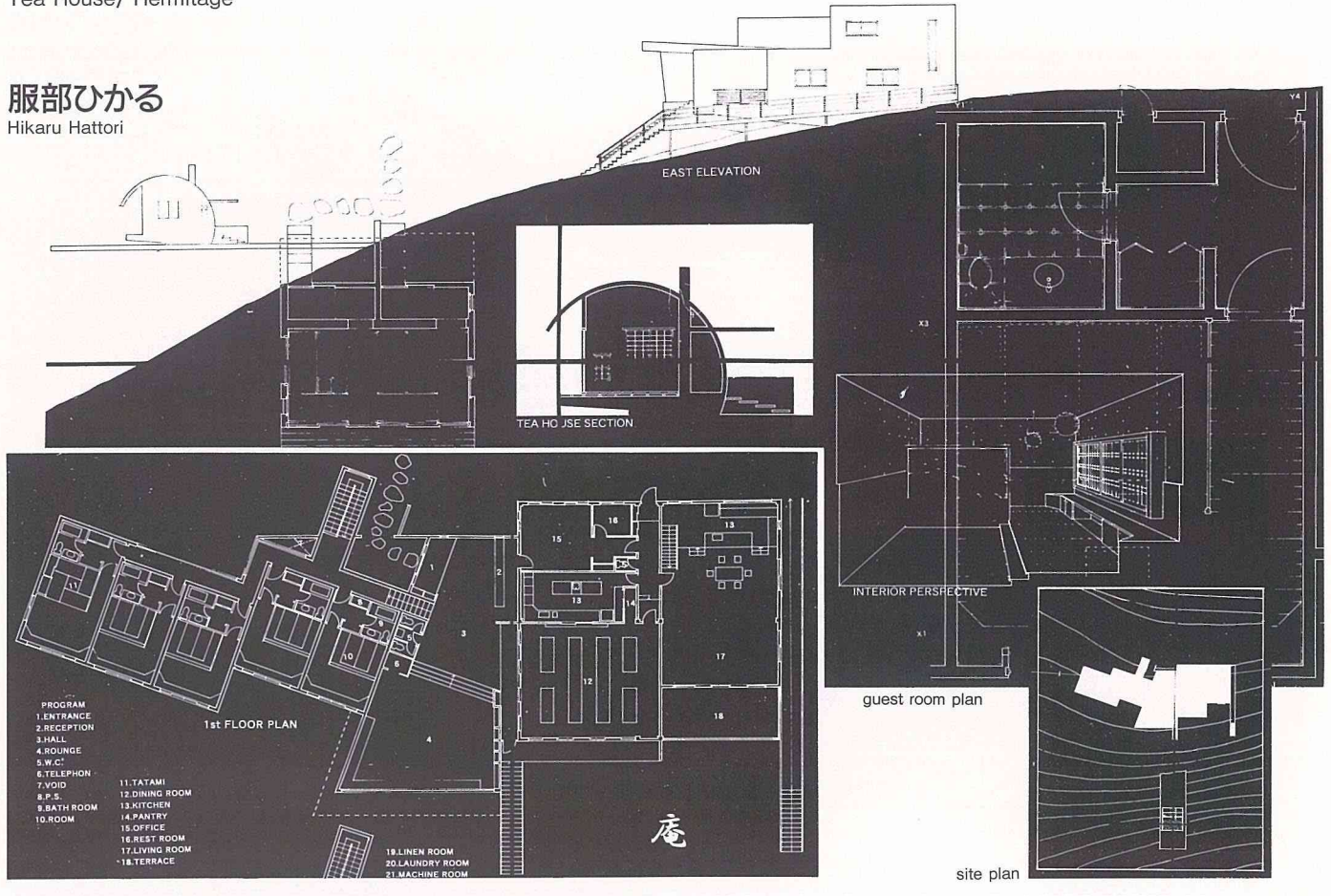
■牛伏川は、長野県松本市南東の山々から流れ出す渓流で、この川の上流に130m続く砂防用の堤「フランス式流路」がある。律動的な水の流れを見ていると、デジタル化された日常生活では感じることのできない生きた時間を味わうことができる。■ここで気持ち良い空間をつくること、土地の秩序に従うことは、この階段式流路に合わせて傾斜を下りていくことである。眼下には、アルプス連峰を背にした松本平を望むことができる。

# 茶室/庵

Tea House/ Hermitage

## 服部ひかる

Hikaru Hattori

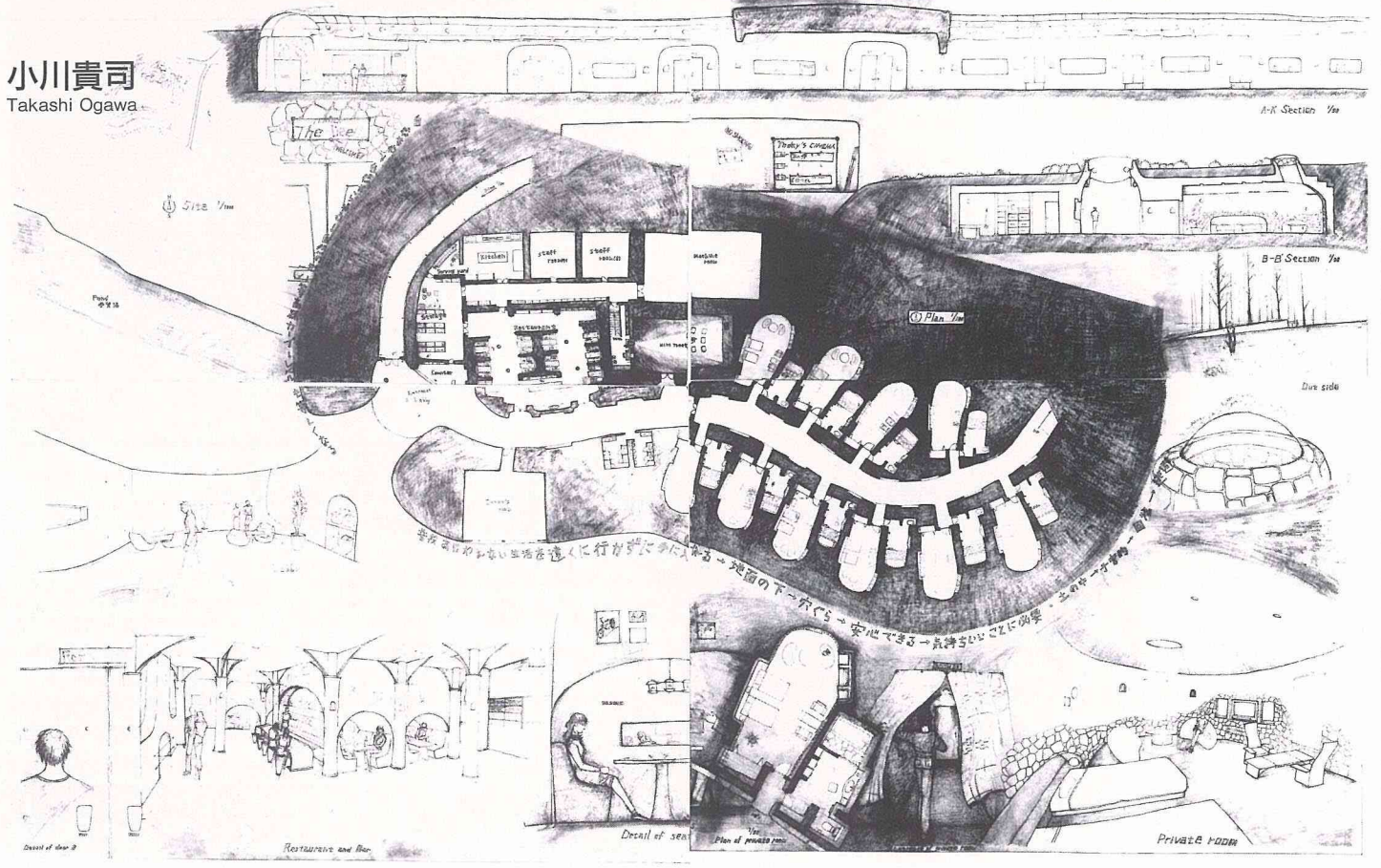


# Underground Space

93-09472 Ogawa Takashi

## 小川貴司

Takashi Ogawa

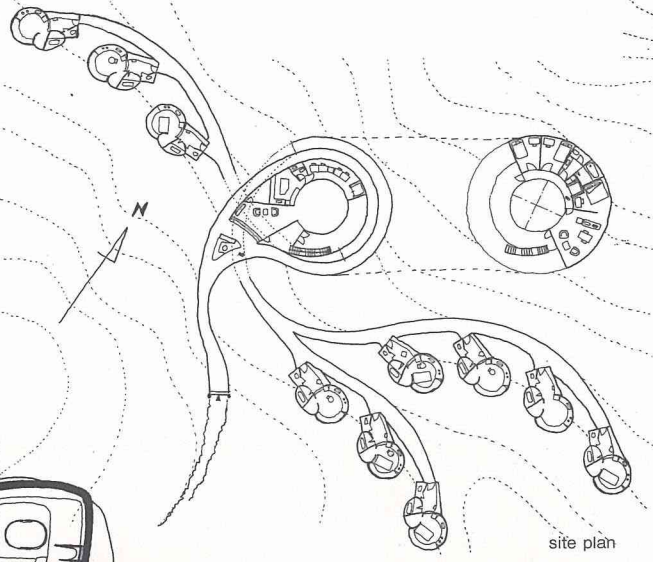


# ノベヤマ トーチカ

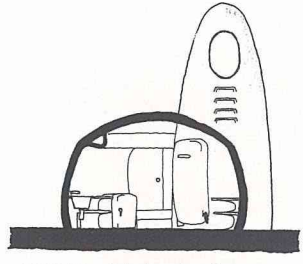
Pillbox in Nobeyama

藤田康仁

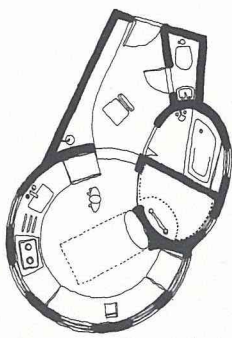
Yasuhito Fujita



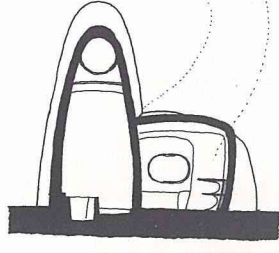
site plan



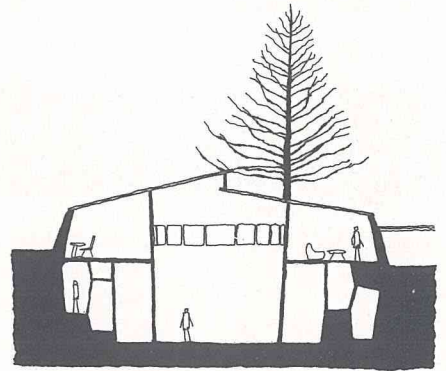
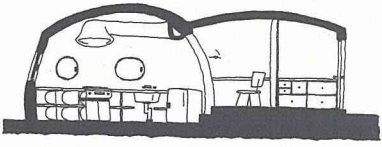
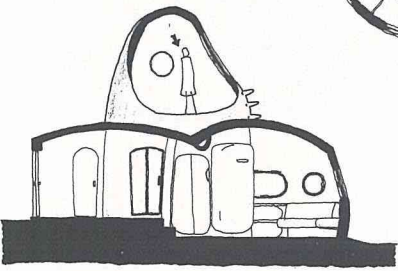
guest room interior elevation



guest room plan



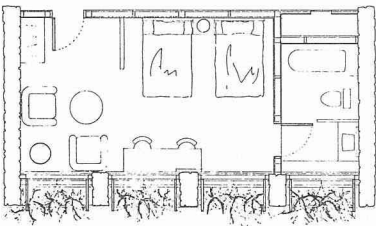
section



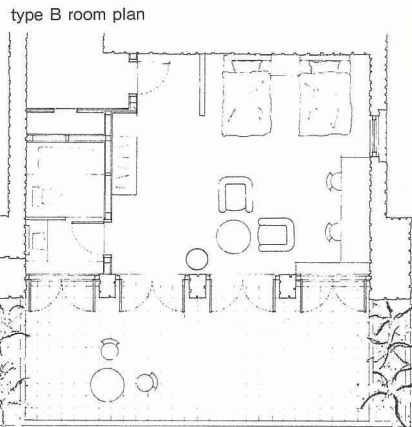
# Pleasant House

馬庭世津子

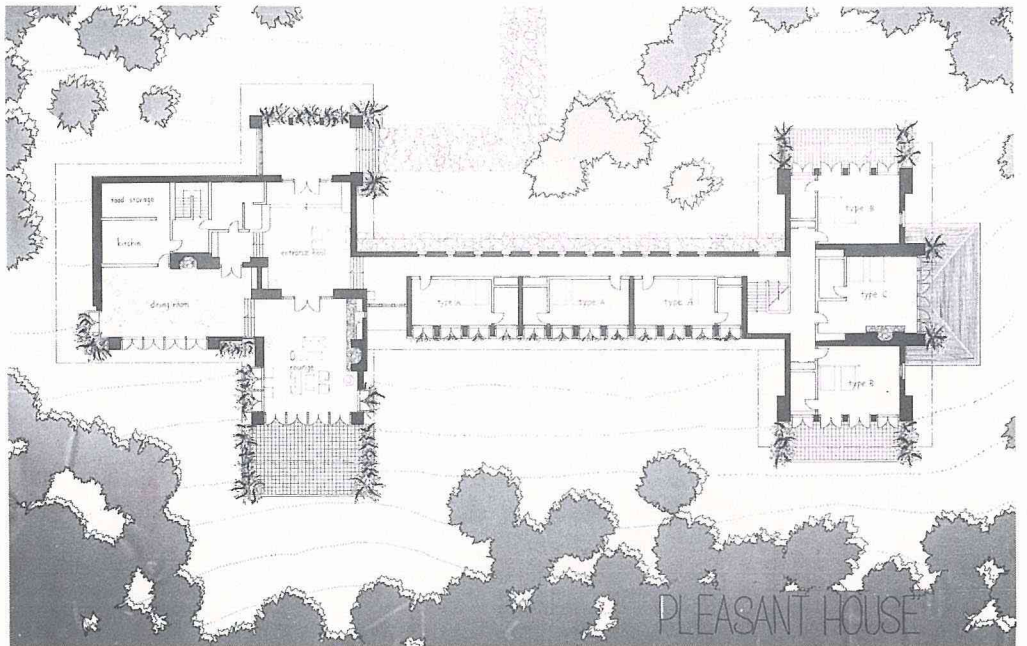
Setsuko Maniwa



type A room plan

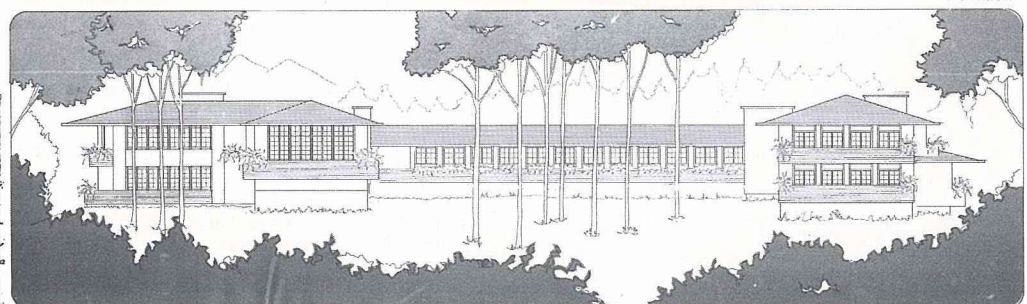


type B room plan



site plan and 1st floor

elevation



# 1995年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

Best Junior-Studio Work: Autumn Semester

## 【ビル・ゲイツの家】

House for Bill Gates

### 講評

非常勤講師 竹山 聖

ウィンドウズ95で世界を席卷したマイクロソフトの社長、ビル・ゲイツの家、というのが今回の課題です。コンピューター・ジェネレーションの学生諸君が、新しい時代の息吹をどんな風を感じとっているのかが、僕自身、深く関心をもつところだったのですが、意外にもパソコンをもっている人がいなかった。でもコンピューターには親しんでいるでしょう、課題にぐんぐんはまっていくくれる人が多かったので、まずは良かった。

意識と身体が引き裂かれているんじゃないか、というのが、僕からの最初の問題提起でした。そしてこれからますます引き裂かれて、でもひょっとしたら混ざりあって、互いが互いを裏切りながら、いつしか新しい意識と身体が生まれているかもしれない、などとも言ったかもしれませんが、とにかく、無限を考えることのできる意識と、あくまで有限な存在の身体の、思想や技術の進歩にドライブされながらの馳(いたち)ごっこが、新しい空間を生み出してきたのは確かなのだから、コンピューターという新しいツールに触発されて、意識が突然変異を起こさないとも限らない、それが現実の空間に置き換わる技術の獲得には、いままじし時間が必要だとしてもね。

竹山 聖  
Kiyoshi Takeyama



1954年 大阪生まれ  
1979年 京都大学工学部建築学科卒業、東京大学にて修士・博士課程修了、大学院在学中に設計組織・アモルフ創設、92年より京都大学助教授  
主な作品：OXY乃木坂(アンドレア・パラディオ賞入選)、軽井沢の別荘(吉岡賞)、TERAZZA, Stairway to Heaven(名古屋都市景観賞)、パストラル・ホールなど。  
主な著書：作品集「竹山聖」「都市を呼吸する」CD-ROM作品集「竹山聖/空の建築」

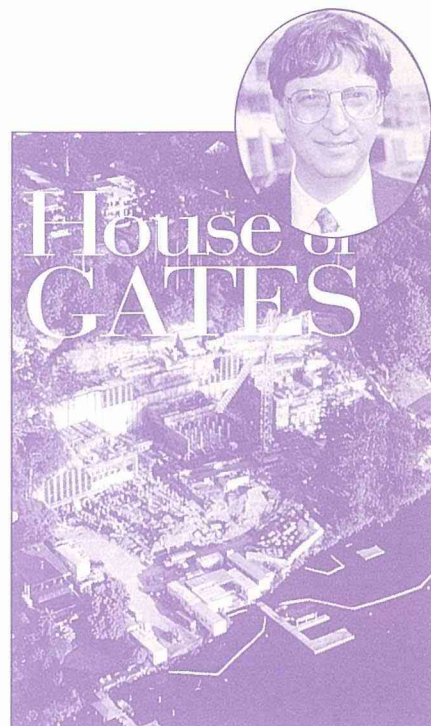
●主旨：今年40歳になったばかりのビル・ゲイツは、マイクロソフト社の社長であり、アメリカでもっともリッチな人物であるとされている。彼が今、シアトルに自邸を建設中だ。

コンピューター・ビジネスの最先端にいる彼のために、君ならどんな家を建ててあげられるだろう。彼が建てようとしている家についての彼のコメントやデータを読みとり、彼の求める空間を想像し、そして彼のためにもっともふさわしいと君が考える空間を提案してほしい。

彼の要望を満たす限り、敷地の選定や規模、構造は自由である。予算？むしろ自由である。

好きなだけの予算と思いでおりの敷地をえて、さてどのようなライフスタイルを描くのか、すべては君の判断にかかっている。

"I think that's pretty interesting," he says. "...but it's not really a lifestyle."



つまり身体は遅れてやってくるのだから、いつの時代も。

建築の設計がおもしろく、かつ難しいのは、建築物があくまで物質なのにも関わらず、こいつを構想する段階では影も形もない非物質、人間が頭と体を動かしながら、釘1本打つでもなく、煉瓦ひとつ積むでもなく、現実と非現実の境目に生み出してしまうシミュレイテッド・スペースだということ。なんせアーキテクチャーというくらいだ。

でもきっと僕らは風を感じたり光を感じたりしながら建築を考えている。仮想の現実には身体を遊ばせている。絶対に記号のゲームなんかじゃない、と深く信じている。石の壁を思うときとガラスの壁を思うときは、空気の色も匂いも冷たさも、全然違っている。そんなふうにもったり感じたり考えたりする人間の意識と身体が、コンピューターで変容するならどんなふうにならう。五感以上を丸ごと面倒みてなお、身体の快適さを問いかける建築はどう変わるんだろう。生活は、価値観は、そしてそれを支える技術は……。

今回参加してくれた学生諸君は、そんな課題に真剣に、そして時にユーモアをもって(とても大事なことだ)応えてくれた。日々の暮らしの場面に応じて、変化する壁と変化しないエレメントをもって、自在なプログラムを組んでくれた笠井誉仁君。地下に過激な意識の実験装置を埋蔵しながら、まるでなにごとにもなかったかのように、地上には穏やかな日常を繰り広げる山口由美子さん。すべてのアクティビティがちりばめられた、確率論の支配する均質な生活の場から屋根に移動すると、とびきりのスペースが用意されているという、(失)楽園のシナリオを書いてくれた小野田環さん。そのほか、多くの魅力あふれる「建築」的提案が、雪崩を打って押し寄せてきた。

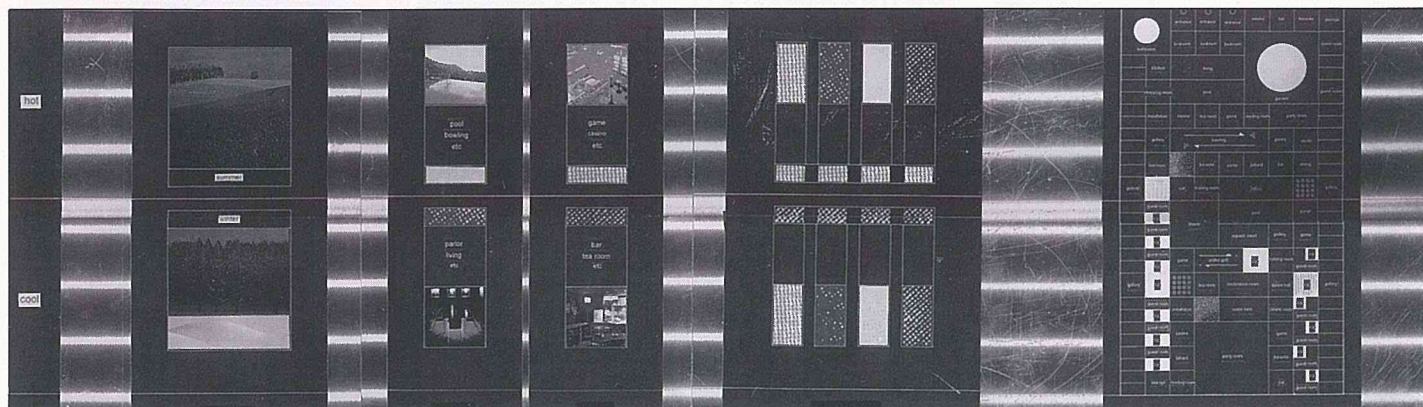
味を占めた僕は今、同じ課題を京大の4回生のスタジオ・コースでやっている。ちょうど今日がその中間提出日で、どうして京大もなかなか捨てたもんじゃない。9月の團先生のジュリーに合わせて展示でもしてもらおうかと、実は今も話していたところです。

# Daily Program House

笠井 誉仁  
Takanori Kasai

■朝起きると彼はまず、芝生の大斜面を見下ろす PROGRAMING ROOMで、その日の気分でプログラムを組む。たとえば打ち合わせがある日——“今日は飯食ってからボーリングを一投して、軽くテトリスやってから仕事を始めよう。打ち合わせはPM3:45. 終わってからSCASHで汗を流してプールへ。今日こそストライクをだすぞ!” DATAをINPUTすると、たちまち地下から壁が立ち上がり、その日の住宅の領域ができ上がり、彼の一日は始まる。■車好きの彼は、年に一度ここで盛大にモーターショーを開催す

る。この日、すべての壁は地下に下ろされ、辺り一面MENTAL-HOT-PICTURE IMAGEで埋めつくされ、大勢の人びとが招かれ、オールナイトで酒を飲み、語らい、そして踊り狂う。まさに“CARNIVAL”である。■その名が世界にとどろき、うかつに外で遊べなくなったBILL GATES. 彼は今日もハイテクを駆使して、緑の絨毯の下、仕事に追われながらも、遊んでいる。その姿はあのマイケル=ジャクソン同様、どこか悲哀が漂う。



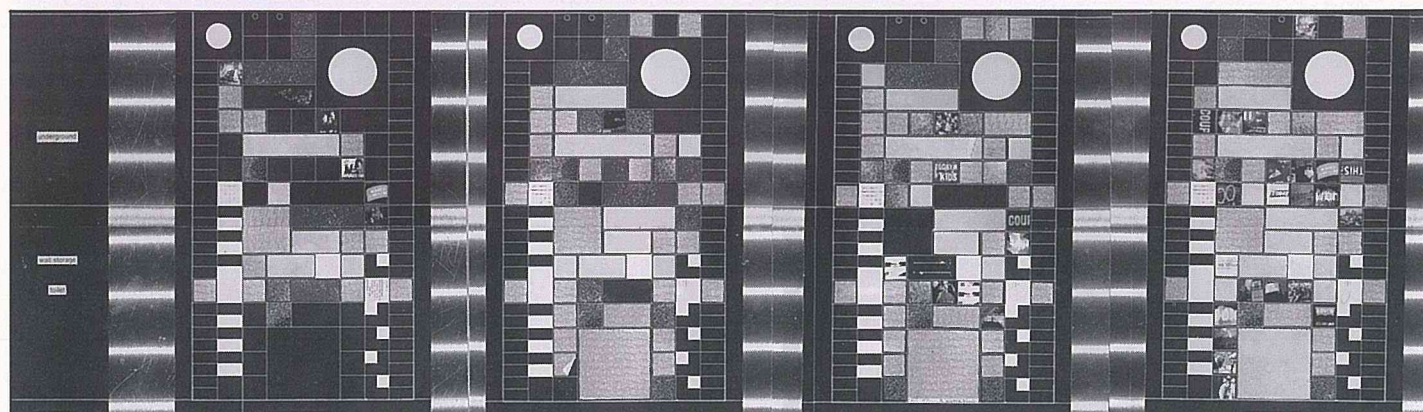
landscape

physical

mental

picture image

plan



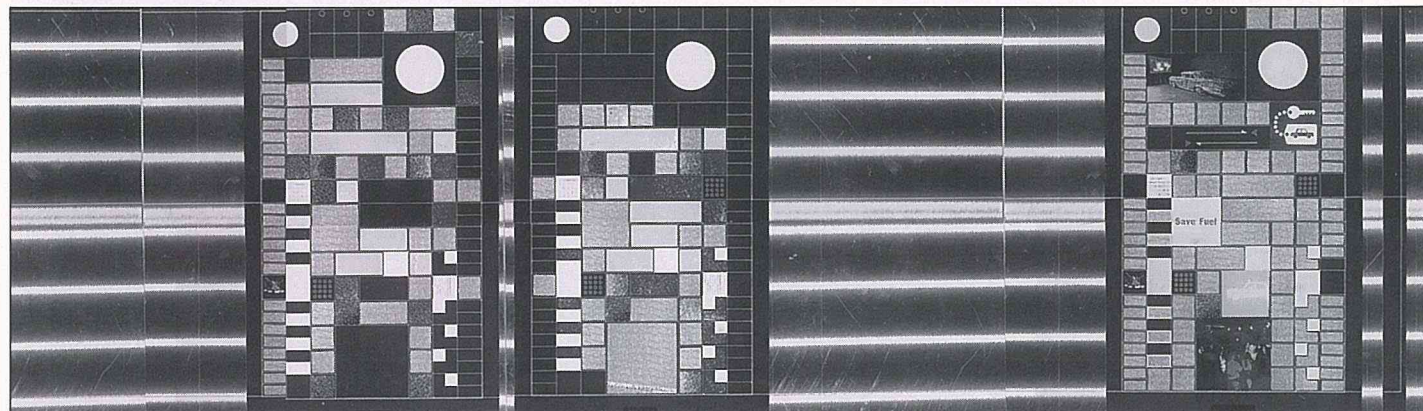
function

conference

Bill Gates

his wife

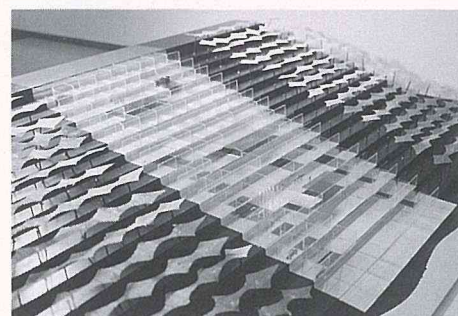
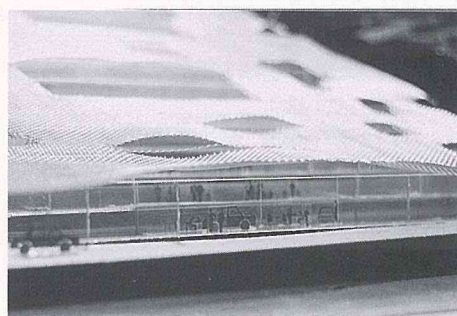
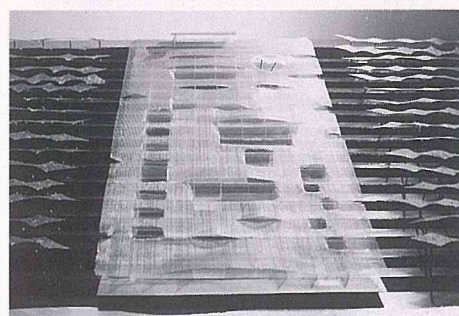
his children



semi-public

public

carnival





# Xa NA dU

小野田 環

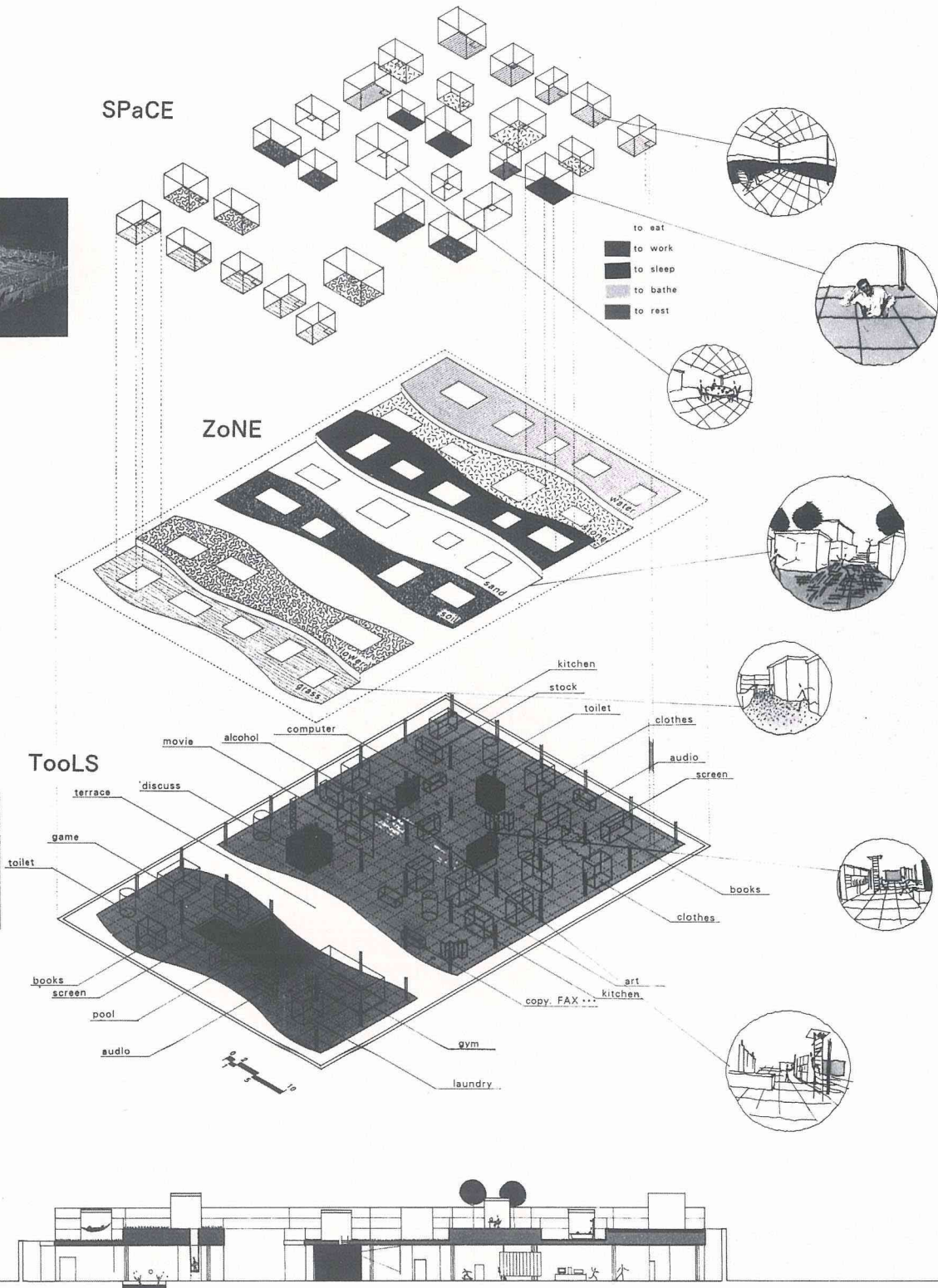
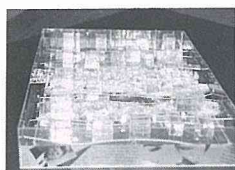
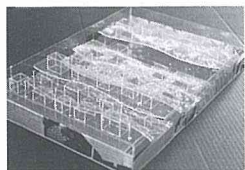
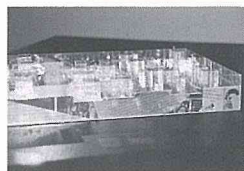
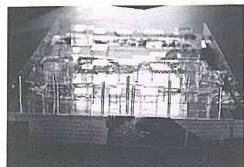
Tamaki Onoda

彼には家があった  
 椅子に座り、欲するものを体験する日々を送っていた。とりわけポーカーの快樂。  
 そこから得られる刺激は、脳に活力を溢れさせた。  
 時はいつか“疲れ”と“けだるさ”をしのびこませていた。  
 ある日、ふたりの生活を築き始めた。  
 まもなく、生活になにか足りないと感じた。

彼は屋根の上に抜け出した  
 そこには、ただ空があるだけだった。  
 深呼吸し、芝を敷き、空白のスペースをつくった。  
 そこは食べるところとなり、寝るところともなった。  
 たくさんの自然な空間を求めた。

彼の家はふくれたした  
 大きく深い呼吸をするようになった。  
 活力の源泉は、ちりばめられた。  
 “かくれんぼ”の愉しみ。

彼らには家がある  
 空間 (Zone) と部屋 (Space) とを、2本の足が快活に結んでくれる。  
 歩きながらさまざまな情報を好きに選んでいく。  
 彼らの勝手気ままな生活が始まる



### Studies in Architectural Composition

#### 講評

講師團 紀彦

solidとvoid, figureとground, Gestaltの図と地の反転をテーマとし基礎的で構成論的な課題である。

site 1 では、所与の不整形な都市の敷地の中にインフィルされたボリュームから、その30%の部分をボイド化することによって、デザインとプログラムを決定してゆく。site 2 では、その30%に相当するソリッドを外界の開けたロケーションの中で建築化しながら、両者に意味論的な関係性をもたせることが求められた。周辺環境の設定とプログラム設定に極力具体性をもたせることが、課題の必要条件であったにも関わらず、課題の性格上、学生の作品内容が抽象性を帯びてしまったことは、残念ながら否定できない。

五嶋崇君の作品は、voidとsolidの間に親和力がみられ、そのバランスのとれた構成が評価された。

丸山省吾君の作品は、site 1, site 2 共に力作であり、それぞれ建築のもつ力強さを感じさせるものがあるが、形態のもつ意味と、両者の関係性のデザインにもうひとつ提案性が加われば、さらにレベルの高いものとなったはずである。

小川一人君の作品は、構成的に洗練度の高いものであるが、全体的に少しまとまりすぎている観があるのが気になった。site 1 のボイド部分とsite 2 の内容にプログラム上の共通性をもたせ(たとえば、site 1 の場合オフィスビルの中のゲストハウスとか、ホテルのアトリウム空間のようなもの) 相互の相乗効果を高めれば、さらに新しい展開に結びついたのではなかろうか。

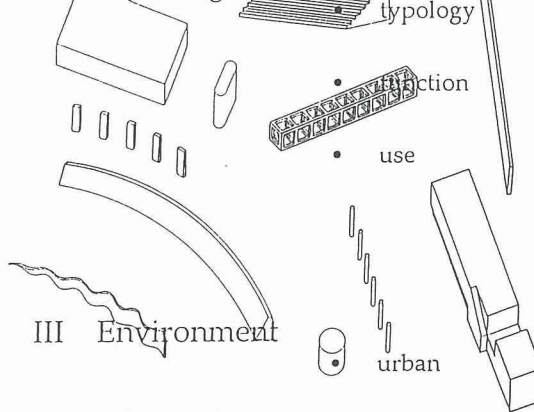
浦橋信一郎君の案は、site 1 では都市の中の銭湯を、site 2 では海浜ホテルを設定したユニークな提案ではあるが、その共通項となっているオーバーラップを主題とした構成要素に、もうひとつ空間的、プログラム性の面からの必然性を与えてほしい。

#### I Composition

- symmetry
- asymmetry
- figure/ground

#### J U X T A P O S I T I O N

#### II Program

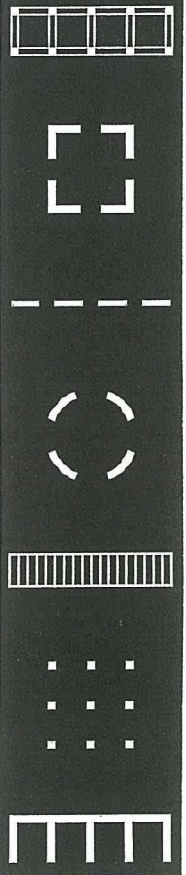


#### III Environment

e<sub>1</sub>, e<sub>2</sub>, e<sub>3</sub>, …… e<sub>n</sub>

- suburban
- natural

#### Elements

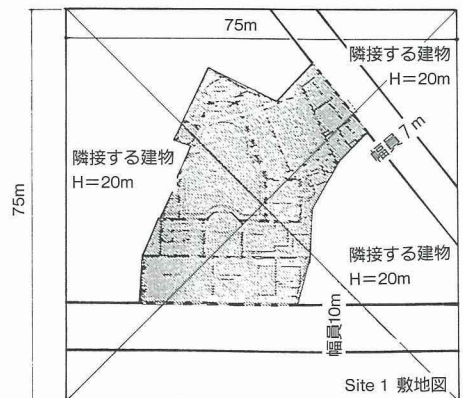


#### ●site 1

- 都市の中の一角 (どこの都市かは各自で想定)
- 右図に示す75m×75mの範囲
- 幅員10mと7mの2つの街路に面している。
- 隣接する建物は敷地いっぱい建っており、高さは20mでほぼそろっている。計画する建物もこの高さにはほぼ合わせる。
- 建物の外形輪郭は変えられない。中身はまったく新しく提案する。
- 建物は道路境界いっぱい建てる。ファサードは変えてよい。

#### ●site 2

- なめらかに連続した広大な広場の中。
- 広場の中に75m×75mの範囲を想定し、その範囲内で5mの高低差をつける (各自想定する)
- ランドスケープの方向性や特徴 (近くに海や森があったり、敷地の中を小川が流れていたり……) は各自自由に想定する (必ず想定する)
- 建物はいかなる方向からも見られるものとする。それくらい広々としたところにある。

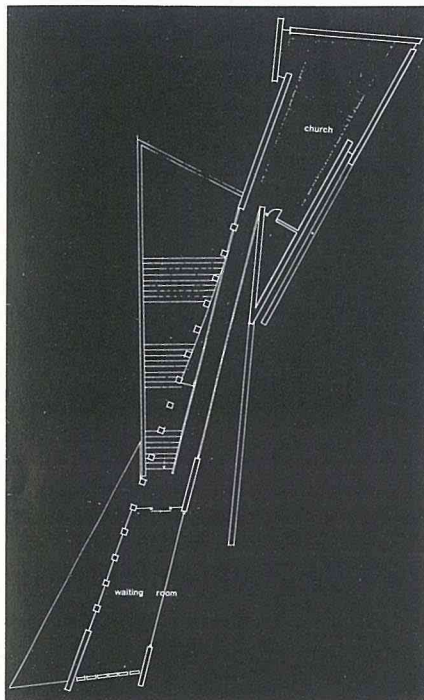


# Desire.....欲望の覚醒/欲望の抑制

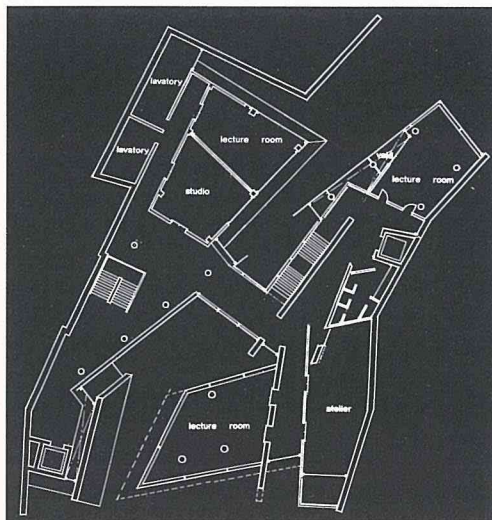
Desire: Satisfaction and Sacrifice

五嶋 崇

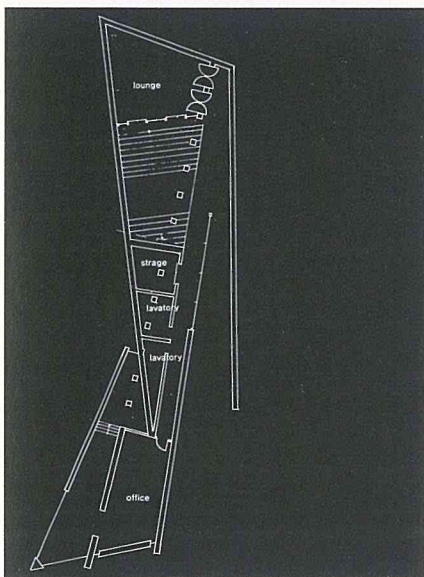
Takashi Goshima



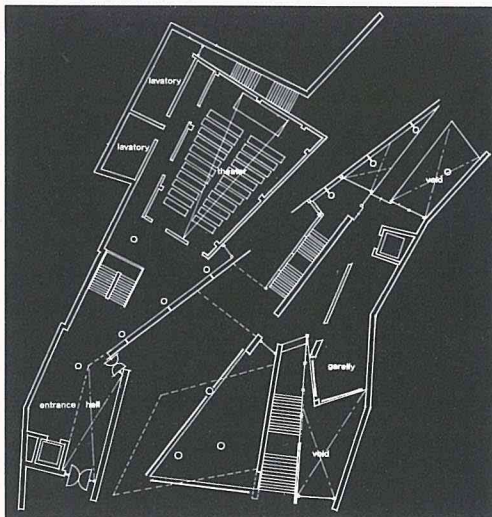
site1: 2nd floor



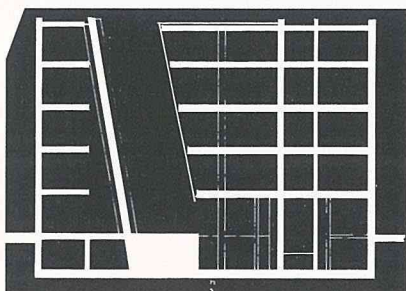
site2: 4th floor



site1: 1st floor

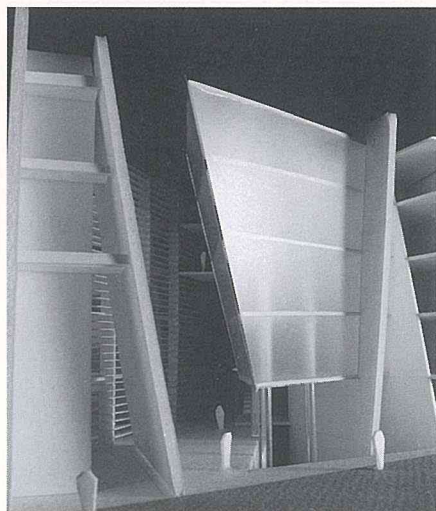
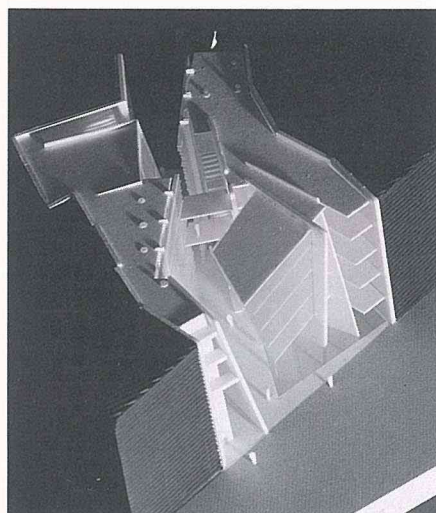
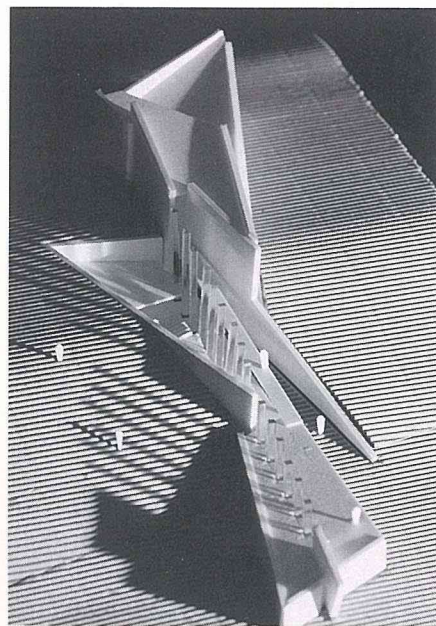
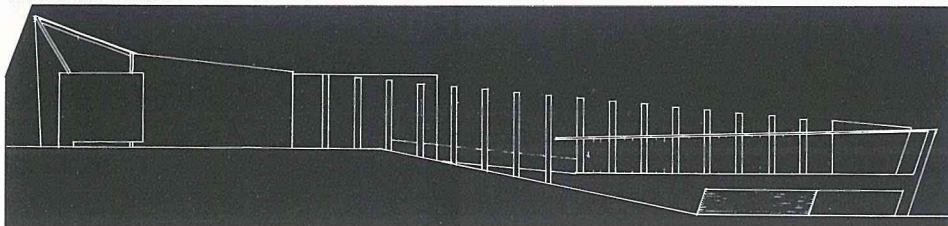


site2: 1st floor



site1: section

site2: west elevation



site 1: void/欲望の覚醒

- 裂かれた空間
- ずれと裂け目から溢れ出す異空間
- 都会において多様な感性を育む場——美術学校
- 欲望を満たすことで生まれる新たな自我

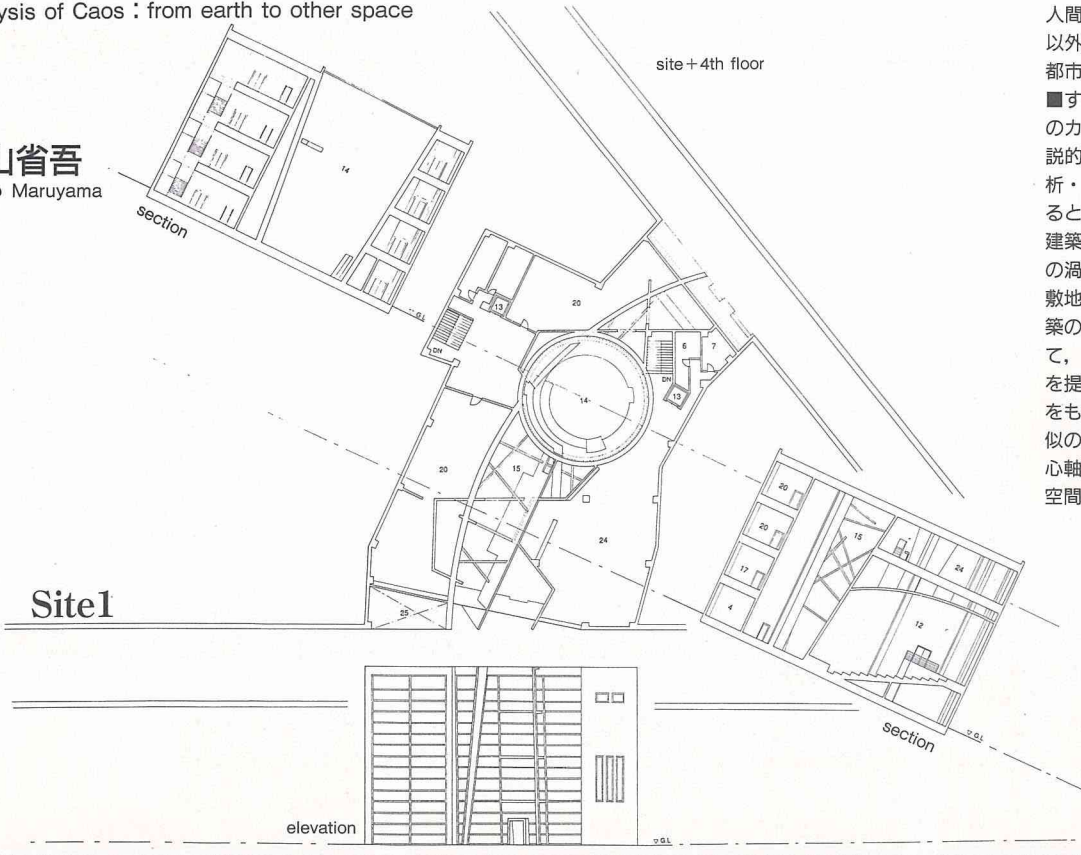
site 2: solid/欲望の抑制

- 成長する空間
- 大地より湧き出る異空間
- 自然の流れに身をゆだねる場——教会
- 欲望を消すことで確認する現在の自我

# Caos (混沌)の解析・解明 地球から地球外へ

Analysis of Caos : from earth to other space

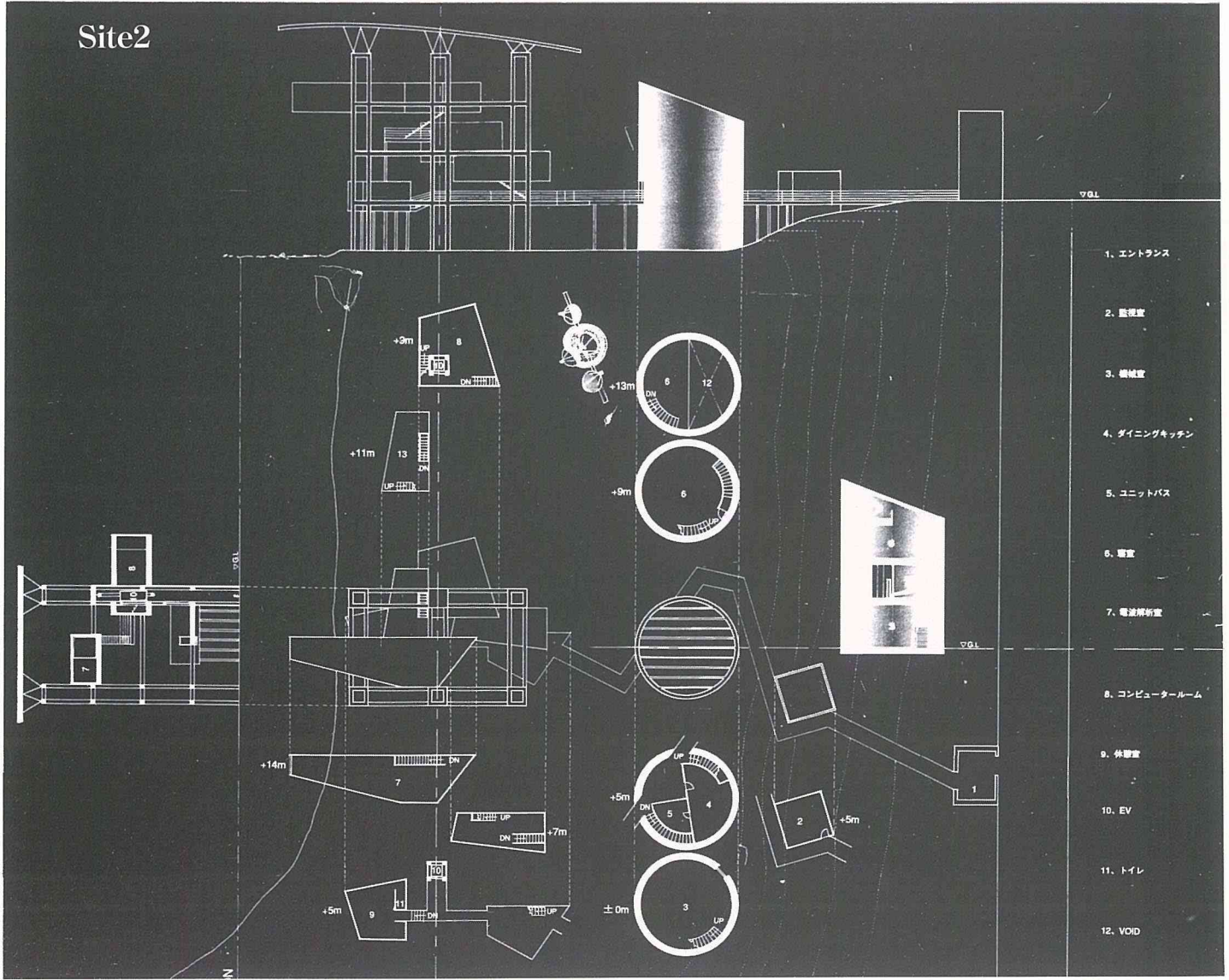
丸山省吾  
Shogo Maruyama



Site1

■宇宙はカオスから誕生した。その進化はカオスの連続であり、地球、都市、人間もカオスの渦中にある。また地球以外の物体——天体、そこに存在する都市、生命体についても同様である。  
 ■すべての物体(地球、都市、人間etc)のカオスを解明する過程において、逆説的に地球外生命体(のカオス)を解析・解明していくことが手がかりになると想定し、「地球外生命体研究所」の建築プログラムを設定した。■カオスの渦中にある都市という機能の中で、敷地は複雑な形態をもつ。ここでの建築の最適解を求めるための一手段として、フラクタル幾何学の「自己相似性」を提示する。全体と部分は同じ複雑さをもつという定義から、全体と個の類似のための手段として、辺の方向・重心軸の共有等を基本とした上で有用な空間の創作を試みた。

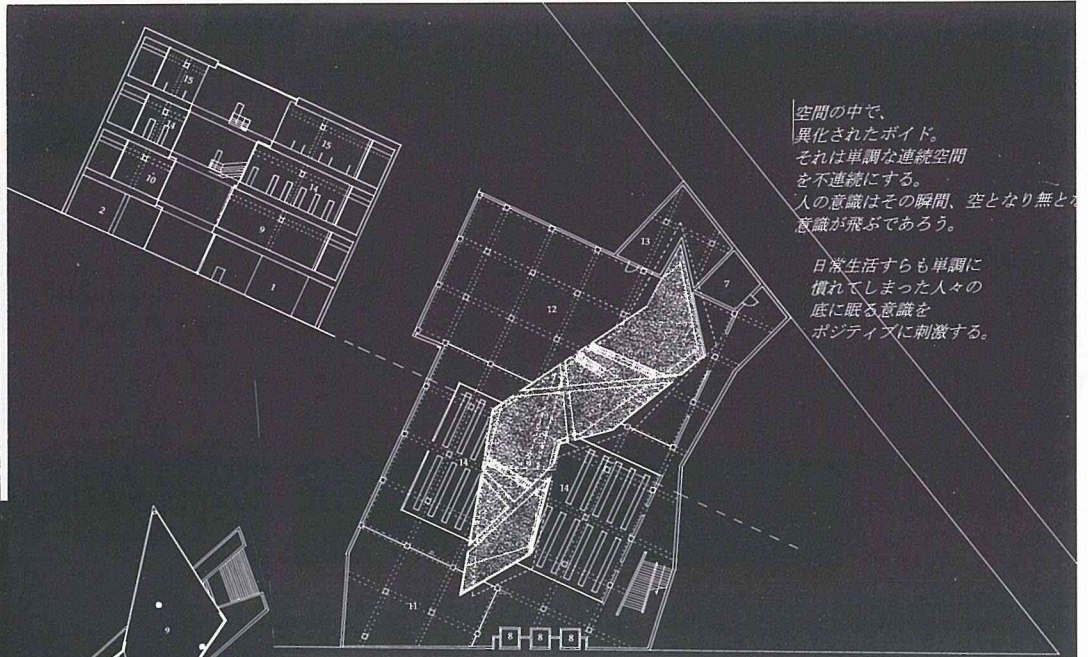
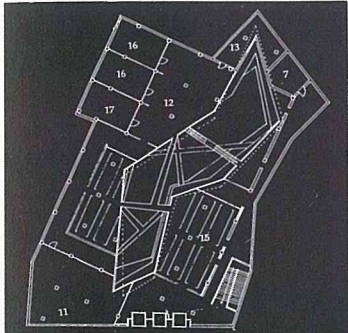
Site2



# Mono-tone/Void/Mono-tone?

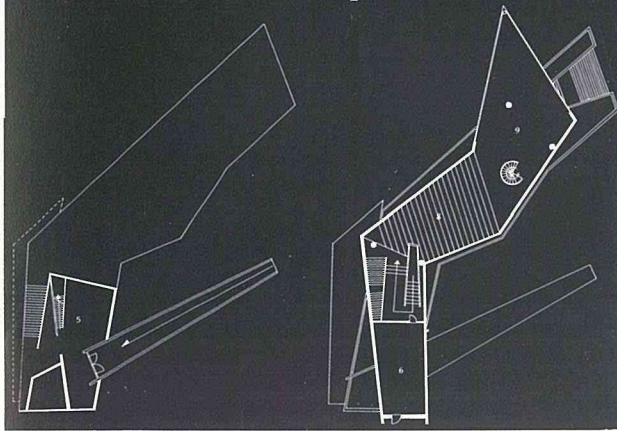
小川一人  
Kazuto Ogawa

site1: 4th floor



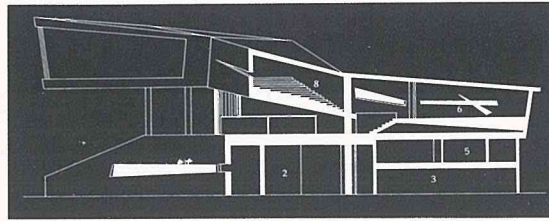
空間の中で、  
異化されたボイド。  
それは単調な連続空間  
を不連続にする。  
人の意識はその瞬間、空となり無とな  
意識が飛ぶであろう。

日常生活すらも単調に  
慣れてしまった人々の  
底に眠る意識を  
ポジティブに刺激する。



◀site2: 2nd floor (L) 3rd floor (R)

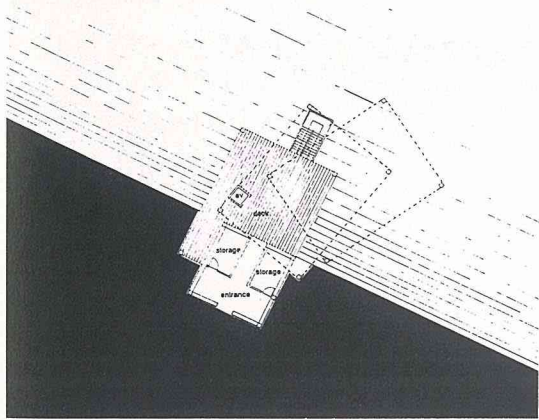
▲site1: section (L) 2nd floor (R)



site2: section

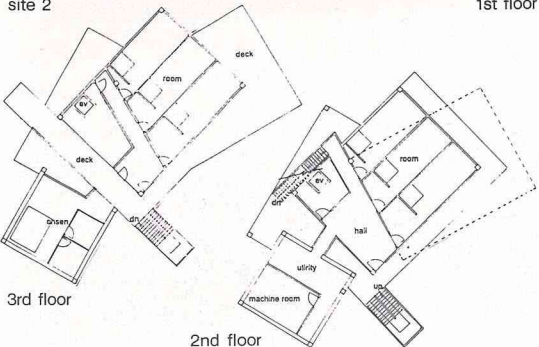
# Void ↔ Solid

浦橋信一郎  
Shinichiro Urahashi



site 2

1st floor



3rd floor

2nd floor

site 1



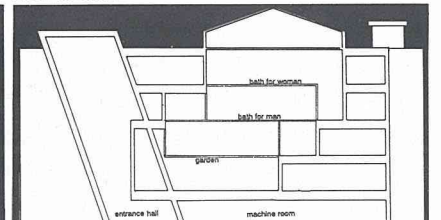
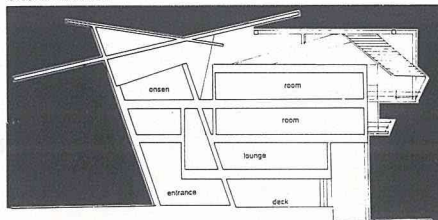
4th floor

2nd floor

3rd floor

site2: section

site1: section



# 1995年度卒業設計製図優秀作品・大岡山建築賞

Best Diploma Design Thesis

## 講評 TIT建築設計教育研究会運営委員長 林 昌二

大岡山賞・銀賞への講評を書けとのことですが、講評に当たっては、評価のためのクライテリアが作者と評者の間で共通化されていなければ意味がありません。そこでまず、私の考える建築のクライテリアについて記します。

その1は、「地盤・近隣」です。建築物は完成してしまうと地表から上しか見えませんが、実は支持地盤に根を下ろしています。どのようにして躯体の重量と地盤の浮力・支持力とをバランスさせるかが、設計の根本の課題です。地盤の状況次第では船のように浮かせる構造体の場合もあるかもしれず、そうなれば建築物全体の構想が変わるでしょう。

周囲の地形や既存の環境との関係もあります。自然環境の中では地の相を読み取ることが大切であり、市街地では街並み形成という視覚的要素と、近隣との関係という人間的要素を学びとることが必要になります。

その2は「モノ」の世界のことです。建築物はモノの集合ですが、モノたちの間をどのように秩序だてるかが設計です。それまでは何の意味もなく見えていたモノたちが、設計者の示す秩序に従って組み立て上がる時、突然生命を与えられたもののように機能しはじめます。モノたちそれぞれの個性を最大限度まで引き出し、最良の関係性を作ること、言い換えれば最小の資源・エネルギーによって最大の魅力ある空間をつくりあげることが設計という仕事です。モノとモノとの接点に起こるであろう事件を予見して、ディテールによって解決してゆく愉快さは、設計という仕事の醍醐味です。

その3は「ヒト」で、実はこれが基本です。建築の設計は、ヒトの生活を設計することでもあります。ヒトの生理は古代から現代まであまり変わっていません。空調や人工照明はやむを得ない一時的な手段にすぎないのであり、建築物の内部でもできるだけ自然の風と陽光を受けて過ごせるように、特に食事や排

泄といった生理に関する空間については、人工要素を排除して成り立つように設計する技術が求められます。建築空間のつくられようがヒトの生活へ及ぼす影響は大変なものですから、そこに暮らすことで自然に愉快的気分になれるような建築物を設計できるかどうか設計者としての腕が問われます。

以上3項のクライテリアは、ごく常識的なものと思うのですが、近年、それらとは性格の異なる評価軸が出現し、これを無視するわけにはいかなくなってきました。

それは、社会の情報化が急激に進む過程で起きた現象で、建築デザインをバーチャルリアリティーとして市場化し、実体としての建築物から独立させる方向です。表現はドローイング、模型、コンピューター上またはテレビの画像上で行われるので、もっぱら造形性と表現力が問われることになり、建築家は情報市場でのタレントへと変身してゆきます。

この現象を加速しているのが国際コンペで、その審査では、共通の評価軸として一定のスタイルが打ち出されることになり、建築ファッションの一種支配が確立されてゆきます。

バーチャルリアリティーの市場の成立によって、土地やモノやヒトや経済など、実体建築への関わり合いに無関心な傾向が生まれその影響が、教育・研究の場にまで及んだとしても不思議ではありません。

実体としての建築世界と、バーチャルリアリティーの建築世界という、一見似たように見えながら本質的にかけ離れてゆく2つの世界に跨る作品群を前にして、講評はどのように成り立つのかと、考えこんでしまいます。

講評に入る前のところで、残念ながら指定の紙数が終わってしまいました。講評はみなさん自身でどうぞ。その結果を教えていただくとは難しいのですが。

## 講評 教授 仙田 満

今年の卒業制作は個性的でおもしろい作品が多かったのではないかと大まかな印象を

もった。東工大における卒業制作は12月まで卒業論文にかかるため、年が明けて1月と2月の正味2カ月といえる。これは私が学生だった30年前と変わらない。大岡山建築賞は4人が受賞した。そのどれもが明確な主張をもっているのがよい。2年3年と、非常勤講師として数多くの建築家に接し、その造形精神を学んだ成果が結実したものと思われる。

増山絵理奈さんの作品は、デザインのスマートさが特徴的であるが、2枚の強烈な都市的な壁を設け、上層と下層では異なる関係を意図し、混線を演出しようとしている。デザイン的にはとてもおもしろい。しかし低層とオフィスという空間の主体者の行動を考えたとき、その空間がうまく増山さんの考えたように機能するかどうか疑問に思える。きっとそれは模型の印象があまりにもスマートすぎて、生活というものが見えにくくなっているせいかもしれない。

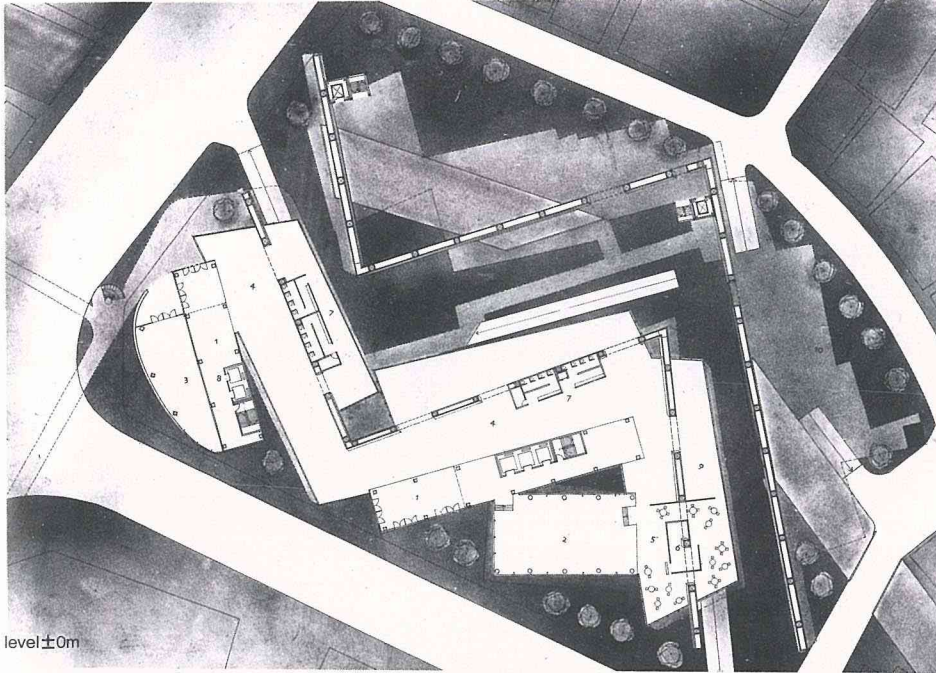
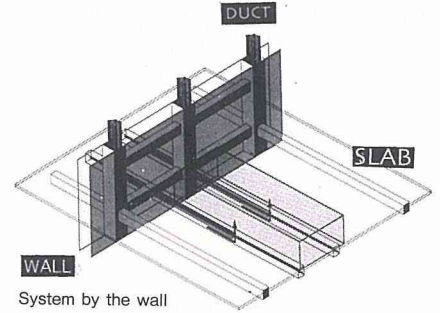
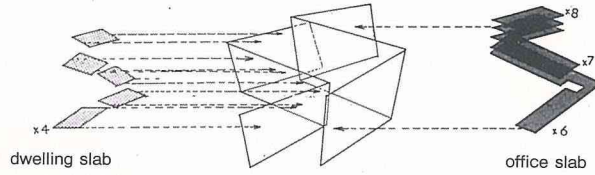
佐々木省悟君の、渋谷のもっともにぎわう路地状空間をデザイン学校としてしまおうという構想はとても大きい。プレゼンテーションも立体的でよい。図面の色づかいも楽しい。卒制らしく発想と表現が一致しているのが評価できるが、タイトルの“SHIBUYA KURUKURU”はあまり適切とは思えない。佐々木君のイメージと構想を伝えていない。

久野靖広君“Complex of Activities as City Background”は池袋に清掃工場と併せた総合コミュニティ施設を提案したもので、全体のプレゼンテーションは楽しくまた美しくまとめられている。プラン全体をいくつかの層に分割して屋根全体を広場化する方法は、ひとつのファッションになりつつある。

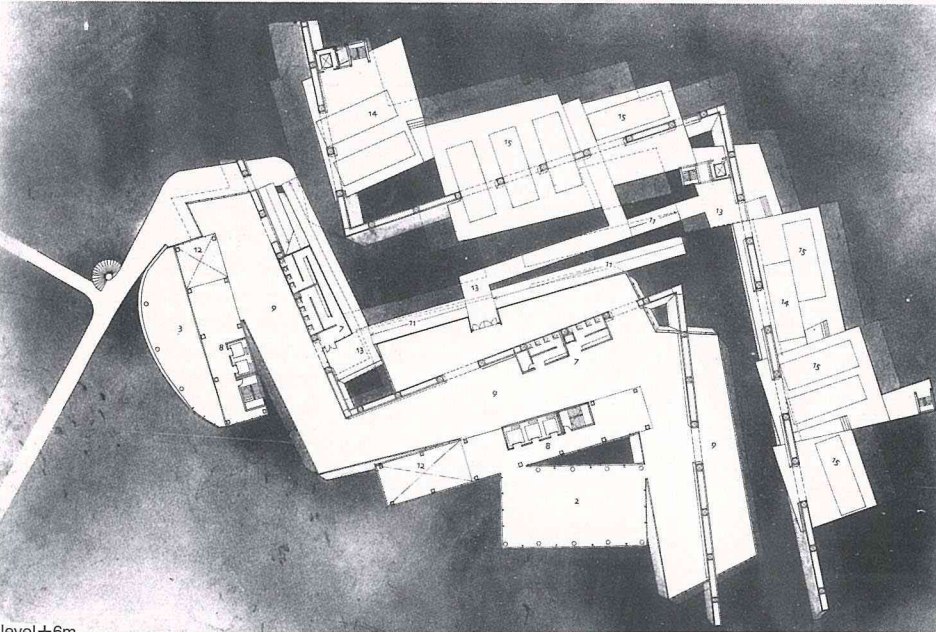
菅菜々子さんの東工大キャンパス開放計画は、大学と地域社会の関係の改善を空間化したものとして評価できる。しかしそのコネクターとしての施設がすこし大げさになってしまっているのは残念である。

この4人の他にも優れたものが多かった。多くの4年生は大学院に進むが、実社会に出る人も含め今後のデザイン的な精進を望む。

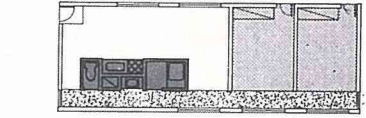
増山絵理奈  
Erina Mashiyama



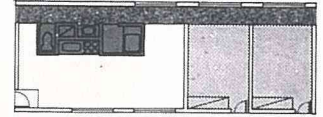
level ±0m



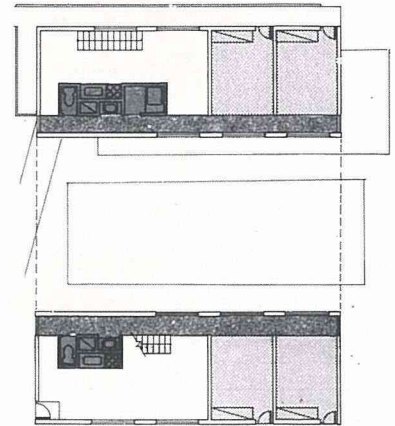
level +6m



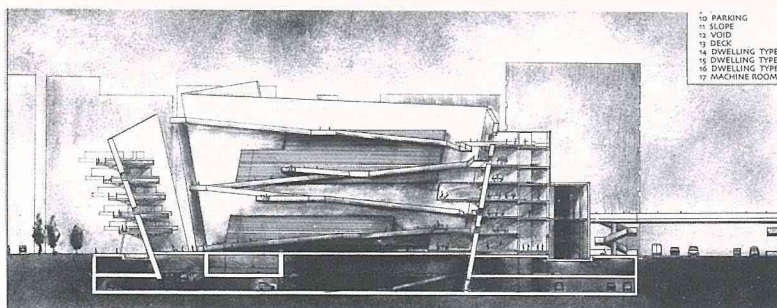
type 1



type 2



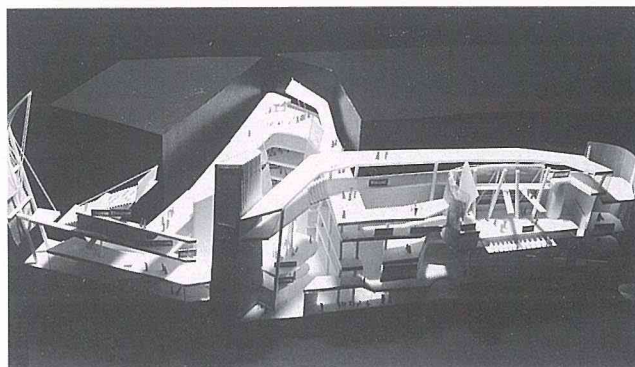
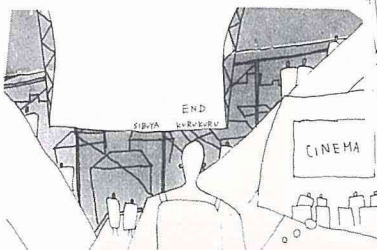
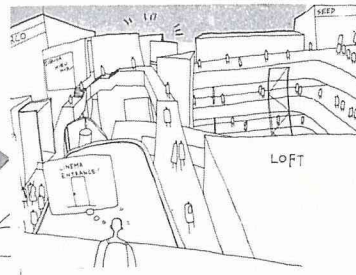
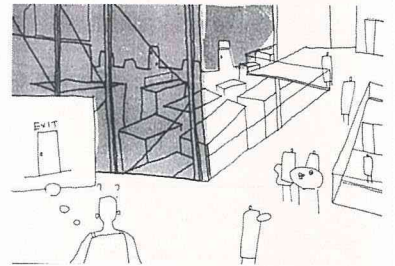
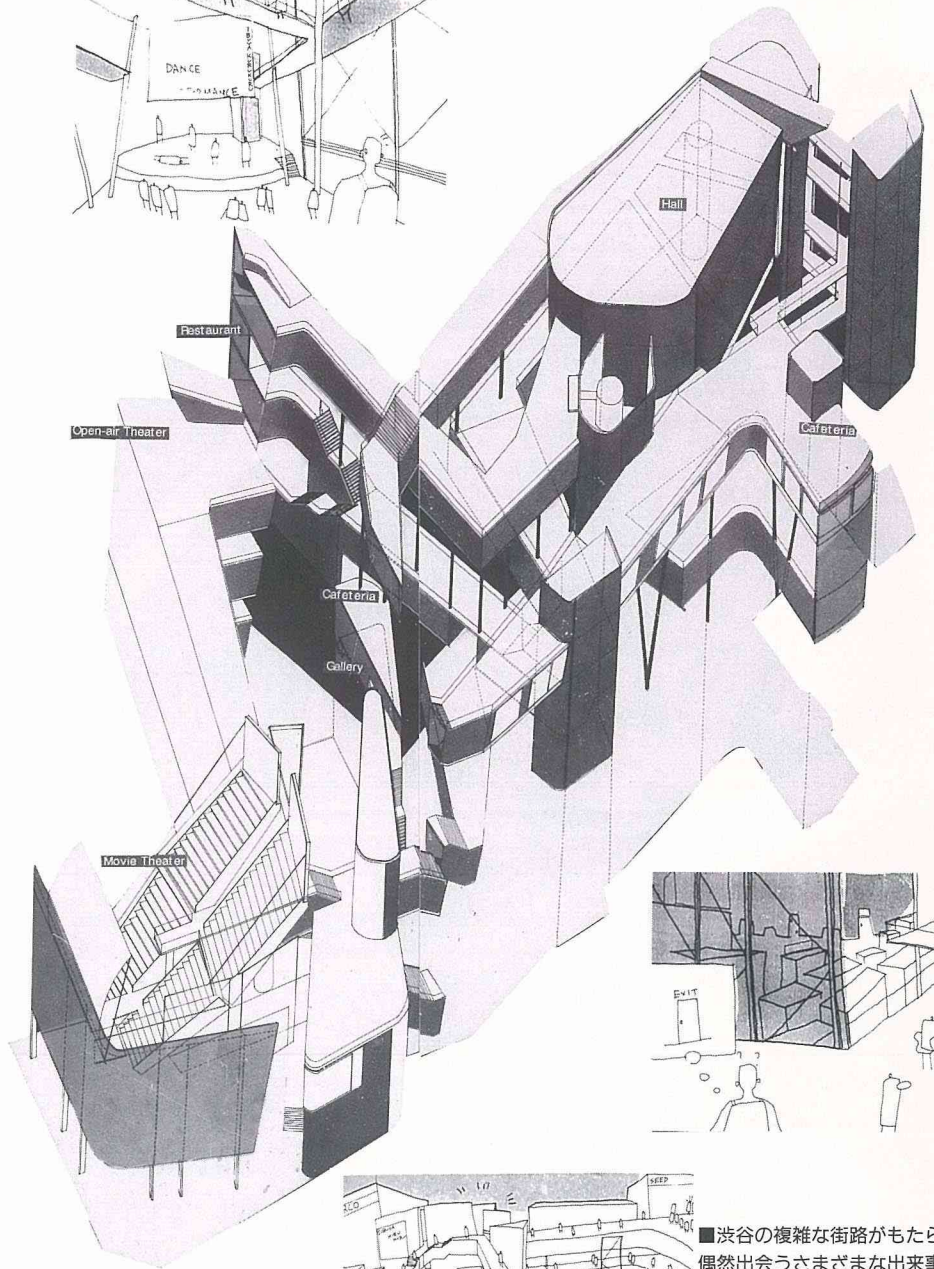
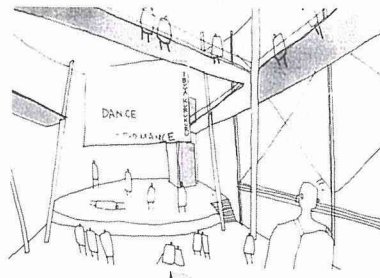
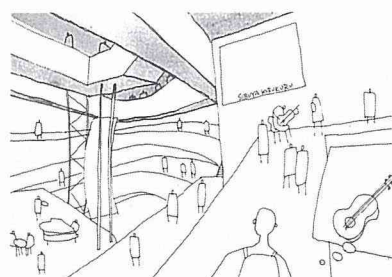
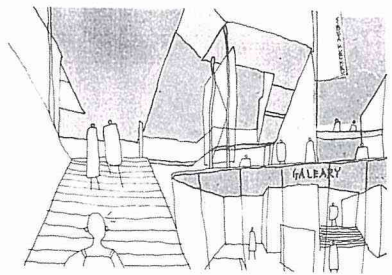
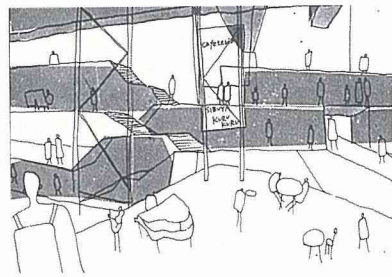
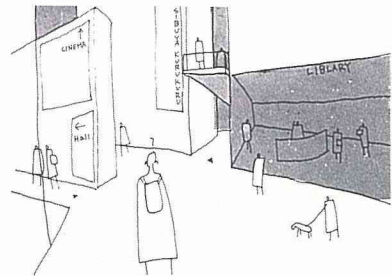
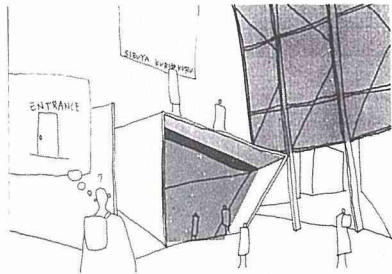
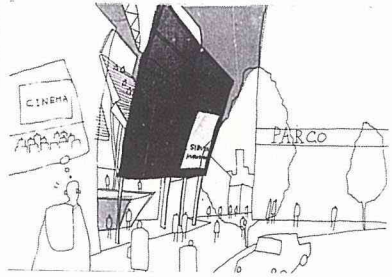
type 3



section

■東京には商業・業務の中心地と住宅地とがある。しかし実際は用途が混在し、似通った場所が大半で、その境界は曖昧となり、明確な定義は難しい。  
 ■敷地は雑多な街へつながる大通りと、閑静な街へ続く大通りが交差する角地である。北東には大きなビル群が軒を連ね、南西には中低層の小さなビル群が密集する。現在敷地は川によって分断されているが、川の再生による敷地の固有性は、現代の都市において有効ではない。  
 ■そこで2枚の大きな壁に挟まれた通り抜け空間を、川の上に流れと交差するように配する。壁の変形は周辺環境や日照条件に応じ、その屈曲は川の蛇行を映す。  
 ■壁中の鉄骨パイプにはすべてのダクトを配管し、給排水、換気を行うシステムを導入する。北東に積層されたスラブはオフィスに、南西のそれは住戸のために機能するが、この異種用途の共存は、異なるスケールの共存として読み替えられる。  
 ■この通り抜け空間では、用途は限定されず、明確な領域をもたない、それがゆえに曖昧性を生みだすことに成功する。  
 ■これは都市の混線の、あるひとつの記録とも言えるのである。

佐々木省悟  
Shogo Sasaki

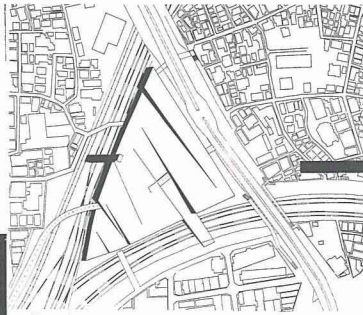
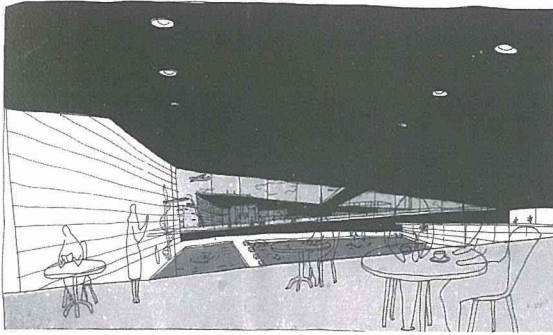


■渋谷の複雑な街路がもたらす混乱や偶然出会うさまざまな出来事は人びとの好奇心をかきたて、私たちに街の楽しさを教えてくれる。この街の中心に建築、美術、音楽、ダンス、映像の5科から成る学校を計画した。■建物はそれぞれの科に独立した5本のチューブによって構成されており、その上部を街路とすることによって街区の中心に立体迷路をつくりだす。この5本のチューブは複雑に絡み合い、それぞれの接点には学生たちの活動を生み出すことを目的としてホール、ギャラリー、屋外映画館等の施設を設けた。■また、建物に迷い込んだ人をこれらの場所へと導くことによって学生との交流ができる場とした。学生たちの好奇心は、それぞれが得意とする表現手法によって建物の先端をのぼし、道行く人を新しい場所、忘れていた場所へと導いてゆく。■歩く街としての渋谷の魅力に注目し、立体街路を作りだすことによって街のあちこちでこうした学生たちのコラボレーションが生まれ、渋谷はより雑多で活気ある街となる。

# Complex of Activities as City Background

銀賞 / Silver prize

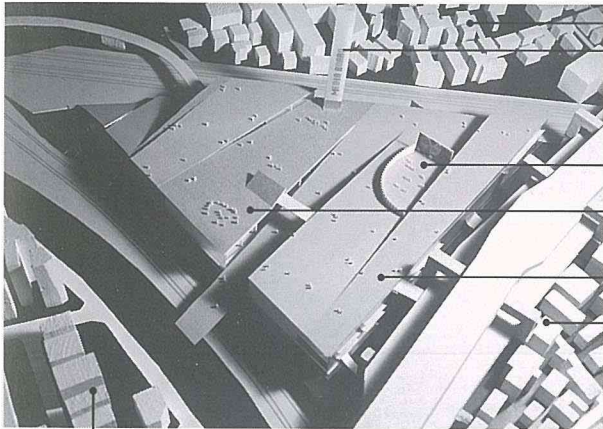
久野靖広  
Yasuhiro Kuno



site plan

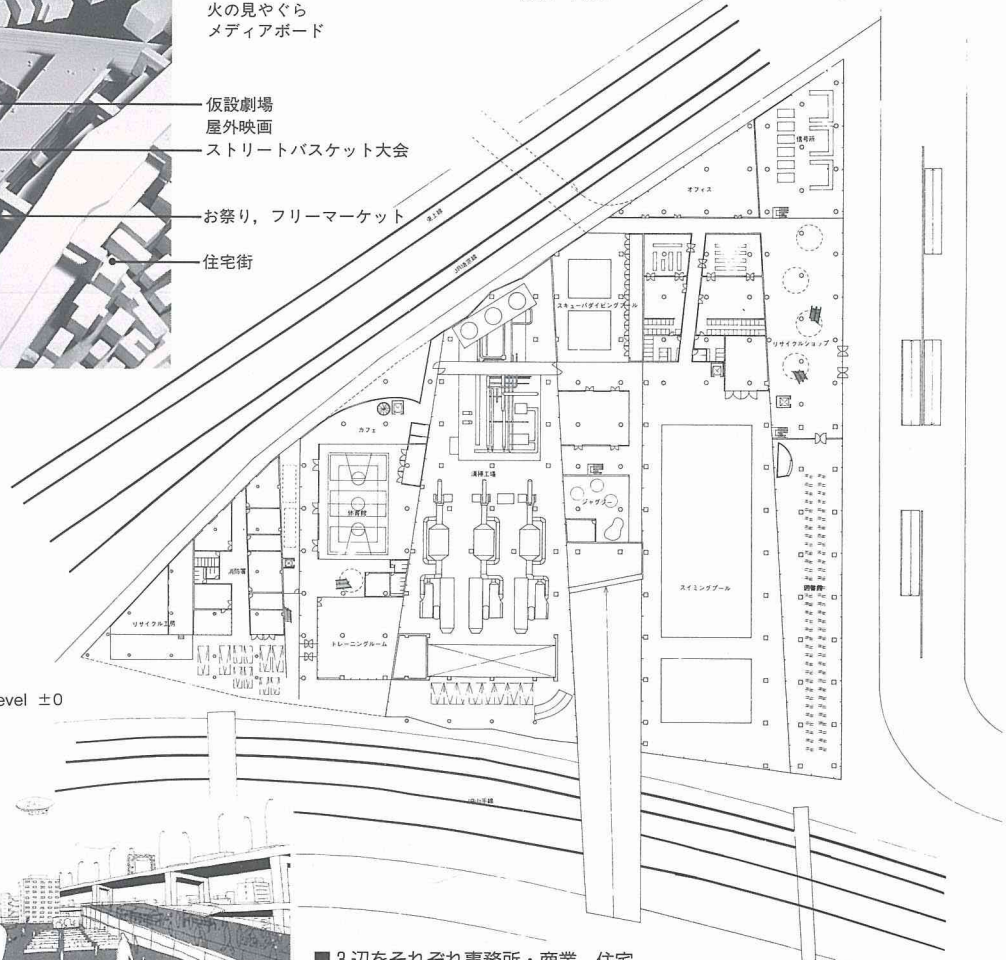


level +16.5



- 歓楽街
- 煙突
- 火の見やぐら
- メディアボード
- 仮設劇場
- 屋外映画
- ストリートバスケット大会
- お祭り, フリーマーケット
- 住宅街

オフィス街



level ±0



■ 3 辺をそれぞれ事務所・商業、住宅地域、歓楽街という異なる地域に面した都市の空白といえる場所を 3 つの地域を結ぶ場と捉え、われわれの生活を裏側から支えているさまざまな公益機能と市民施設の複合体を計画した。■ 内部の機能に必要な空間をつくりだすように 1 枚の板 (=スラブ) は切り込

み、折り曲げられ地盤の褶曲のように地形をつくりだす。これによりさまざまな性格をもつ機能はひとつの建物として統合される。この屋上の空間は 3 つの領域をつなぐ動線であると同時に、イベント広場、あるいは歩行者天国のような空間として開放される。

# 東工大キャンパス開放計画

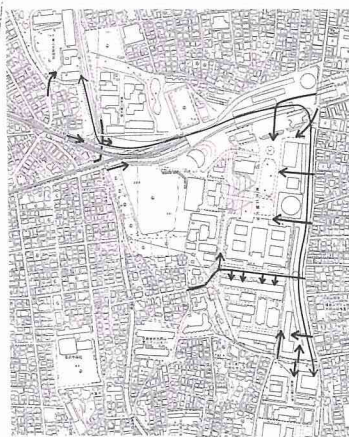
TIT Campus Public Amenity Scheme

銀賞 / Silver prize

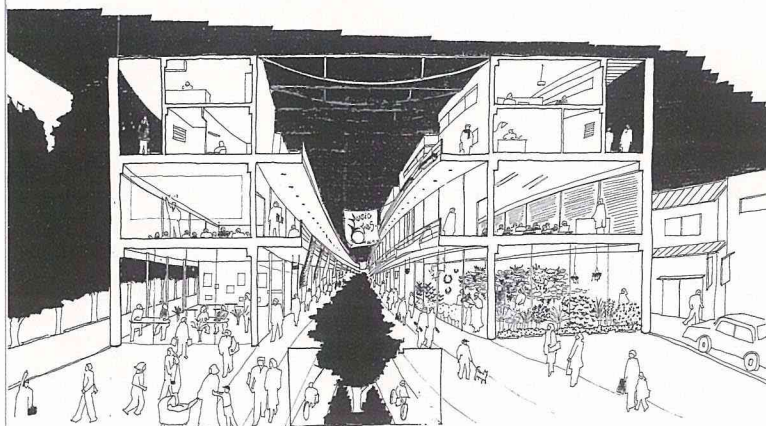
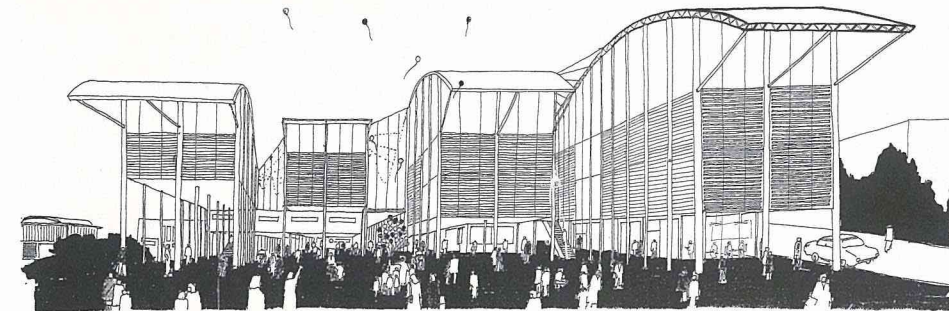
菅 菜々子  
Nanako Suge



ground plan



site plan



■東工大キャンパスは目黒区大岡山、緑が丘、大田区石川台と高密度な都心の住宅地の中で比較的広大な敷地を占めている。しかしふだんは学生と教授が行き来するのみの場であり、周辺住民にとっては内部で日々何が行われているのか知りにくい、大きなブラックスペースといっても過言ではない。私はここに、より周辺に開かれ、その土地に溶け込んだキャンパスを提案する。

■敷地は東急大井町線大岡山駅の地下化ともなう地上部と、キャンパスに接する東側住宅地の一角である。キャンパス周囲に巡らされている塀の代わりに、リニアな建築が周辺からの人びとを受け入れるゲートの役割を果たすとともに、遠く離れたキャンパスとキャンパスをつなぐ役も果たす。周辺住民、学生の皆が利用できる共用スペースとして計画した。

# エリック・パリー氏大学院特別授業

## Intensive Studio Work for Post-graduate Students

TIT建築設計教育研究会の助成による海外建築家の大学院設計授業が行われた。

今回の特別授業は、山下和正運営委員の紹介により、イギリスにおいて第一線で活躍されているエリック・パリー氏によるものである。

約1カ月にわたって大学院生に対し集中的なスタジオ・ワークを行っていただき、院生にとって貴重な経験を得る機会となった。

学生は3人が1グループとなり、イギリスでのスタジオと同様に、密度の高いディスカッション、プレゼンテーションを幾度も重ねることで、自由が丘駅前にホワイエと留学生宿泊施設を中心とした複合施設の計画の提案に挑んだ。ここにその成果を紹介する。

### Tokyo Foyer (Student Hostel)

このプロジェクトは、出発点として、われわれが世界を体験する場合に共通する人間的な条件のうち、2つの側面である“若者(Youth)”と“ディスロケーション(Dislocation)”をテーマとしている。

若者とは、自らが生まれ育った安全な場から離れ、職業、パートナー、子供といった、より永続的な存在に焦点の当てられた世界に定着していない集団を意味する。これは、人生の中では不確実であるが、非常に創造的(時には破壊的)な時期であり、そこには選択にともなうリスク、つまりわれわれがもてる能力がどのようなものであっても、その能力を発揮してしまうというリスクがある。成長するに従って減少する経験は、経験の強烈さでないならば、量的に減少してしまうものであ

る。若者はまた社会の良き批判者である。彼らは地位や責任のために妥協することが少なく、社会的な受け入れられやすさといった点からみれば、ギリギリのところまで発言してしまうことができるのである。なぜなら彼らは権力や地位にともなう重荷に苦しむことがないからである。

ディスロケーションは、自らの文化的な環境を奪われたときに経験する疎外を意味する。それは病気の状況や病院の環境といった極限状態で経験するが、ある程度は、旅行時、また初めての環境下でも経験する。

日本の制度、文化、産業を学びたいと考え、日本を訪れる若い外国人が年々増加している。この課題はそのような外国人を受け入れる施設の設計を求めるものであり、より永続的な

居住施設への前段階として6カ月を限度とした短期間の滞在を想定する。

このホワイエ建築は、若者にとって楽しく創造的な空間、そしてより大きな都市風景の形成に寄与するならば、出会い、対話、経験を共有する可能性を最大限に重視するべきである。

これらの要求に応える建築物の形式は、個人に供する部分を最小限に留め、共有部分・参加部分を最大化するものになるであろう。

この建築物はまた、街路/都市のコンテクストといったパブリックな世界と、個室/書斎といった私的領域とを調停する機能も要求されることになり、これまででない宿泊施設として位置づけることができるであろう。

#### ●計画内容

建築物内には以下の施設を設定する。

- ・個室(50室以上)
- ・カフェ/レストラン
- ・レクチャールーム/パフォーマンススペース
- ・カウンセリングサービス
- ・インフォメーションサービス
- ・クラブ/ディスコ
- ・コインランドリー、バスルーム、トレーニング室
- ・ワークショップ/スタジオ施設
- ・管理人宿泊施設

1ヵ月というスタジオ・ワークとしては、大規模なプロジェクトであるため、3人の学生がひとつのグループとなって取り組む共同製作の方式とする。最初のコンセプトを決定する段階で、3人の学生が共通のコンセプトを議論し、それに合意した上で、敷地に対する概略の配置計画を決定しておく。その後、個々の学生が異なった立場から以下の役割分担をもとにそれぞれの計画を発展させる。

#### 1. 建築物全体の計画

##### ◆都市デザイン、部分の配置

##### ◆構造

##### ◆2. および3. との協調(建築物の外観について)

\*ドローイングは1:200, 1:100

\*模型(規定ではない)

#### 2. パブリックエリアの計画

##### ◆レストラン

##### ◆クラブ/ディスコ

##### ◆ワークショップ/スタジオ

##### ◆コインランドリー、バスルーム、トレーニング室

\*ドローイングは1:50, 1:20

\*重要な部分のディテール

#### 3. プライベートエリアの計画

##### ◆個室

##### ◆1. および2. との協調(ディテールについて)

(例:ファサードの材質とデザイン)

##### ◆個々の家具や建築物の部分的なデザイン

\*ドローイングは1:20, 1:5, 1:2, 1:1

\*ディテールのスタディ模型

##### ●日程

11月14日 課題説明

11月17日 スライドレクチャー

11月20日 スライドレクチャー・講義

11月21日 中間発表:各グループの全体的なコンセプトについて

11月24日 各グループとのディスカッション

11月27日 講義

11月28日 中間発表:個人割当分の計画について

12月5日 最終発表:各グループ・個人割当分

12月8日 各グループとのディスカッション

12月11日 講義

12月12日 各グループとのディスカッション

12月15日 最終講評

\*12月6日 18:30~19:30 特別講演

19:30~20:30 懇親会



## 講評 エリック O. パリー

ケンブリッジ大学の建築コースでは1年間で進めるプログラムを、1カ月と少し(約5分の1の期間)で行うという野心的なアイデアをもって、私は日本を訪れた。15人の学生が3人ずつグループを組み、最初は全員で共同作業・討論をする。1人はバランスを考えながら全体構想を進め、もう1人は共有空間を計画する。最後の1人は住戸ユニット、特に家具など建築の細部をデザインする。そして5つのグループがそれぞれ、都市、建築、インテリア、そしてプロダクトデザインに取り組むというものである。

結局、それは忙しい設計事務所が請負った仕事のように、私には面白く思えた。そのような中で、ファッション界でスポットライトを浴びる宝石の類ではない、社会の実現者としての建築家の精神を育むのである。

こうした考え方に立てば、都市デザインの中での建築は、記念碑に綴られた詩でなく、日常生活の中から生まれる詩、いわば道端の詩学として理解できる。結局、その建築は既知の文化状況のために環境を創造するものである。

建築の文法を通して表現され、さまざまなスケールで現れる構築的・素材的な条件から読み取られる空間の特徴と、占有が深く共鳴し合う関係は、私が学生に対して設定した課題の基礎であり、核心である。

担当教官の方々からアドバイスをいただき設定した敷地は目黒区〔自由が丘〕にある。交通量の多い乗換駅に発生した都市空間として、また公共領域のスケールと居住領域のスケールからなる背後の建築群とを調停する場として、ここは理想的であった。

われわれの提案は、したがって、自律性あるいは開放性・閉鎖性の程度を考察する必要があった。それがこのプロジェクトの公私性を適切な形で反映させることになる。そうい

う意味でこの建築プログラムは特徴的であった。つまり、都市居住の条件を最小化し、公共領域を最大化するものである。設計条件として、若い外国人来訪者を短期間居住させること、クラブ、食事施設、図書室やワークスペースなどの施設が求められた。

意見交換は真剣であった。講評時を想起すると、日本の建築に関する広範な最近の議論が凝縮されていた。これは次のようないくつかの理由による。

●考え方の近い者でグループを組んだ学生たちは、それぞれが東工大の違った傾向を表現していた。

●出題された設計条件の広さゆえに、都市デザインと素材による表現の両面からの議論が可能となった。それはまさに今、日本やヨーロッパの建築について最新の話題となっている点でもある。

結果として、学生たちには、私が帰国した後も、その計画を発展させるために、また外部からの審査員による適切な批評に応えられるように時間を割いてもらえれば良かった。それでもなお、私にとって非常に刺激的な経験で、日本の洗練された文化について、多くのことを学んだ。



懇親会にて(左からパリー氏、山下和正氏)

位のレベルまではあってほしいと思うのだが、今回は基本計画レベルにも達していないのではないかと思われた。

なぜこうなるのか端的に言えば受け入れ体制がないからのようである。招聘授業が特別授業という位置づけで、正常のカリキュラムの中に入っていないため、学生諸君が十分な時間をさくことができないようになっていることや、授業時間・学習時間が非常に多いにも関わらず、それに見合ったような修学単位が与えられていない。せつかく費用や手間をかけて立派な料理を作っても、学生には食べる時間がなく、しかも他の食事で満腹状態であれば、いくら食べてみたい料理でも無駄になってしまう訳である。

東工大建築学科の工学系教授の中には、建築設計の勉強は大学院などでのアカデミックな授業や研究になじまず、個人のセンスで自由にやればよいという考え方があるが、とんでもない誤りである。設計はすべての建築の勉強の中でもっとも総合的思考を必要とする分野であり、それなりの論理があり、少なくとも大学院レベルでは専門化して、ちゃんとした勉強時間や修学単位を与えるべきである。忙しい学生が片手間にスタジオに参加して、形だけ整えてもたいして意味はない。設計志望の学生には全身全霊を設計にかかむけることのできる環境を作ってあげることが必要である。

学科内での「計画学系」とは別の「設計系」の専門的独立が必要ではなからうか。

## 講評 TIT建築設計教育研究会運営委員 山下和正

今回の授業は原稿を書いている今から6ヵ月も前であったため、個別の作品の講評を再度記述するには、細部の記憶も定かでないので、外国人建築家招聘システムの効用についてふりかえてみたい。

TIT建築設計教育研究会のサポートのおかげで、外国人建築家を招聘して、外国流のスタジオ(設計製図)を東工大の学生に体験してもらう機会をつくり得たことは、国立大の制度の中では比較的うまくいったことではあった。トム・ヘネガン(英)、アンドレア・リアーズ(米)、ヴォルフガング・デューリング(独)の各先生と続いて、次が今回のエリック・パリー先生(英)となった訳である。しかし今回の講評に参加して、学生諸君の作品を見せていただいた正直な感想は、少々がっかりであった。何かがっかりかといえ、図面内容がまだ「設計」といえる程度に煮詰まったものが、ほとんどなかったということである。基本図面がちゃんとそろっていないものもあった。このような学生の課題作品は内容的には、実務レベルでいえば基本設計までは無理としても、基本計画と基本設計の中間

山下和正  
Kazumasa Yamashita

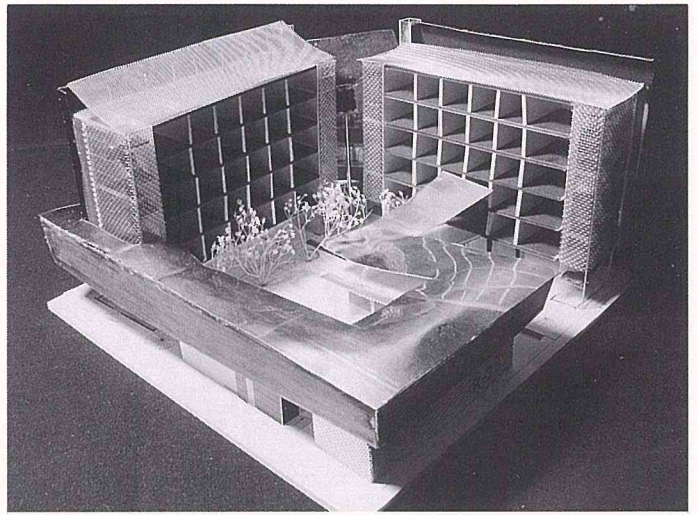
1937年 愛知県生まれ  
1959年 東京工業大学工学部建築学課程卒業  
日建設計工務(現日建設計)勤務(69年まで)  
1964年 シュナイダー・エスレーベン教授建築事務所  
1965年 大ロンドン市(G.L.C)建築局  
1966年 コーリン・S・ウィルソン教授建築事務所  
1969年 東京造形大学デザイン学科助教  
1971年 山下和正建築研究所設立  
1990年 東京工業大学工学部建築学科教授(93年まで)  
主な作品: フロムファーストビル(日本建築学会賞)、三春町岩江小学校、文教大学湘南キャンパスなど

エリック・オーエン・パリー  
Eric Owen Parry

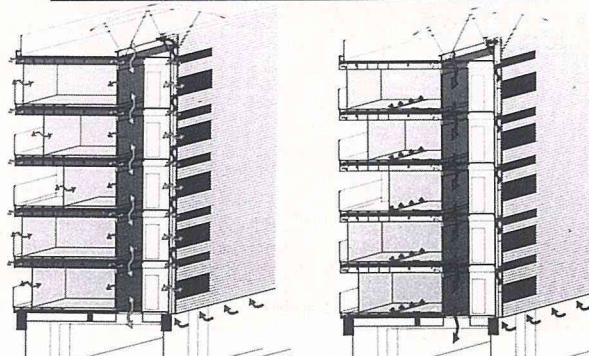
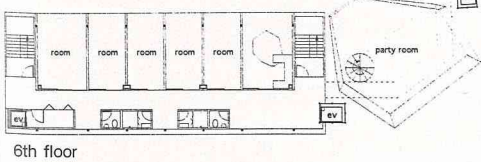
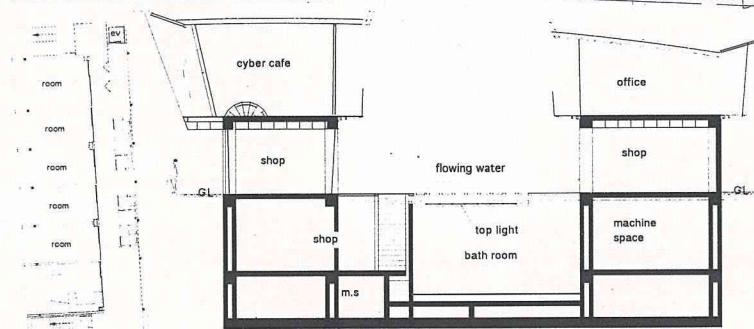
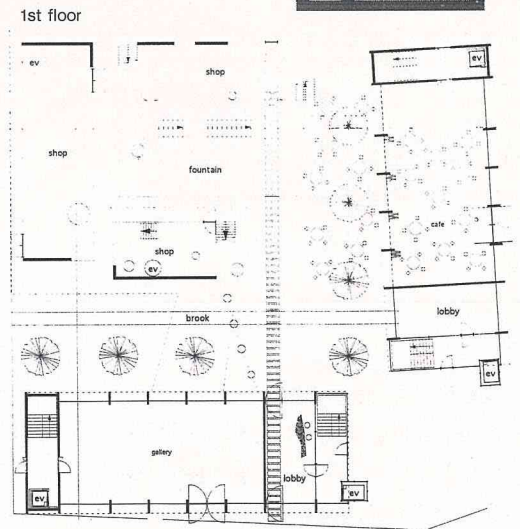
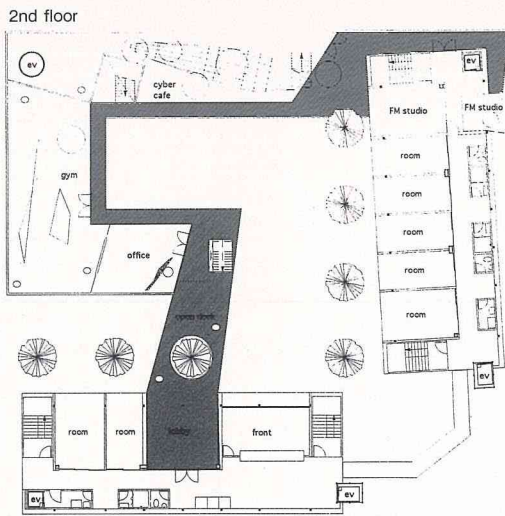
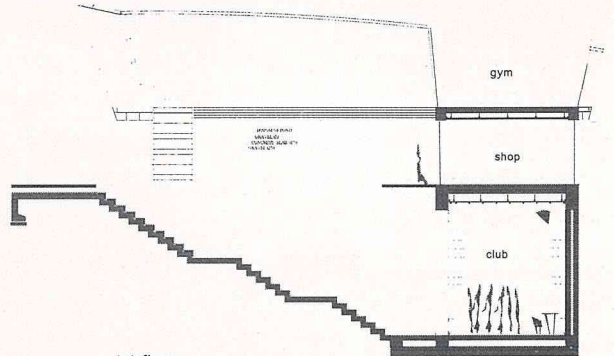
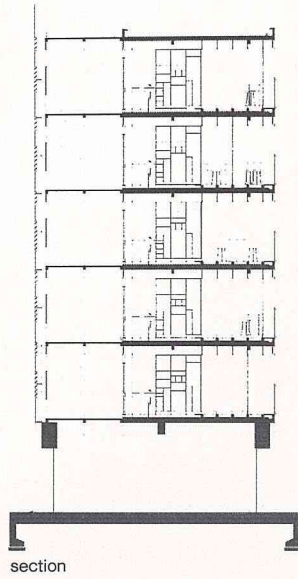
1981年 Eric Parry Associatesを設立、所長を務める。  
1990年 EP Associates Ltd.を組織。その後、建築の設計を手がけると共にコンペにも多数入選。  
ケンブリッジ大学講師を務め、'83年建築学科のスタッフに加わる。他にもハーバード大学('88)、ヒューストン大学('88, '92)などの大学院でスタジオを開講。  
またウエストミンスター大学、バートレット建築大学、ノースロンドン大学、エディンバラ大学などで外部審査員を歴任。第9回FIBA評議委員会委員。95年からイギリス芸術評議会建築部門副委員長、宝くじデザイン評議委員

# Group 1

梅野圭介 Keisuke Umeno  
 加用雅信 Masanobu Kayo  
 比護結子 Yuko Higo



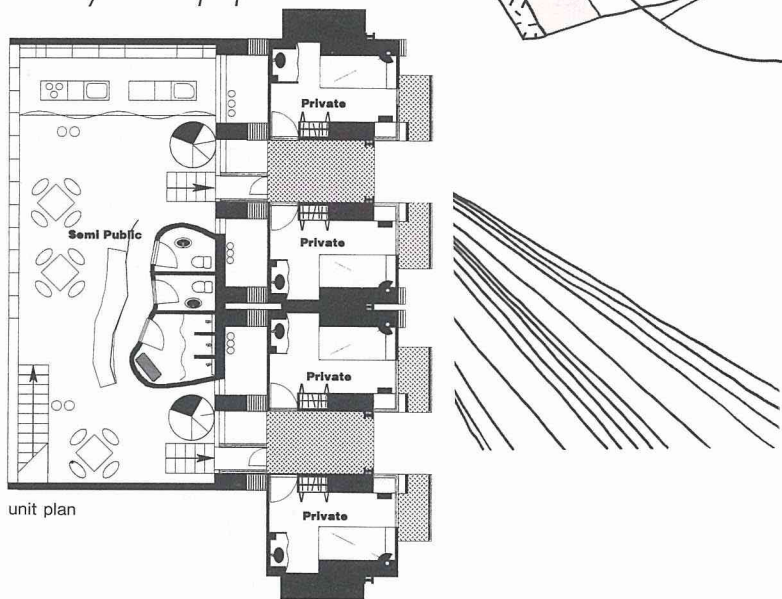
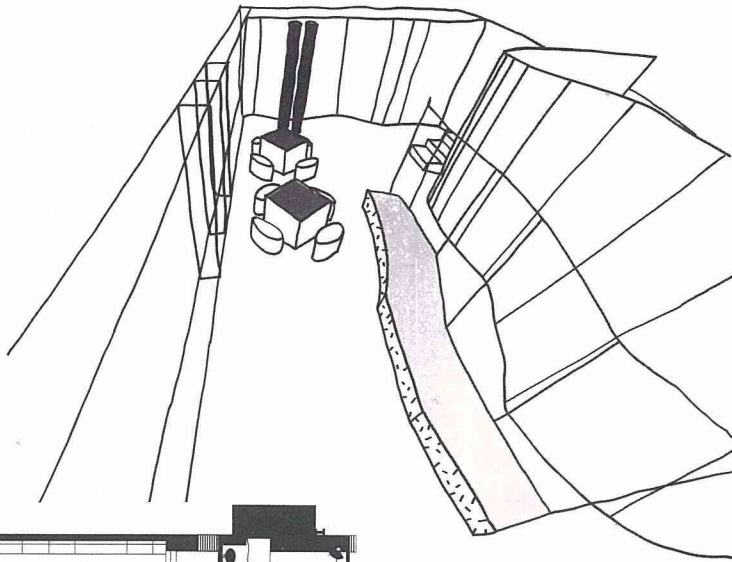
- private
- public
- room
- skin
- sanitary
- shop
- cafe
- media
- gym
- bathroom
- club



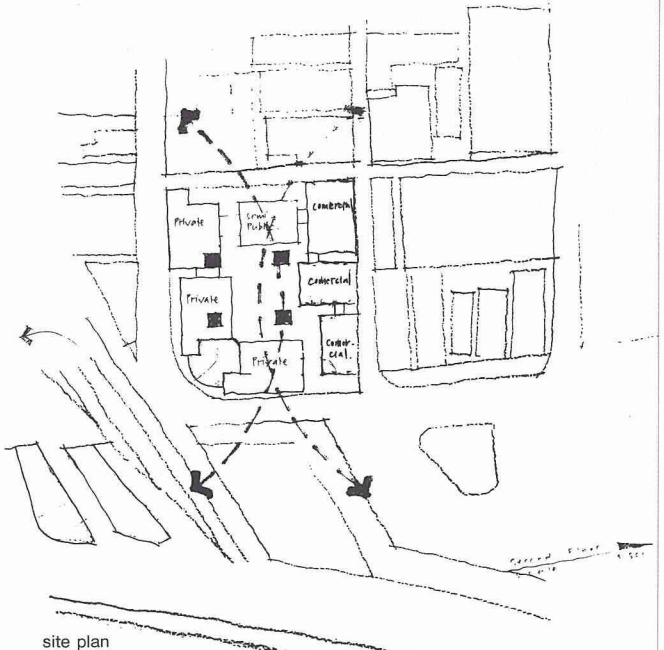
■このプロジェクトはシンプルな構成で、駅前ロータリーと踏切に面した敷地の東側と南側を世界中から訪れる若い人びとが短期滞在できる居室（プライベート）、北西側をメディア・ステーション（パブリック）とした。居住棟は、1階のガラスの透明な箱（ギャラリーとカフェ）と、2階から6階までの黒い量塊（居室）の対立がゲートの役目となり、人びとを公共の銭湯、インターナショナル・ショップ、フィットネス・ジム（地域的交流）、FM局とサイバー・カフェ（世界的交流）へと誘う。また、3つのレイヤーで構成された居住棟は、通りから順に、ウエット（水廻り）、外部空間的（グレーディング床の廊下）、ドライ（居室）な空間で、黒い二重外壁とルーバーによるベンチレーション・システムをもち、バルコニー側の窓を動かして部屋の広さが変えられ、床は畳のユニットを並べ替えられるフレキシブルな居室である。

# Group 2

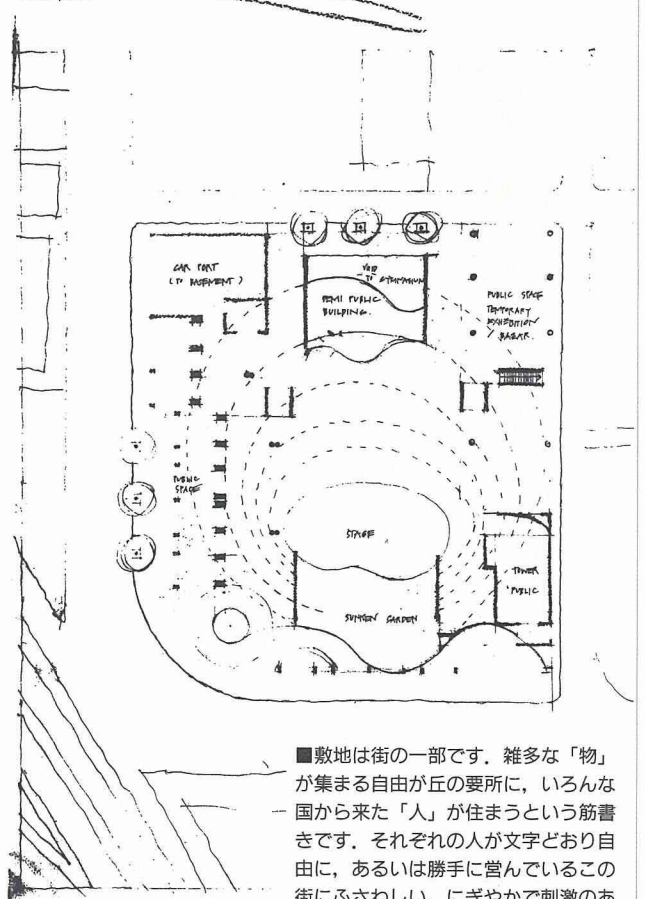
仲 胆 Makoto Naka  
 渡辺 拓 Taku Watanabe  
 メリナ・ブルハン Merina Burhan



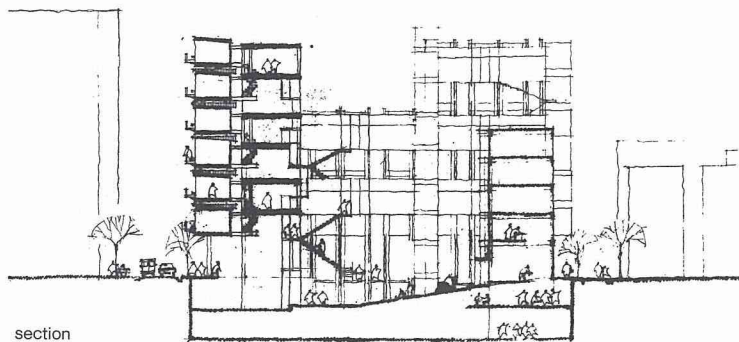
unit plan



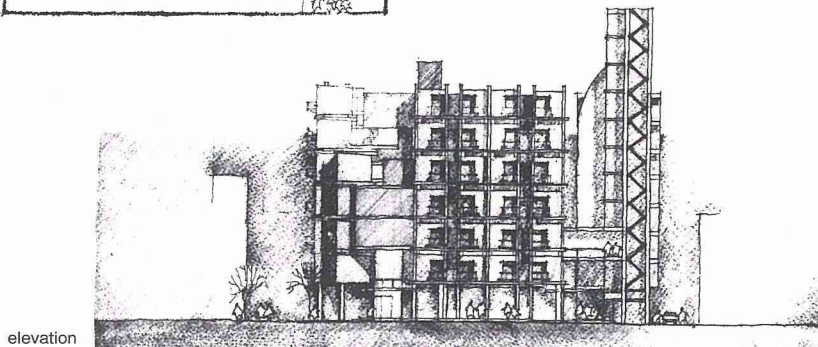
site plan



1st floor



section

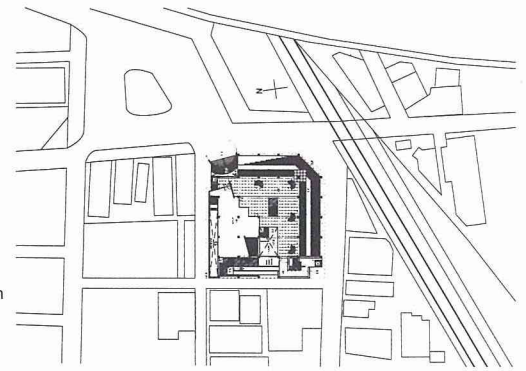


elevation

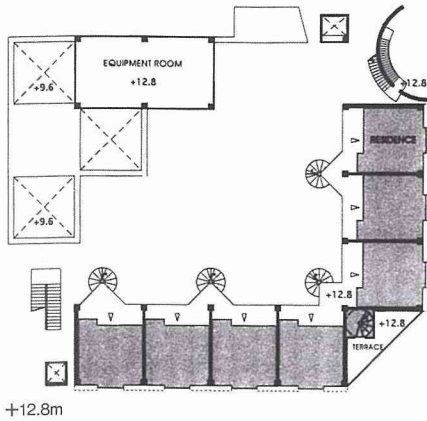
■敷地は街の一部です。雑多な「物」が集まる自由が丘の要所に、いろんな国から来た「人」が住まうという筋書きです。それぞれの人が文字どおり自由に、あるいは勝手に営んでいるこの街にふさわしい、にぎやかで刺激のある場所を作ることが目標です。■この境界は意識することなく、自由に通り抜けられます。敷地の内側の傾いた広場に向けて入口を開き、人びとを上へ導きます。すり鉢状に掘られた広場では、地べたに座っておしゃべりができます。この広場は自由が丘の一部で、この部屋に住む人はこの広場の上に住んでいるのです。■日本に来たばかりの住人にはコミュニティを提供します。彼らはここで個室に住みます。個室8戸につき用意されたひとつの大きなリビングは、彼らの生活の「ステージ」です。雑然とした自由が丘の街に、雑然としたビルを作りました。広場でひとつにされた敷地は建物によってバラバラにされ、人の動きによってもう一度ひとつになるのです。

# Group 3

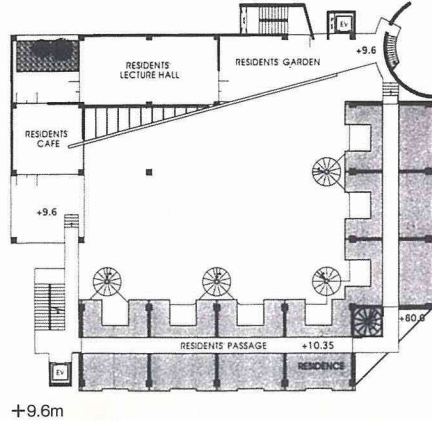
小田宗治 Muneharu Oda  
 芝田義治 Yoshiharu Shibata  
 中村 孝 Takashi Nakamura



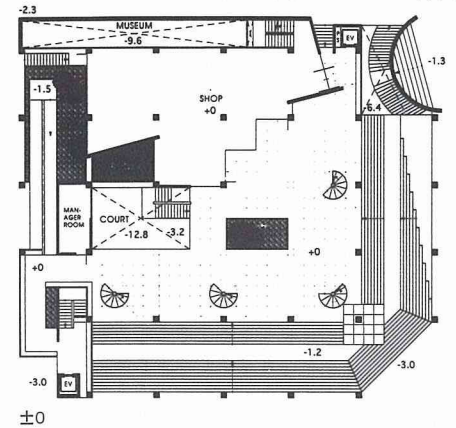
site plan



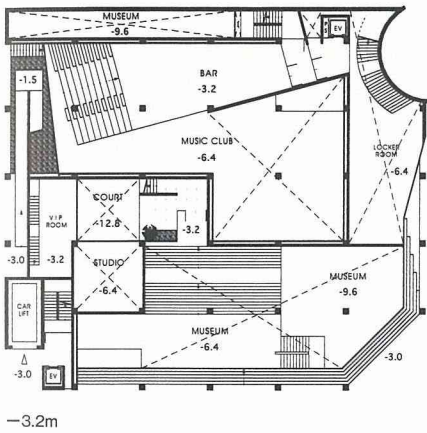
+12.8m



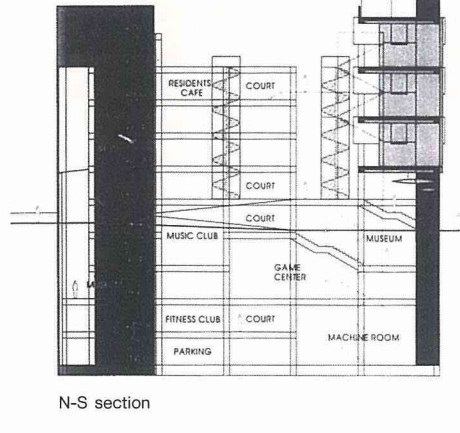
+9.6m



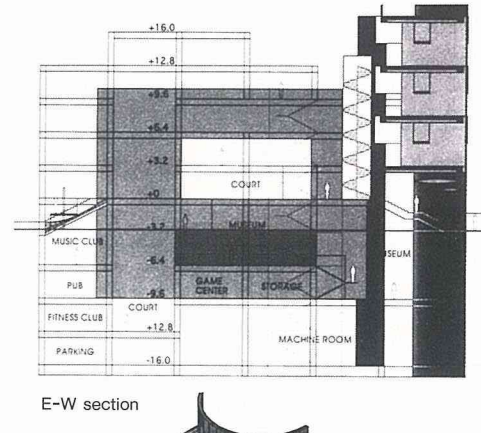
±0



-3.2m

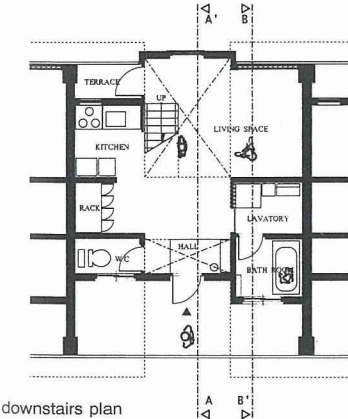


N-S section

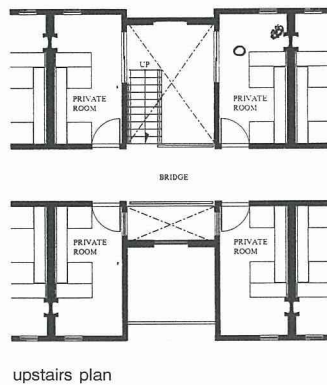


E-W section

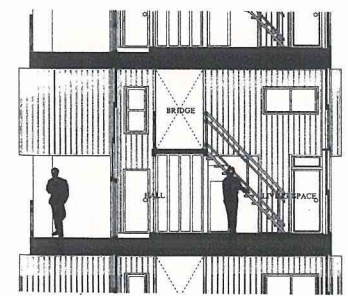
dwelling unit



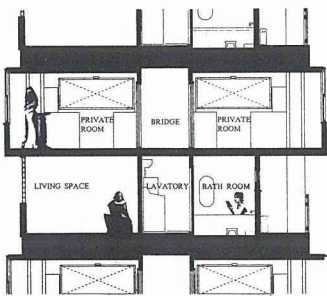
downstairs plan



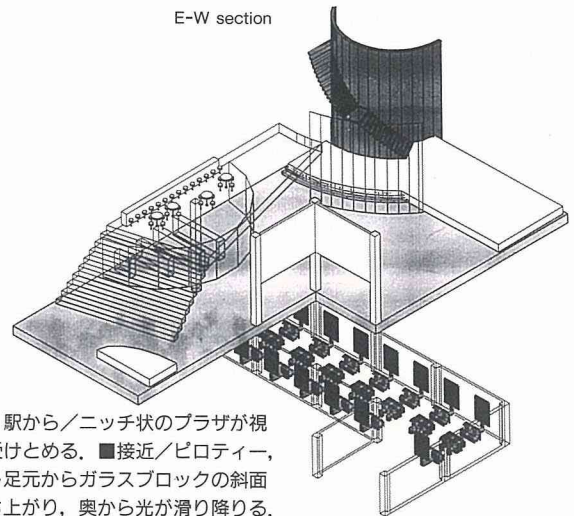
upstairs plan



A-A' section



B-B' section



全体：駅から／ニッチ状のプラザが視線を受けとめる。■接近／ピロティ、しかし足元からガラスブロックの斜面が立ち上がり、奥から光が滑り降りる。■侵入／柱の林をくぐり抜けると、光の降り注ぐ「丘」の上に出る。包まれた中庭。  
 公共部分：駅前広場からつながる地下1階には、バーやステージなどを備えたクラブがある。その下では大画面に映し出されるゲームがリアに立ち並び、ガラス越しにクラブを演出する。人工的な光と音で構成されるこの空間は、若い世代の同時代的なカウンターカルチャーの競演でもある。  
 住居部分：4人をひとかたまりとする

ユニットの集まりからなる。各ユニットは2層にわたり、階下のセミ・プライベートルームにはバス、キッチン、トイレなどが、上階にはプライベートルームとブリッジが置かれる。ブリッジは各ユニットを繋ぐ役割をなすとともに、住人だけに開放されるインパタント・パブリックへ通じる唯一の通路でもある。このブリッジによって、恣意的に分けられた4人ごとのユニットはよりフレキシブルなものとなる。

# 実在する建築へ

Toward an Architecture of Reality

非常勤講師

柳澤孝彦先生に聞く

Visiting Takahiko Yanagisawa, Lecturer

インタビューー

千葉 洋 Hiroshi Chiba

小倉 哲 Satoshi Ogura

本田 哲也 Tetsuya Honda

佐々木省悟 Shogo Sasaki

勝木祐仁 Yuji Katsuki

インタビューは神田にある、柳澤先生の事務所で行われた。私たちの質問に対し、学生時代の話、設計論など一つひとつ丁寧に話くださった。

柳澤先生の学生時代のお話をお聞かせください。

小学生の頃から絵に強い興味がありました。高校3年の頃にはほとんど毎日絵を描いていました。夭折の画家、佐伯佑三が大変好きでした。画家になりたいとも思っていたのですが、進路を決める段になって建築の方が良いかなあと迷って、それ以来建築の道歩くことになりました。大学では入学早々から、課題課題の連続でした。いつも要領悪く徹夜ばかりで……。

大学時代は学生寮で生活していました。ここでは美術学部、音楽学部の連中が一緒でして、分野を越えた交流が楽しくもあり、また今に思えば実に有益な時だったと思います。寮ではピアノや楽器が鳴っていましたし、音楽の発声練習もあり、小屋裏では油絵の制作をしている者がいて、互いに親しく交わったものです。

当時の建築の教授は吉田五十八先生、吉村順三先生がプロジェクトレビューで、辛口の批評が恐かったです。山本学治先生からは構造力学をはじめ、建築の意味を学びました。ギーディオンがテキストのひとつでした。他の先生にも薫陶を得ました。また美術学部のみならず、音楽学部の他の分野の先生や学生と行き来することができたことは有益な経験でした。たとえば、油絵なんかは林武とか梅原龍三郎とか、往時の第一人者たちでした。

われわれが入学したての時ですが、教授には学生に教えることは建築家として日々設計活動をしている合間である、と言われました。すなわち教育のための教育というものではな

くて、建築設計活動をしている社会性の中に建築家の卵を育てるのだというスタンスを明示されました。そういう影響もありまして、かなり実質的でしたね。

今でも建築というのは図面を描いただけではなくて実存するものの建築をめざして、その完成をもって建築というべきだと思いますね。私は建築はそういう実在するものが最終的にめざすものだと思っておりまして、図面から始まって実に多くの人びとの手になってできあがる建築の実在化へのプロセス全体を体験すべしと考え、竹中工務店の設計部へ入りました。山本学治先生もその方向を支持してくださいました。

竹中工務店に入社されてからの仕事についてお聞かせください。

竹中工務店の設計部で感じた特色というのは3つあります。まず「多種」のものを設計の対象とすること。倉庫や事務所もあれば、劇場や映画館もあるし、新築ばかりでなくて改修もある。選んではいられない。そしてそういったプロジェクトを「多量」に手がけることとなります。

課長にもなると、計画プロジェクトも含めて何十件とくるわけです。そしてそれらが「同時」に動いているという特色があります。そしてスピードがなくてはいけない。なぜスピードが必要かという非常にコンセントレートした思考の積み重ねが設計の質を決めるといえるのかもしれないからですね。今日考え抜いた結論が明日考え抜いた結論に変わる、その何回もの繰り返しの果てに洗練された結論というものに近づいていくのです。

ですから私の事務所でも、全体を徐々に先細りに固めていって最後に結論がでるというのではなくて、いろいろな切り口のところから同時にスタートするんです。そうすると最後まで到達できない壁にぶつかるアプローチもあって、他の切り口から行った方がもっとレベルの高いものに到達しそうだというようなことも見えてくる。私はそれを斥候を送るというんだけど、あらゆるところから斥候を出して、状況に応じた判断、結論というようなものを絞っていく。そういうアプローチが信頼性のある設計に向かう方法だと信じてい



ます。

入社されてからプリンシパルになるまでの流れというのは？

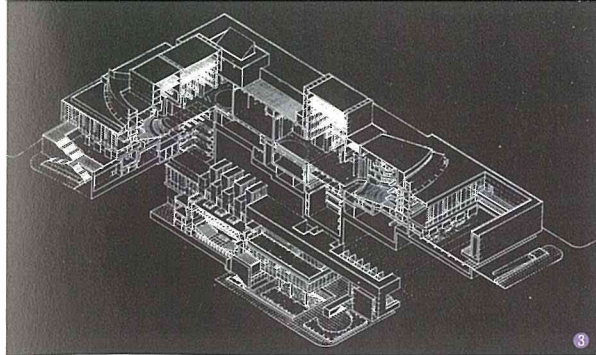
最初は便所と階段ばかりやらされました。大変な建築の設計チームに入れられまして、いくつもある便所と階段ばかりをやるうちに、設計と現場の関係が理解できるようになるのだと思います。たとえ便所であろうと構造や設備と意匠の関係が他の部分の縮図のように交錯しているのです。その後の設計部では計画プロジェクトの多くを短時間でまとめることをかなり長い期間担当しました。1日で複数件のプロジェクトの概要設計です。

それからだんだん実施が多くなりましたね。それから海外で実務を鍛えたいとも思っていて、サンフランシスコの竹中支店に半年間情報収集や建築視察を主目的に駐在員となり、その後、ニューヨークでコーネル大学のホテル設計のためのサマーセッションに出た後、コンクリン&ロサントという事務所に入れてもらって、大きな住居プロジェクトのチームで設計活動をしました。竹中設計部の時に、大小多数の建築設計の機会が得られたことは誠に幸運でした。有楽町マリオンビル1期、大手町センタービル、日蓮宗久遠寺大本堂など多数を手がけました。

二国のコンペで1等を取り独立された。そのTAK独立の頃のお話を。

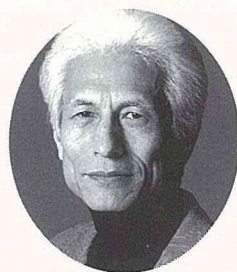
たまたま二国は私がデザインプリンシパルの時に担当することになりました。二国はコンペの4年ぐらい前から準備をはじめていました。オペラハウスは日本にないものでしたし、圧倒的に西洋のものでしたから、ヨーロッパに範をたれるべきだと思いました。とりわけドイツは伝統的な舞台芸術があると同時に、現代の舞台芸術も実にいきいきとすること





- ① 岡岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
- ② 郡山市立美術館
- ③ 新国立劇場
- ④ 東京都現代美術館

柳澤孝彦  
Takahiko Yanagisawa



- 1958年 東京芸術大学美術学部建築学科卒業
- 1981年 竹中工務店東京本店設計部長
- 1985年 竹中工務店プリンシパル・アーキテクト
- 1986年 「第二国立劇場」国際設計競技で最優秀賞受賞

TAK 建築・都市計画研究所設立

主な作品：真鶴町立中川一政美術館（吉田五十八賞、BCS賞）、郡山市立美術館（BCS賞）、窪田空穂記念館（日本建築学会作品選奨）、「郡山市立美術館および一連の美術館・記念館の建築設計」で日本芸術院賞、東京都現代美術館、岡岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館、設計中：新国立劇場、東京オペラシティ

に着目して、部下の1人をドイツに1年留学させました。早くから最終案のスケッチは私なりにではできあがっていましたが、あらゆるオルタネイトをつぶして、その優位性を確認しました。十分に練り上げたという実感はありましたが、今でも基本は揺るがないものとなっています。

いよいよ基本設計が正式にスタートしたときでしたが、当時第一線で活躍している舞台関係の人びとを延べ250人に及ぶ規模でヒアリングをしました。指揮者、オペラ歌手、ステージマネージャー、照明家、裏方でやっている人たちなどなど。つぶさに設計図を前に声を聞いたんです。その時建築家と舞台関係者の間には多くのディスコミュニケーションがあると感じました。これはいかんかと思いましたが、とにかく劇場を観客の側からしか見えない、という疑問が強くクローズアップされました。むしろ劇場は舞台裏の方から攻めてきて、表の方へとデザインを発展させるほうがいいのかもかもしれないという気がするくらい、いろいろ複雑なものがあるなという気がしました。

#### ふだんの事務所での設計の過程は？

代表であろうと所員であろうとデザインの上ではフィフティーフィフティーである、そう思って提案を出し合うのです。もちろん最終的に決断するのは私ですが、決定時にはその理由を皆に明示しています。

特に美術館の設計が多いと思うのですが、設計する上で常に気をつけていることはありますか。

美術が何であるかということ深く考える必要があると思います。その考えの中に美術館を位置づけることが大切だと思っています。また、劇場だったら舞台芸術、オペラの歴史

やその意味といったものにどっぷりつかって建築というものを反対側から見るのが大切だと思います。建築馬鹿になっちゃうと中からしか見られない。建築以外の分野から建築を覗く方がよりはっきり見えてくる。それには多分野への好奇心が必須でしょう。その意味で広い分野に対する好奇心というのは学生時代にもっと培養しておく必要があるのではないのでしょうか。

#### 先生にとって優れた建築とは？

美しくまた豊かな空間をめざしたいものです。空間は不可視なものです。それを視覚で捉えようとするあまり、本来の空間性を見失っているものもありますね。空間を立ち上げるための要素は壁や床や窓でしょうが、それらはもちろん可視的な範囲の中で直接的にデザインの対象になるべきものですが、その「間」に残った空間こそが求めるものなのでしょう。空間にはいろいろな力が発動しています。風、熱、匂い、そして居合わせる人びとが送り出す気配などなど……。全身で感得するものが空間というものでしょう。ですから、そういう空間をちゃんとつくりあげている建築が素晴らしい建築だということでしょう。

#### 社会的に建築家というのはどうあるべきだと思いますか？

私はあまり様式論というのは好きじゃなくて、建築というのはやはりさっき言ったみたいに住む人、使う人は人間で、人間の本質を見極めて建築を作るとというのがいつの時代にも必要じゃないかなという気がするんです。時代にどうコミットするかということはむしろ時代が決めることかもしれないと思っているんですよ。時代が変わっても人間の本質というのは急には変わらない。とすれば、そういう物差しではかれる本質、つまり普遍性を備え

るべきだと思います。今の時代という視点をあえてとるならば、それはリージョナリティーだと思います。個性や場所性です。

いまや個人が世界とつながるという情報化社会です。個と全体との関係というものに非常に興味があるんですね。今までは個というものが集まって全体というものを作るというヒエラルキーがありましたけれども、今はそうではなくて個と全体とが直結する時代だと思うんですよ。たとえば地方発信の文化がそのまま世界をゆるがしたりだとか、ますます個人というものが重要になってくる。たとえば平準化した都市や文化をどう立て直すかは、今や個人や地域の「個性」です。

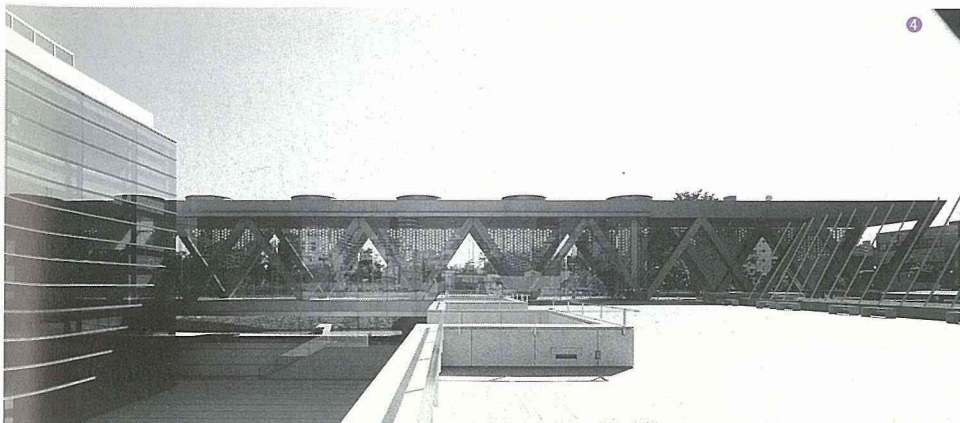
#### 興味をもたれていることと、今後こういう建築をやりたいということとは？

町並みのデザインというのは地域ぐるみでやっていきたいですね。というのは建築は環境の中で命を分有していると思うんですよ。ひとつの建築の存在は、あたかも人びとが社会の中にあって初めて生きられるのと同じで、社会の命を分有しているのです。社会の風景の一要素です。ですから私は建築のみのデザインだけではなく、その周辺環境を含めたデザイン展開が重要だと言いつづけているのです。

#### 最後に今の学生にアドバイスを。

とにかく好奇心は旺盛でないと建築は生まれないということですね。好奇心の幅というのはあらゆる所に広く、それから感性を育てるためにも、建築以外の部分にどっぷりつかるといっても大事だと思うんですよ。またそういうことを蓄積できる唯一の期間だと思うんですよ。

印象的なのは、JIAのセミナーに参加した人のコメントが、「建築の勉強というよりは、建築家の勉強ができたこと」であったことです。





1953年 長野県生まれ  
1975年 東京工業大学工学部建築学科卒業  
1977年 同大学院修了、横山建築構造設計事務所入社  
1992年 金箱建築構造設計事務所設立  
主な作品：(横山事務所にて)夢の島熱帯植物館、水戸芸術館、熱海リフレッシュセンター、東京国際フォーラム、麻生町民体育館、(金箱事務所にて)京都駅ビル、新京橋交流プラザ、水戸第三高校体育館、姫路市水道資料館、泉村ふれあいビジターセンター  
著作：『建築・土木のことがわかる事典』



山先生には実務のことは教わらなかったんですが、構造設計者とはどうあるべきかという精神訓話みたいなことをしょっちゅう聞かされてきました。

そうこうしてるうちに10年くらい前、磯崎さんの水戸芸術館という建物の構造設計を横山事務所OBで構造設計第一人者の木村俊彦さんと一緒にやることになりました。僕がたまたま水戸出身ということもあって担当になり、設計を1年、その後現場を2年間担当しました。

そこで木村先生とのつき合いが始まり、水戸の後は東京国際フォーラムの設計に参加しました。これは少し変わっていて、木村事務所OB4人と僕というグループでの設計となりました。フォーラムの設計が一段落した時、原広司さんの京都駅ビルの構造設計を木村先生がやることになり、「おまえは東京フォーラムから手をひいてこれをやれ」といわれました。基本設計が終わったときに横山事務所を辞めて今の事務所をつくりました。だから事務所の初仕事は京都駅ビルのアトリウムなんです。

#### ■ 独立のきっかけは？

ひとつは僕が独立する何年前に横山先生が亡くなったことです。僕自身ある時期から自分の事務所をもちたいという事は思っていたんですけど、なかなかきっかけがなかった。ある時すごい決断をして辞めた、とかはないです。そろそろそういうふうにしたいと思っていた時は仕事が増えてきていて、東京フォーラムの設計と現場をきちんとやり終えたく

らいに思ってたなら、また京都駅ができたし、しいていえば同年代の知り合いの建築家たちが活躍し始めてきたことです。そういう建築家が横山事務所ではなく、僕に仕事を頼みたいと言ってくれるわけです。そうなってくると、自分のスタンスをちゃんとしなくてはいけないなと思いつつ独立したわけです。

#### ■ 阪神大震災に関して、構造家としてどんなことを考えられましたか？

僕は3つのことを思ったんですよ。ひとつは「構造家と社会」。要するに今まで世の中の人は地震に対しての安全性について間違った認識をもっていたということです。確認申請を通るとみんな安全だと思ってしまっているんです。建築家の中にもそう思っている人が多いと思います。構造設計としては確認申請はパスしてはんですけど、自然現象というのは単純ではなくて、よく分かってないこともあるし、今の設計基準を守っていれば絶対に安全というわけではない。われわれサイドからの情報の出し方とかアピールが足りなかったんじゃないかということですね。

2つめは監理の重要性ということです。設計して図面を描いて施工業者に渡しますよね。その図面をもとに施工していくわけですが、その時に設計者の意図したことが伝わるかどうかということを確認することが監理ということなんですけれども、これが意外といい加減なんです。僕の事務所では小さい建物でも監理に相当労力を使っています。

それからもうひとつは、逆に考え



瓜連小学校体育館(建築設計：三上清一)

るとあれだけの地震に耐えた建物もあるんですよ。地震に対する安全の問題っていうのは大事なんですけど、捉え方をまちがってしまうとネガティブな方向にだけしか考えられないというのはどうもまずいんじゃないか。たとえば安藤さんの建物なんかはほとんど被害がなかったそうです。あの人の建物は壁が多いっていうことはあるかもしれないけど、オリジナルな空間を作っているのも丈夫な建築もあるんだ、ということもちゃんと見なくては、何がなんでも地震に強い建物をつくれ、というんじゃないかなって思っています。

#### ■ 今後、やってみたいと思ってる構造はありますか？

「混構造」というものに興味もっていて、実際の建築設計の中でも大きなテーマとして取り組んでいます。“混合”というのはいろいろあって、コンクリートと鉄というように“材料の混合”、曲げ材と引張材を組み合わせるといった“部材の混合”、またラーメンと壁式構造を組み合わせるといった“架構の混合”などがあると考えています。

しかし、同じテーマをずっと追求していきたくないという気持ちでもないんですよ。むしろいろんな建築家が考えてるいろいろなことに合わせて、自分なりに何ができるかということをつかえていこうというのがむしろ楽しいと思ってるから。だから研究のようにひとつのことをずっとつきつめていくよりは、いろんなことができて楽しいです。

#### ■ 他の構造設計家と比べて金箱さんは特殊な方ですか、それともみんなこんな感じですか？

たぶん特殊な方だと思う。僕らの世界は大きく2つに分かれます。僕らはアトリエ派とかアトリエ構造事務所といわれ、もうひとつはゼネコンの設計部も含めて大手組織事務所という世界があります。

アトリエ派であっても建物の規模

はずいぶん大きなものをやっている。われわれの方が発想が自由ですね。

「建築ありき」で設計をやろうってのがあるからでしょう。

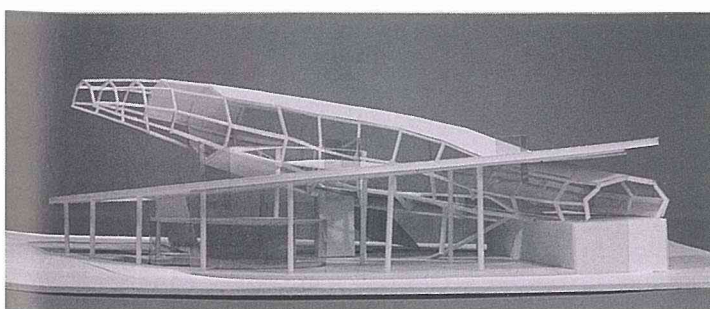
それと構造設計者というのは意外と受け身の人が多い。ある程度建築が進んで、枠組みが決まってから自分たちが何かをするというような捉え方をする人がすごく多いですよ。僕はいつも構造設計者として主体性を失わないことを心がけています。

#### ■ 構造の勉強してきた学生でない構造設計というのはやっぱり難しいんですか？

計算見てぞっとするという人はやっぱりね(笑)。だけど必要条件であっても十分条件ではないですよ。今、コンピューターが出てきているので力学の仕組みをある程度理解していればよく、複雑な計算のプログラムをつくらなければいけないという時代ではないんですよ。だから変わったことをやりたい時にもいろいろと条件を変えて検証ができるんです。今は割と楽しいと思うんです。その分いろいろと考えたりとか、模型を作るとかね。

#### ■ 最後に今の学生にアドバイスをお願いします。

自分は何が好きか、自分が打ち込む対象を見つけるのは大事ですね。あといろんな経験をすればいいと思いますよ。デザインやってる方は建築の雑誌とか口コミ情報とかで割と実態を理解してると思うんですが、構造設計は学問ではないのでなかなか学校では教えられる。非常に残念だなと思うんですね。だからこういう世界もあるってことを知っていてほしいですね。こういう世界なら構造設計をやりたいとか、構造設計が好きなのももっと出てくると建築がよくなるんですよ。いいエンジニアがでてくると建築家も幸せになると思うんです。



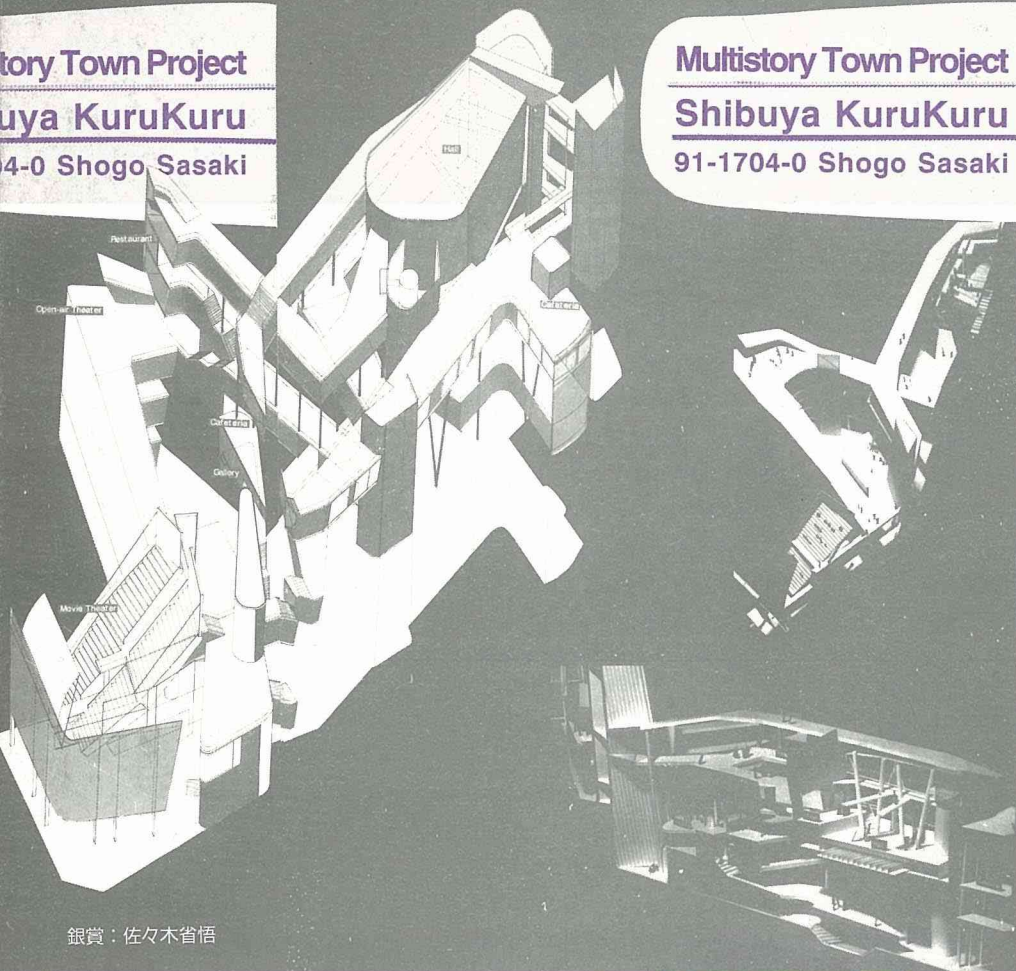
新京橋交流プラザ(建築設計：荒木正彦)



Ka No.12 1996  
 design journal of  
 the department of architecture  
 and building engineering  
**Tokyo Institute of Technology**  
 published by TIT society  
 of architectural design education

編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会  
 委員長／仙田満 委員／八木幸二 三上貴正 堀田久人 奥山信一 團紀彦  
 事務局／井上寿  
 発行：TIT建築設計教育研究会  
 定価：800円

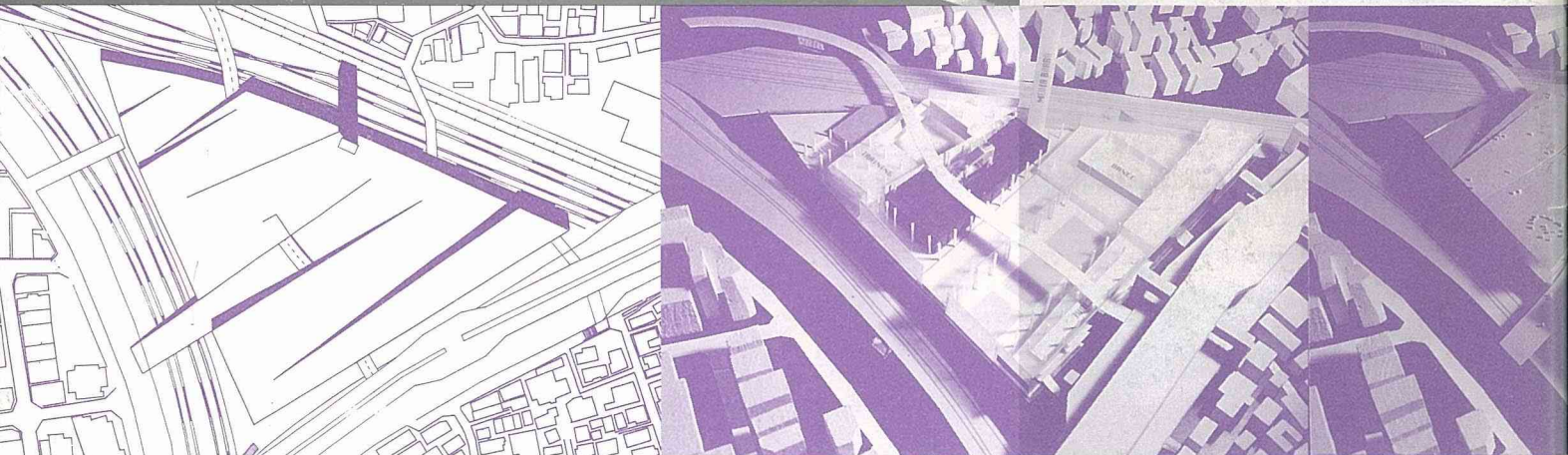
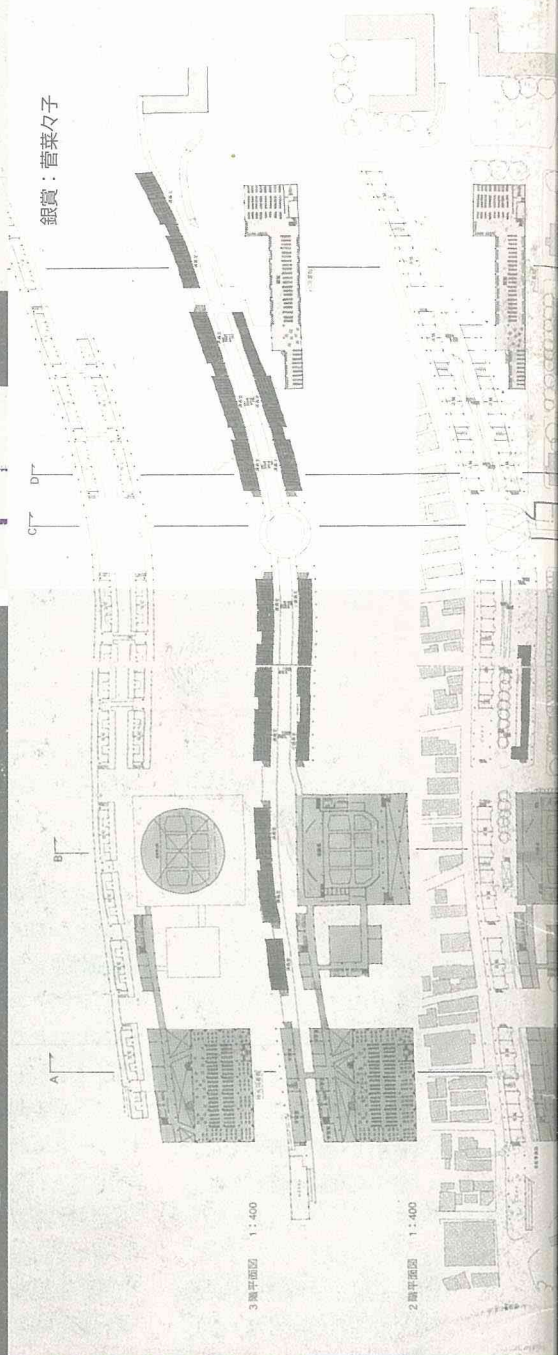
**atory Town Project**  
**uya KuruKuru**  
**4-0 Shogo Sasaki**



**Multistory Town Project**  
**Shibuya KuruKuru**  
**91-1704-0 Shogo Sasaki**

銀賞：佐々木省悟

銀賞：菅菜夕子



銀賞：久野靖広

編集協力：(有)松井編集室 翻訳：デビット・スチュアート 取材協力：建築学科修士・研究生有志 印刷：三共グラフィック株  
 Edition: "Ka" Editorial Committee, chairman/Mitsuru Senda member/Koji Yagi Takamasa Mikami Hisato Hotta Shinichi Okuyama Norihiko Dan  
 secretariat/Hisashi Inoue translation/David Stewart  
 Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology  
 2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-5734-3163